

仮面ライダー妖

ちくわぶみん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

周囲を山と海に囲まれた自然豊かな街、御景市。

しかし、一見平和に見えるこの街には、不気味な噂が数多く渦巻いていた。

御景市立要石学園の3人しかいないオカルト研究部、篝火頼人と犬山春歌、豆田鉄平
はある日、頼人が家で見つけた古い交霊紙でこつくりさんを始める。

しかし、その交霊紙は今まで日本全国に広まっているこつくりさんに使われる紙の
原典だつたのだ。そして、現れた小狐の妖怪『コワポン』は三人に告げる。

「この街の人々を守る為、力を貸してほしいコン！」

これは周囲を森と海に囲まれたとある街にある、市立高校での出来事だ――

この作品はエミヒロ君との共同制作作品です。

表紙の妖狐は辰ノ命さん（ID：218517）よりいただきました！

目次

69 第二夜〔夜叉、来たる〕(3/3)

		第三夜「鬼を纏う術師」	1
40	「五行院への誘い」	第四夜	——
	「妖怪と怪異（前編）」	第五夜	——
序章	「妖怪と怪異（後編）」	第六夜	——
「第一夜」「こつくりさん、おいでください」	「妖怪と怪異（後編）」	第七夜	——
「二夜」「こつくりさん、おいでください」	「怖映え？ ジドリくん」	第八夜	——
「三夜」「夜叉、来たる」（2／3）	「守護者の意地」	第九夜	——
「四夜」「化ける妖狐」	「化ける妖狐」	第十夜	——
「五夜」「犬の哭く夜」	「犬の哭く夜」	第十一夜	——
「六夜」「三つ首の人狗」	「三つ首の人狗」	第十二夜	——
56	27	159	139 127 113 100 84

第十三夜「夜明け」

幕間「先輩と後輩」

256 244

仮面ライダー妖 設定資料集

妖用語設定

・五行院・古来より人々を数多の魑魅魍魎から守護してきた、陰陽師や靈媒師などの術師によつて構成される組織。

京都の陰陽寮を基盤としており、日本の各都道府県に支部が存在する。

役割によつて部署が分けられており、妖怪を祓う実働部隊『祓人』はらえびとや、情報の統制や管理を担う『情報部』、妖怪や怪異の能力や生体などを調べる『研究部』、各種アイテムを開発する『開発部』などがある。

また、次世代の術師達を育成する養成校としての役割も担つており、特に『仮面ライダー』となる術師が集まる「私立五行院退魔師養成学校 東京校」は、いわば“ライダー学園”とも呼べる場所となつてゐる。

・妖怪・古来より日本各地に伝わる伝承・伝説に登場する奇怪なる存在。その正体は遙か昔、この世界とは別の世界からやつてきたエネルギー生命体、『妖怪族』である。

人間の感情を吸収して生き、人間達の認識によつて姿形を変える性質を持つ。・怪異・近年になつて突如として現れた、詳細不明の異形の存在。妖怪族とは似て非なる

ものであり、人間の恐怖のみを糧として存在しているようである。

古来より語られる妖怪達と違い、近代の都市伝説に登場するおどろおどろしい怪異の姿となつてゐるのが特徴。

- ・仮面ライダー：契約した妖怪を鎧として纏い、妖怪や怪異と戦う戦士たち。

平安時代の術師らによつて開発され、安倍晴明が命名したと伝わつてゐる。

- 現在、オクリビドライバーで変身する術師のライダーと、キヤンドライバーで変身する非術師のライダーの二種類が存在する。

- ・契約：人間が妖怪から力を借りる際に行う認否承認の儀式。これにより互いの利害を照らし合わせ、力を引き出すサーフティラインを設定する。

契約せずにライダーに変身すると、後で取り返しのつかないことになるため必須である。

- ・**妖怪**^{ようか}：アヤカシチヤツカーに宿る仮面ライダー達のエネルギーリソースであり、妖怪達の身体を構成するエネルギーもある。

妖怪達は人間からの攝取、または契約による実体化で摂食したものを使換してこれを生み出しており、消費量が激しいと消滅してしまう。

火のように揺らぎ、輝きを放つ事から命名された。

- ・靈力：人間の体内を流れる生命エネルギーを指す。

生命活動を行う全ての知的生命体が持っているが、普通の人間はこれを身体の外に出力できることはない。基本的には修行で出力出来るようになるが、時折、無意識に靈力を扱える人間が生まれることもある。

妖怪を認識できるのは、妖怪の存在を信じている者のみだが、靈力が強い場合は信じているかどうかを問わず見えてしまう事がある。

・術師：靈力の扱いに長けた存在のこと。陰陽師や呪詛師などを引つ括めて指す言葉でもある。

・異能者：修行の有無に関わらず、無意識に靈力を扱える人間。妖怪族の血が流れている人間に多い。

・術式：靈力に指向性を与える、超常現象を引き起こす技。

術式は当人のイメージで構築されるため、異能者も無意識に行使している。

ただし、無意識で術式を行使すると制御が不安定になるため、使いこなすには修行による鍛錬が必要。

術式にはいくつかカテゴリーがあり、基本的な術式は『靈術』、妖怪が扱うものを『妖術』、

負の感情を束ねて他者を害するものを『呪術』と呼称する。

また、一族相伝で流派が分かれている特別な術式も存在し、その種類は多岐にわたる。

- ・（例：妖怪を祓う『陰陽術』や、召喚に特化した『降霊術』など）
 - ・妖術：妖怪達が自らの妖火をリソースとして行使する異能の力。
 - ・靈術：妖術を人間用にしたもののが靈術である。
- 妖術との違いは主に、術式に使っているエネルギーが靈力である事である。

仮面ライダー妖 本編

序章

気がつくと、夕闇に染まる茜色の空が目に入った。

ああ、またこの夢だ。

この夢を見るのも、これでもう何度目になるだろうか。

最初に見たのはいつ頃だろう？

少なくとも10年以上、僕は同じ夢を見ている。

身体を起こそうとして、動けない事に気がつく。

身体に力が入らない。そして、とても痛い。

訳が分からず困惑していると、何者かの気配に気がつく。

気配のする方を振り向くと……誰かが戦っていた。

黒い炎に全身を包まれた、真っ黒な影法師のようなものが何人もいる。

数は視界に入るだけでも20を優に超えており、ゾンビのような動きで身体を揺らし

て蠢いては、ある一点へと向かっていく。

まるで、影だけが地面から這い出してきたようにも見える不気味な集団と戦っていた

のは——腰に不思議な形のベルトを巻き、緋色の狐の仮面を被つた男の人だつた。

『ハアアアアツ!!』

狐の顔のような意匠の武器を片手に、たつた一人で何人もの化け物を蹴散らしていく。

うねる盛炎を刃に灯し、振り抜く刀で敵を斬り。

刀と思われたその武器は、赤炎を吹く銃にも変わる。

そして、その人が纏う装束もまた、炎に包まれていた。

いや、もつと詳しく言うなら、ベルトを中心に炎が全身を廻っているように見えた。

悪と戦うヒーローのようなその姿に、思わず痛みも忘れて見入ってしまう僕。

だが、何体かの化け物が、急にこちらへと方向転換して來た。

声もなく、ただこちらへと向かってくる影法師たち。
逃げようにも身体は動かず、思わず目を瞑る。

『その子を頼む!!』

その時、狐面の男が手に握つた何かをこちらへと向ける。その何かから放たれた緋色の炎が、宙を駆けるように向かってきた。

炎は僕と影法師たちの間に割つて入ると、壁のように広がつた。

すぐそこまで来ていた影法師の何体かが燃え尽き、他の影法師たちが立ち止まる。

そして、炎の中から現れたそれは、僕に背を向けて立ち上がる。背を向けているから、顔はよく見えない。

こつちから見えるのは、着物の後ろ姿には煌々と燃え盛る炎を灯したフサフサの大きな尻尾と、頭の上に生えた三角の獸耳だけだ。

狐……で間違いないと思う。

着物姿で、人間のように2つの足で立つ、成人男性くらいはある大きな狐だ。
その狐がこちらを振り向き、そして……

——そこで、いつも目が覚める。

「……またあの夢、か」

枕元でジリジリ鳴っている目覚まし時計を止める。ベッドから降りると、少し伸びをしてメガネを掛けた。

日本各地の妖怪に関する書籍で埋め尽くされた本棚とか、ノートPCやゲーム機が置かれた勉強机とか、いつもの見慣れた自分の部屋が視界に広がっている。目覚めた時間もいつも通りだ。

「今日の夢、今までで一番鮮明だつたな……」

不定期ではあるが、10年近く見続けた同じ夢。それが最近、昔よりも鮮明になつて來てる気がする。

昔はもつとボヤけていた筈なのに、今ではBluRayで見た映画くらいの解像度だ。

「やつぱり、これの影響……なのかな？」

ふと、視界の隅に入つたものへと視線を移す。
部屋の真ん中にある折り畳み机。

その上には、黄ばんだ古紙が拡げられていた。
見ようによつては古文書みたいに見えるそれは、先日、家の蔵から見つかった爺ちゃんの遺品だ。

そこに書かれているのは、達筆でとても古い文字。

でも、内容は詩とか俳句、ましてや宝の地図や秘伝の奥義書なんかでもない。

降靈紙。いわゆる「こつくりさん」に使われるものだ。

爺ちゃんの蔵を整理していた際、たまたま見つけたそれには、不思議な何かがある気がした。

むしろ、僕がこれを見つけたのは偶然じやなくて、導かれたんじやないかとすら感じている。

これを見つけて以来、あの夢が鮮明になつて來た。きっと何かしらの因果があるはずだ。それも今日の放課後には分かるかも知れない。

うん、燃えてきた！オカルト研究同好会の部長として、この謎は必ずや解き明かしてみせる！

「今日の放課後か……。破れないよう気をつけないと」

「頼人！起きなさい！遅刻するわよ！」

その時、部屋の向こうから母さんの声が響く。

「はい！今行くよ！」

拠げていた降霊紙を丸め、紙管へと片付ける。

それをリュックの中へと仕舞うと、僕は部屋を後にした。

……この日を境に、僕らオカ研を巻き込む色々怪々な日々が始まるなんて、まさか夢にも思わないよね。

第一夜 「こつくりさん、おいでください」 1／2

「「コツクリさん、コツクリさん、どうぞおいでください」」

放課後とのある教室、3人の生徒が集まり、その儀式は行われていた。

室内は明かりが落とされており薄暗く、窓は黒いカーテンが光を遮っている。

「「コツクリさん、コツクリさん、どうぞおいでください」」

机の上には黄ばんだ古紙。筆で達筆に書かれた文字は、五十音と数字。『はい』と『いいえ』の選択肢。選択肢の中心には、朱墨で鳥居が描かれている。

そして3人は、一本のローソクだけを光源として、古紙の鳥居に置かれた十円玉へと人差し指を伸ばしていた。

「「コツクリさん、コツクリさん、どうぞおいでください。もしおいでになられましたら、『はい』へお進み下さい」」

言い終わつた瞬間、十円玉が置かれた鳥居が赤く光を放つ。

「えつ……!?」

「なつ、何!?」

「光つたああああ!?」

驚く3人の目の前で、光は部屋の天井へ向け柱と立ち上る。

すると、赤き光柱の中から小さな影が現れた。

「何か出てくるよ!?」

「もしかして、これがコツクリさん!?」

「ウソウソ!?まさか本当に……!?」

やがて、光が徐々に弱まっていき、光柱の中から現れた影の輪部がハツキリとしていく。

光が完全に消えた時、そこに居たのは……。

「ココ→ンツ!!」

「「ツ!?」」

尻尾に炎を灯した、手乗りサイズの小さな狐であつた。

「コホン、ボクを……じやなかつた。我を呼び出した人間は、お前達であるか?」

数秒の沈黙が室内を支配した。

少し不安になつたのか、子狐が先に口を開く。

「あ、あれ……?ボク、何か間違えちゃいました?」

「な……何これえええ!?」

「可愛いいいいい!!」

一拍遅れで出た3人の声が、部屋から廊下全体へと響き渡った。



「改めて、自己紹介させもらうコン」

そう言つて子狐は、机の上に置かれたハンカチの上にちょこんと座り、ペコリと頭を下げる。

「ボクはコワポン。この度、コツクリさんを襲名致しました。若輩者ですが、どうぞよろしくお願ひしますコン」

「コツクリさんにも襲名制度とかあるんだ……」

「なんだか、意外に人間っぽいね」

あの後、2人の男子生徒が部屋の明かりを点け、女子生徒が購買でお茶を買って来る事となつた。

女子生徒が戻ると、3人は念の為に部室の鍵を閉め、カーテンを降ろしてから、コワポンと名乗つた子狐に話しかける。

「まさか、噂のコツクリさんがこくんに可愛いだなんて!! 撫でてもいい?」「へっ!?えっと……それは今じやなきやダメコン……?」

「春歌、気持ちは分かるけど、初対面の……それもまだ自己紹介さえ終わつてないのに撫でようとするの、失礼だろ?」

「あ、言われてみると確かに……」

赤毛の男子生徒にそう言われ、コワポンを撫でようとしていた女子生徒は、慌ててその手を引っ込める。

「じゃあ、僕から。僕は篝火頬人かがりびらいと。このオカルト研究同好会の会長さ」

「あ、頬人するい！私、犬山春歌いぬやまはるか！よろしくね！」

「頬人さんに春歌さんですね。そちらのお名前も教えて欲しいコン」

「ま……豆田鉄平まめだてっぺいつス……よろしくつス……」

赤毛の少年、頬人と栗色のショートヘアの少女、春歌はコワポンに対して興味津々といった様子だ。

逆にポチャッとした体型の1年生、鉄平は少々腰が引けた状態でいる。

3人の中で一番怖がりなのが見て取れた。

「それにしても、コツクリさんが目の前に現れるなんて……」

「ねーねー、どうして出て来てくれたの？」

「ふー……ふー……あちち……。って、そうだったコン!! 吞氣にお茶飲んでる場合じや

なかつたコン!!」

「うわあああああ!? 脅かすなよお!」

「なになに、どうしたの!」

突然何かを思い出したように、天井近くまで飛び上がったコワポン。驚いた鉄平が尻もちを着き、頬人と春歌はコワポンを見上げる。

「ボクには使命があるんだコン！ ゆっくりしてられないんだコン！」

「使命？ 使命って何だ？」

「それは……これから説明させてもらうコン」

そう言つてコワポンは机の上に戻つて来ると、ハンカチの上に座り直す。

「ココン……。单刀直入に言うコン」

そして、3人の顔をそれぞれ見回すと、咳払いをして語り始めた。

「この世界、つまり人間界は今……狙われているコン!!」

「「「へ？」」

一瞬の沈黙。不安になつてきたコワポンは慌てて続けた。

「惚けてる場合じやないコン！ こうしてゐる間にも、奴らは息を潜めながら魔の手を伸ばしているんだコン！！」

「ちよつと待つてよ!? 奴らつて何？ それに、狙われてるつてどういう事？」

「狙われてるつて事は、宇宙人の侵略とか!? それとも悪の組織による国家転覆の陰謀みたいな!?」

「春歌先輩、話が飛躍し過ぎじやないつスか？」

春歌の飛躍した解釈に、鉄平は少々呆れ気味なツッコミを入れる。

「うん……後者に近いと言えば近い……ような……」

「そうなの!?」

「わーい当たったー！」

「マジっスか!?」

しかし、思わず答えに思わずズッコケかけた。

春歌の突拍子もない飛躍論が当たる事など、そうそう無いのだ。明日は槍でも降るのでは、と思つてしまつた事は内緒である。

「この世界の外には、人間とは違う姿や文明を持つ存在が住む世界があるんだコン。その世界の住人達は『妖怪』の名を与えられ、大昔から人間達と共に存してきたんだコン」「妖怪の世界だつて!?」

「何それ!すつごく面白そう!!」

「よ、妖怪の世界い!?聞くだけでもおつかなさそう……」

三者三様の反応を示しながら、頼人達はコワポンの話に耳を傾ける。

コワポンは静かに、その愛らしい語尾と共に話を続けた。

「でも、中には人間を支配しようとする悪いヤツらも居たコン。そんな悪い妖怪達と戦う為に、何人かの人間達と、善い妖怪達が手を組んで戦つて来たんだコン」

「妖怪と人間が手を組んで？それって、靈媒師とか陰陽師みたいな？」
 「その通りコン。そこで……3人には頼みたい事があるんだコン」

「頼みたいことって？」

首を傾げる頬人。怪訝そうな顔をする春歌と鉄平。

コワポンは3人の顔を見上げ、そして交互に見つめてから言つた。

「ボクらと一緒に、奴らと戦う『仮面ライダー』になつてほしいんだコン！」

「「え？……ええええええええ！」」

その日、2度目の絶叫が廊下へと響き渡つた。

□

その頃、市内某所にて――

「この学校ですか……妖界とのリンクがあつたのは」

暗がりから校舎を見つめる、黒いビジネススーツの男の姿があつた。

男の手足は異様に細長く、肌は白粉を塗つたように真っ白だ。纏う雰囲気はとても薄
 気味悪く、その姿はまさに「怪人」と称するのが相応しいだろう。

「ヤマノケ」

「へい」

男に呼ばれ、もう1人現れる白い影。

それは、首から上が無く、代わりに胴体に巨大な顔を持つ、真っ白な怪人だった。

「早急にリンクの元を見つけ出し、儀式を行つた術師を始末してきなさい」

「へへツ……仰せのままに」

黒スーツの男はそのまま、路地の暗がりへと溶けるように消えていく。

「その術師、カワイイ女の中だといいんだがなあ……へへへ……」

そして残された白い怪人は、不気味な笑みを浮かべながら校舎の方へと向かつていった。

「テン、ソウ、メツ……テン、ソウ、メツ……フヘヘヘ……」



「ボクの使命は人間界へ赴き、ボク達と一緒に戦つてくれる人間を探す事なんだコン。ボクを呼び出した君達には、その資格があるんだコン」

「いやいやいや!!ちよつと待つてよ!!話が全然読めないんだけど!!」

「お、おおおオレはお断りするつスよおおお!!」

「大体、どうして僕達なんだい? 僕達、別に靈媒師とか陰陽師つてわけじや無いんだよ

?

困惑するオカ研一同。

対するコワポンは、少し困ったように答える。

「それが……代々そういう習わしなんだコン」

「どうして？」

「なんでも、術師だけを集めると視野が狭くなる、と父う……じやなかつた。先代から聞いているコン」

「なるほど……力があるが故に、術師が驕つてしまふ事を抑制するためつスか」「そういう事コン」

よくある話だ。

人間は、大きな力を手に入れた時、自らを特別な存在であると思い込むようになつてしまふ。

靈力呪術を駆使する術師達の間でも、人間界を守護する役職である「仮面ライダー」は羨望の対象もあるらしい。

つまり、一般人を加える事で、楔としての役割を与えていているというのが慣習の由来らしい。

「それで……そもそも、仮面ライダーって何？」

「その質問を待つっていたコン！ 仮面ライダーというのは——」

その時、部室の外から悲鳴が上がつた。

「なつ、何スか今の！」

「悲鳴……ッ!!」

「行つてみよう!!」

3人は立ち上がると、部室の戸を開けて外を確認する。

「あつ、ちよつと待つコン!! 奴らの気配がすぐそこに——」

「1階の方からだ!!」

「よーし、突撃ー!!」

「ちよつとお!? 先輩方!?!?」

騒ぎの渦中へと一直線に向かっていく頬人と春歌。

残されたのは怖がつて一步出遅れた鉄平と、置いて行かれたコワポンだけであつた。

「2人を追いかけるコン!!」このままじゃ2人とも、奴らの餌食にされちゃうコン!!」

「えええ……!?

追いかけるべきか否か。足踏みをしていた鉄平だが、コワポンの言葉を聞き、やがて覚悟を決めたように彼を抱えて走り出す。

「ああもう!! 頼人先輩、春歌先輩、待つてくださいっスよおおお!!」

新たな戦士の誕生は、すぐそこまで迫っていた。

□

「うわあああああああああああああああああああああああああああああああああああ!!」

「きやああああああああ!!こつち来ないでよ!?嫌あああああああ!!」

校舎の1階。

そこでは逃げ惑う生徒達と、生徒らを追いかけ回す謎の集団という、異様な光景が広がっていた。

生徒らを襲っているのは、首から上が腐食したように崩れ落ちた牛の顔になつている、黒タイツの集団。

作り物にしてはリアル過ぎる顔だが、口角から垂れている涎と息遣いが、それが本物であることを裏付ける。

襲われた生徒達からは、おどろおどろしい色の靄が立ち上り、牛頭達の口へと吸い込まれていく。

そして、1階の隅にある非常口前。そこでは一人の女子生徒が怪人に追い詰められ、泣き叫んでいた。

「きやあああああああ!!ヤダヤダヤダヤダ!!来ないでええええええ!!」

「テン、ソウ、メツ……テン、ソウ、メツ……へへへ……もう逃げられねえぞお……」

不気味な低い声で謎の言葉を繰り返す怪人は、一本しかない足でケンケンしながら、両手をめちゃくちゃに振り回し、身体全体をぶれさせる程に揺れ動かして迫つてくる。一歩、また一歩と距離が縮む度に、泣き叫ぶ女子生徒の身体からも、暗く、おどろお

どろしい色の靄が溢れ、怪人の胸に存在する巨大な口の中へと吸い込まれていった。

「フヘヘヘヘ……やつぱりピッヂピッヂの女から奪う恐れは美味えなあ」

「嫌ああああああああ!!」

「おつと、逃げても無駄だぜえ」

非常口の扉を開けて逃げようとする女子生徒。

しかし、そこには……

「ウツシツシツシツシツシー!!」

「ウシー！ウシシーツ！」

「きやあああああああ!?」

生徒たちを襲っている牛の顔をした集団が、非常口の外で道を塞いでいた。

「ウシクビ 共！逃がすなよ？その女は、恐れを吸い尽くしてからゆつくりと遊ばせてもらうからなあ……へへへへ……」

「いやあああああああああああああッ!!」

「ガソッ!!

「……あん？」

女子生徒の悲鳴が轟いた次の瞬間、怪人の背中に命中したブリキのバケツが廊下を転がつた。

「その子から離れろ!!」

「寄つて集つて女の子襲うなんて、サイツテー!!」

バケツを投げつけたのは、2階から降りて来た頬人。

そして春歌は、箒を握り締めながら怪人をビシツと指さし、啖呵を切つていた。

「なんだお前らあ?」

「あんた達の方こそ、いきなり学校を滅茶苦茶にして、何様なわけ!?せつかくの放課後が

台無じじゃん!!」

傍から聞いてもかなり個人的な理由で憤る春歌。

しかし、頬人は怪人の姿を見て、顔色を変えた。

「ちよつと待つて!?頭の無い真っ白な体……胸に顔のある一本足……もしかしてお前、ヤマノケか!?」

「そうとも。巷で噂のヤマノケ様とは、俺様の事よ!!」

「ツ!?

一気に顔を強ばらせ、春歌を庇うように前へ出る頬人。

だが、春歌は頭上に疑問符を浮かべて首を傾げる。

「へ?・やまのけ……?あの、どちら様ですか?」

そこへ、鉄平とコワポンが追い付いてきた。

「頬人先輩、春歌先輩、早すぎつスよ。もつと周りをよく見て……って、出たああああああああああッ!?」

「いたコン!! あいつらが、ボクらと戦つてる悪い奴ら……」 怪異 „だコン!!』
ヤマノケの姿を見た途端に腰を抜かす鉄平と、鉄平の手元を離れ、宙にふよふよと浮
かぶコワポン。

すると、コワポンの姿を見たヤマノケが、ニタリと笑つた。

「見つけたあ……黒づくめが探せと言つっていた術師つてのは、お前らだつたんだなあ
……!」

その視線に射抜かれ、3人はビクッと肩を強ばらせた。

「ひよ、ひよつとして……俺達、結構ヤバいんじやないつスか!?」

「ヤバい……これ、かなりヤバいよ!?」

「もしかしなくてもこつち来たりする……よね……?」

「次の狙いは、ボクらで間違いないコンね……」

そして予想通り、ヤマノケはこちらへと振り返り、ウシクビ達へと命令した。

「奴らを捕らえろ!! 恐れを揺れるだけ揺つてから殺せえええ!! 女の方は俺様のモンだあ

ああああ!!」

「「「「ウツシツシー!!」」」

ヤマノケの号令と共に、ウシクビは頼人達の方へと向かつて走り出した。手には古びた鉈のような得物を持ち、ジリジリとにじり寄つて来る。

「うええ!? 私狙い!? ヤダヤダあんなキモいオツサン絶対無理!!」

「ひいいいい!? こつ、腰が……抜けて……うごごごご動けないっスううううう!!」

頼人の背中に隠れて震え上がる春歌。

腰が抜けて立ち上がれない鉄平。

そして廊下の前後より、周囲を囮るように迫るウシクビ達。

階段を登り2階へ向かえば逃げられるかもしぬれないが、それではいずれ追い付かる。

絶体絶命。もはや退路はなかつた……。

瞬間、頼人は部室でのコワポンとの会話を思い出した。

「コワポン！ 仮面ライダーになるには、どうすればいい!?」

「コン？」

「なるよ……僕が、仮面ライダーになる!!」

□

コワポンは一瞬、何やら考え込むような素振りをして、やがて尻尾の中からある物を取り出し、叫んだ。

「わかつたコン。頼人、これを使うコン!!」

「つと……これは？」

頼人の手の中にあつたのは、行燈のような形をしたバツクル。そして、真ん中に狐の顔のレリーフが刻印されたキツネ色のジッポライターであつた。

「そのドライバーを腰に巻いて、『アヤカシチャツカー』を点火させるコン！」

「えつと、こう？」

バツクルを腹部に当てるど、両サイドから出現したベルトが自動で巻かれる。

『キヤンドライバー』

続いてアヤカシチャツカー、と呼ばれたジッポライターを開けると、

『着火！キツネビ！』

という音と共に、赤い火がボウッと灯つた。

「チャツカーをベルトにセットして、レバーを引くんだコン!!」

「こうだな？」

『キツネビ！イヨ～ツ！』

言われた通りにチャツカーを装填すると、鼓を主体とした祭囃子がドライバーから鳴り響いた。

『コンコンコーン！コン、ココンコーン！コンコンコーン！コン、ココンコーン！』

「えつと……変身ッ!!」

『妖火意点火!』

レバーを引くと、バツクルの行燈が観音開きにパカッと開き、セットされたチャツカーから狐の顔の形をした炎が上がった。

『種火！篝火！狐の火！妖狐Y O Y O！ココンコーン!!』

ライバーから噴き出した炎は、頼人を取り巻くようにうねりを描き、やがて足元から全身を包み込む。

「ら、頼人!?」

「頼人先輩!？」

そして次の瞬間、頼人を包んだ炎が弾け、炎柱の中より“仮面ライダー”がその姿を現した。

第一夜「こっくりさん、おいでください」 2／2

所々に炎の柄が描かれた黒いアンダースーツ。

白地にファイヤーパターンの羽織には、背に墨字で『狐』の文字。ベルトの右腰には狐の顔を象った銃が。左腰には、チャツカーや3つまで収納できるホルダーが。

そしてオレンジ色の狐面は、勇ましさよりも未熟さ、もしくは幼さのようなものを感じ、優しい顔つきをしていた。

「な、なんだテメエは!?」

弾けた炎で数体消滅したウシクビに、胸にある顔の額に皺を寄せて驚くヤマノケ。腰を抜かした春歌と鉄平も、あんぐりと口を開けて彼を見上げる。

「頼人先輩が……」

「変身した……!?」

「ココーン!! その姿こそ、『仮面ライダー妖狐』！ ボクたち妖狐一族の力を纏う、熱き炎のライダーだコン!!」

「これが、仮面ライダー……」

頬人、いや妖狐は変身した自らの身体を見回すと、やがてヤマノケの方を鋭く睨み付けた。

「照らすぜ篝火、覚悟しろッ!!」

「かつこつけんな!! やつちまえ、お前らア!!」

「「「ウシシシーッ!!」」

変身した際の炎で数体が倒れたとはい、ウシクビはまだまだ20体以上は残っている。

迫つて来た一体に向けて、妖狐は真っ直ぐに拳を突き出した。

「おりやあッ!!」

「ウシーッ!?」

妖狐のパンチを受け、派手に吹き飛んでいくウシクビ。

「お、おおーっ!? 涙い!? 暖簾みたいに軽く飛んでった!!」

「それが仮面ライダーの力だコン!! その調子で全部やつつけちゃうコン!!」

「よーし！ やるぞーッ!!」

自分が本当に戦える力を得た事を確認し、今度は自らウシクビ達の方へと向かってい
く妖狐。

「ハツ！ ハアアアアアツッ!! どりやつ!!」

殴る、蹴る、打つ、払う。

単純な動きではあるが、一撃毎にその手足には炎が宿り、四肢を振るう度に舞い散る火の粉が並み居る怪異を焼き焦がす。

「たあッ!! ハアッ!! ゼやああああッ!!」

それはまるで、暗闇の中で松明を翳し、闇を払つて進んでいくかの如く。

飛び火した火の粉で身体を焼かれたウシクビは、熱さに悶えて隊列を崩し、統率が乱れていく。

しかし、ウシクビ達もやられっぱなしでは居られない。

「ウ～シ～ウツシ～!!」

一体が妖狐の背中へ向けて、腰から提げていた麻袋を投げつける。

麻袋は命中した瞬間、爆発した。

「ぐああああッ!!」

「頼人ッ！」

「頼人先輩ッ！」

麻袋の正体は“ゾウモツ手榴弾”。鉈と同じくウシクビの標準装備であり、中に腐食した臓物を詰めた手榴弾だ。

命中した物体を腐食させながら爆発させる、凶悪な武器。体制を崩した妖狐に向かつ

て一斉に、ウシクビ達はそれを投げ付けた。

「危ないッ!!」

春歌が叫んだ、その瞬間。

「左腰の銃で、一気に焼き尽くすコン!!」

「ツ?!そこだあああああツ!!」

降り注ぐ麻袋を、赤き炎が焼き尽くした。

「え……?」

「今のは……?」

「ふう……間に合ったコン」

起き上がった妖狐の手には、左腰のホルダーから引き抜かれた銃が握られていた。

『キツネビシユーター!!』

狐の口を象った銃口から発射された火炎弾が、ゾウモツ手榴弾を焼き付くす。

「ウ、ウシツ!!」

動搖するウシクビ達。

その一瞬が隙を作つた。

「頼人！台尻にチャツカ一をセットするコン!!」

「ツ！分かつた！」

ドライバーにセツトされたキツネビチャツカーを一旦外し、ウイツクの部分をキツネビシユーターの台尻へとセツトする。

『シユーター！ キツネビ必殺！』

チャツカーからの火を吸引し、シユーター上部に位置する狐の目が発光する。
「これで……終わりだッ！」

ウシクビ達へと銃口を向け、引き金を引きながら一回転する妖狐。

放たれた狐型の炎は円を描き、ウシクビを一体たりとも残さず焼き尽くした。

「す、凄い……」

「これが、仮面ライダー……」

圧倒される春歌と鉄平。

残るはヤマノケただ一体のみだ。

「やるじやあねえか！ 俺様が相手してやんよお!!」

ヤマノケは足を2本に分裂させると、両腕をブルンと振るつた。

ゴムのようにしなる腕は、空を切る音と共に伸び、硬く握った拳を妖狐へと叩きつける。

ひらりと身を逸らして躲す妖狐。

直後、防火扉がダンボールのように凹んだ。

「あつぶな!?」

「まだまだア!!」

「くつ!?」

左右の腕から2発、3発、4発と交互に繰り出される殴打を、廊下を転がりながら回避する。

轟音と共に壁や廊下が凹み、ヤマノケの笑い声が轟く。

「フへへへへへ……逃げろ逃げろお！潰してやるぜえ！」

「狭い廊下で暴れ回るなよ!!くつ……このままだと校舎が滅茶苦茶に……ツ!!」

一瞬のきの緩みを突き、拳の一つが妖狐を捉える。

巨大な鉄球をぶつけられたような感触とともに、妖狐は廊下の壁へと叩き付けられる。

「ぐああああああつ！」

「フへへへ……どうだ？ どうだあ!?」

「ぐうつ……うつ……」

壁にめり込んだ妖狐を嬾るように、平手で押し潰すヤマノケ。
 ミシ……ミシ……という音と共に、壁の亀裂が広がっていく。
 「マズイツス……このままじや頼人先輩が!!」

「コワポン！頼人を助ける方法とか、何かないの!?」

「いたいたたたたたた!!春歌先輩肩掴むのやめてくださいといつスううう!!」

春歌は思わず、鉄平の肩を掴んで揺さぶる。

するとコワポンは、フサフサの尻尾の中から更に2つのアヤカシチャツカーを取り出した。

1つは青い狼の顔が、もう1つには栗色の狸の顔が彫り込まれていた。

「出来るコン！このチャツカーで、アイツに妖火を放つてやるんだコン！」

2人は渡されたチャツカーを手に取る。

「ほ、本当にやるつスかあ……？」

「やらなきや頼人が死んじやうのよ?!やるしかない……!!」

「ツ……そうつスよね……やつてやるつス!!」

鉄平は覚悟を決めると、チャツカーをヤマノケの背中に向けて構える。

2人で同時にチャツカーを開けると、それぞれにチャツカーと同じ色の妖火が灯つ

た。

『着火！オクリオオカミ！』

『着火！マメダヌキ!!』

『いつけえええーツ!!』

『ガツオーン！』

『ポンポーン！』

狼の顔の形をした青い炎と、狸顔の形になつた緑の炎が放たれ、ヤマノケの無防備な背中へ一直線に命中する。

「おああああ熱つうううううううッ!?」

ヤマノケは悲鳴を上げてよろけると、慌てて背後を振り返る。

「やつた！効いてる！」

「大成功っス！」

「いえくい！」

振り返った先には、ハイタツチを交わす春歌と鉄平の姿が。

自分より弱いものをいたぶるのが趣味であるヤマノケの胸に、ふつふつと怒りが込み上げた。

「テメエらあああ!!女とデブのクセしてナメた真似しやがつて!!死ねえええッ!!

「うわあああこつち来たあああ!?」

ヤマノケの怒りを込めた拳が2人へ放たれる。

その時だつた。

「させないよッ!!」

『ソード！キツネビ必殺！』

「ツ?!何いツ?!」

背後の2人に気を取られた一瞬の隙に、ヤマノケの手から脱した妖狐がキツネビシユーターをソードモードに変形させ、必殺の一撃を放つ。

バレル部から展開された刃にチヤツカ一からの妖火が点火され、長く伸ばされた炎の刃がヤマノケの胴体を真横へ薙ぐ。

「ぐうううつ……がつ……ああああああああああああああツツツ?!」

「うおおおおおおおおおおおおおおおおツ!!はあああああああああああツ!!」

斬撃と炎、二種類のダメージに襲われ苦痛の叫びを上げるヤマノケと、それをかき消すほどに妖狐……篝火頬人が叫ぶ裂帛の咆哮。

弾力性のあるヤマノケの身体は刃を上手く通さない。

しかし、斬れないからこそ感じる苦痛がある。

高熱を放つ鋭い刃が、炎と共に胴体へ当たっている瞬間が長時間続く……。

散々弱いものをいたぶってきた報いが、まさかこんな形で返つてくるとは思いもよらなかつただろう。

「ぐああああああああああああああツ!!」

やがてソードが振り抜かれ、ヤマノケは勢いよく窓へと叩き付けられる。

窓ガラスを粉碎しながら中庭を転がり、苦痛に悶えながら起き上がる。

「ああああああ熱い！！痛い！！テメエ、よくも俺様に火傷を……」

痛む横つ腹を抑え、逃げ出そうとするヤマノケ。

しかし、そうは問屋が卸さない。

コワポンが妖狐に示したのは、トドメの一撃だつた。

「頼人！ドライバーのレバーを押して、もう一度引くんだコン!! それでトドメだコン!!」

「わかった!!」

中庭に降りると言われた通りにレバーを押し込み、そして引く。

『妖火チャージ！妖火意全カーラー！』

バツクルの行燈が開閉し、ベルト内で充填された妖火が右脚へと集中していった。

「最大火力、ぶちかますぜッ!!」

『キツネビ必殺！妖火意バースト！』

跳躍する妖狐。見上げるヤマノケ。

紅の炎脚が今、放たれる。

「はああああああああああッ!!」

仮面ライダー妖狐の必殺キック、『妖狐脚撃』。

足に宿つた炎が螺旋を巻き、怪異を貫き焼き尽くす。

「ぐうつ、ぐああああああああああああああああッ!!」

断末魔の叫びを上げて、ヤマノケは爆散する。

爆発の瞬間、飛散した黒い靄が妖火に焼かれ蒸発し、ヤマノケは肉の一片も残さず消滅したのであつた。

「倒した……のか……?」

煙が上がる芝生から立ち上がり、妖狐は呟く。

「頼人～つ！」

「頼人センパーイ！」

名前を呼ばれて振り返ると、声の主は勢いよく飛び付いてきた。

「おわつ!?は、春歌！危ないからそれやめてほしいって……」

「凄いよ頼人！あんな化け物倒しちゃうなんて!!」

「聞いてないし……」

呆れながらも、勝利を喜んでくれる幼馴染に悪い気はしない。

しかし、それだけ彼女や後輩を心配させた事を実感し、頼人は2人に申し訳なく感じた。

「春歌、豆田くん、心配かけたね。ごめん」

「ホントつスよ……心臓に悪いつス。でも頼人先輩、すごかつたつス！」

「そうだよ頼人！みんな助かつたんだし、頼人が謝る事ないよ！」

「ココーン！やつたコン！凄いコーン！頼人、よくやつてくれたコーン！」

そこへ、コワポンが宙を飛び跳ねながら、頼人の肩へと飛び乗った。

「コワポン、学校の皆はどうなつたの？」

「頼人がヤマノケを倒したから、ウシクビ達もまとめてどつか行つちやつたコン」

「そつか。よかつた……」

「じゃあ、これで全部解決つて事？」

「いや、待つて……一番の問題に気付いたんだけど……」

「え？ 頼人先輩、どうしたつスか？」

歓喜の声から一転。深刻そうな声音になる頼人。

春歌達の視線が集まる中、頼人……いや、仮面ライダー妖狐は羽織の襟部分を掴みながら呟いた。

「これ……どうやつて戻るの？」

「あ……」

この後、コワポンが変身解除の手順を伝えるまでに一悶着あつたのだが、別段綴る程の内容でもないので省かせてもらう事にする。

そして同じ頃、それぞれ全く異なる場所から、オカ研の3人とコワポンが戯れている

姿を見つめていた者達がいた。

「あれが当代の妖狐ですか……」

細長い黒ずくめの男は、爆発したヤマノケの身体から飛び出した漆黒のチャツカ一を拾うと、校舎の陰へと姿を消し。

「何してんのよ、バカ六道」

「フフ……どうやら、もうすぐ来るみたいだね。新しい生徒達が」

何処かの寺院のような場所の庭では、空を見上げていた銀髪の青年が、サングラスをかけ直し。

そして、校舎の屋上からは……。

『ほおう、未熟な妖狐に人間のガキがねえ。面白い組み合わせだな』

「ド素人が……』

大太刀を背負った蒼い鬼のような姿の妖怪と、蒼いチャツカ一を握った黒髪の少年が、3人と1匹を見下ろしていた。

第二夜 「夜叉、来たる」（1／3）

『汝、契約を結べ……』

目の前に現れたのは、身体を炎に包まれた狐の妖怪だつた。
僕は確かにヤマノケに襲われて……。

『汝、契約を結べ……』
そうだ。コワポンに渡されたチャツカーラを点火したんだつけ？

『契約……？』

目の前に現れた狐の妖怪……おそらく狐火であろうそれは、さつきから同じ言葉を繰り返している。

コワポンから詳しい説明聞けなかつたからなあ……。一体何なんだろう？
狐……そういえば、あの夢に出てきたのも狐だつた。
やつぱり、何か関係があるんだと思う。
でも、今は皆を守らなくちゃ！

質問するのは後からだ！

『汝の望みを言え。相応しき者ならば、我が力を貸し与えん……』

「僕の……望み?」

『さあ、望みを言え……』

僕の望み……。つまり、仮面ライダーの力をどう使うか、僕を試しているのか?
そんなの……決まっているじゃないか!!

『春歌を、鉄平を、皆を守りたい!!あの怪異達から、皆を守る力が欲しい!!』

『守りたい、か……。よかろう。その瞳に嘘はない……我が力、汝に貸し与えん。守る為
の戦いである限り、我は汝の鎧となろう』

そう言つて狐火は炎の鎧となつて、僕の身体を包み込んだ。

そして目を開くと僕は、夢で見たヒーローとそつくりな姿に……仮面ライダーになつ
ていた。



『着火!ヌリカベ!』

コワポンに言われた通り、腰のホルダーに挿さつていた『ぬりかべ』のチャッカーを
着火し、壊れた壁へと妖火を吹く。

するとさつきの戦いで凹んでいた壁は、一瞬で凹みが塞がり、廊下は何事も無かつた
かのように元通りになつた。

「凄い!!」

「塗り壁のチャッカーは、全ライダーに標準装備されてるコン。戦いで壊れた壁や道路は、これで全部直してるコン」

「つまり隠蔽用つてこと?」

「その通りコン。仮面ライダーの事は、誰にも喋っちゃダメコンよ?」
コワポンにそう言われ、春歌ちゃんと鉄平は揃つて頷く。

「私達だけの秘密つてことだね!」

「人知れず人々を守るヒーローつスか……いいつスね!かつこいいつス!」

「そうと決まれば、取り敢えず部室に戻らない? 多分、人来るだろうし……」

「あ、じゃあ私、あの子保健室に運んでから行くよ」

春歌が視線を向けた先には、先程ヤマノケに襲われていた女子生徒が気絶していた。
「わかった。じゃあ、よろしくね」

「アイアイサー!」

女子生徒を春歌ちゃんに任せ、僕らは先に部室へと戻った。

□

ガタンゴトン、ガタンゴトン、と一定のリズムで揺れる細長い通路。
どこまでも続く先の見えない暗闇の中を、不気味なオーラを放つ電車が走っていく。
古めかしく、時代遅れなデザイン。生温かい空氣とがらんとした客席。

一定間隔で配置された電球の中で、青い火が揺れる。

そして、誰も乗つていかない運転席。俗に言う幽霊列車である。その幽霊列車を、一人の男が歩いていく。

上から下まで真っ黒なスース。のっぺりとした白い顔に、ありえないほど細長い手足。

オカ研の三人に、ヤマノケを差し向けた男である。

「あらスレンダーマン。随分と遅かつたじやないの」

男を呼び止める、艶のある女の声。

声のした方に顔を向けると、座席にもたれて脚を組む女が彼を見つめていた。

血のように真っ赤なトレーンチコートに、腰まで伸ばした黒い髪。そして、顔の半分が隠れるほど大きなマスク。

その姿は、かつて日本の小学生達を恐怖のドン底に叩き落とした伝説の都市伝説——
口裂け女。

「これはこれは、口裂け女さん。今夜もご機嫌麗しゅう

「失敗した割には、随分と澄ました様子じゃない?」

今度は頭上から少女の声。

列車の天井から降りてきたのは、腰から下がない女子高生。

両腕を使つて器用に歩き、その度にテケテケと音が鳴る。

彼女もまた、かつて子供達に恐れられた最恐の都市伝説の一體——テケテケ。

「テケちゃん、どうせこの人の事だから、何か企んでるに決まつているわ」

「おや、バレましたか」

「さつすがお姉様！何でもお見通しね！」

口裂け女に撫でられ、嬉しげに笑いながら彼女を讃えるテケテケ。

自分には懐かないのにこれか、とでも言うように、スレンダーマンは肩を竦めた。

「で、今度は何企んでるわけ？」

「それをこれから説明する所ですよ。リョウメンスクナ、あなたもそここに居ますね？」

「ウウ…………」

スレンダーマンに呼ばれ、列車の奥に広がる暗闇から、赤く光る四つの目が現れる。

薄明かりに照らされたその姿は、顔が両側に二つ、腕が左右2本ずつあり、手からびたミイラのような奇形の怪異……。

名をリョウメンスクナ。口裂け女やテケテケと同様、日本全国にその名を轟かせる大怪異だ。

リョウメンスクナも居るのを確認し、スレンダーマンは語り始める。

「つい先程、我らが主の住まう御景市に、仮面ライダーが現れました」

「ツ?!」

口裂け女とテケテケが目の色を変える。

「へえ……今度の失敗はそういうわけね」

「どうすんのよ。潰す？ 探してさつさと始末しちやつていい？」

「いえ、暫く泳がせるつもりです」

「はあ!？」

スレンダーマンの意外な答えに、テケテケは取り出した大鎌を取り落とす。

「これまでただ狩るのみでしたが、あの街となれば話は別です。彼らには私達が生み出す“怪異”達と、存分に戦つてもらいましょう」

「ふうん……。目的は戦わせる事そのものってわけね?」

「察しが良くて助かります。しかし、これまで通り、人間達の恐怖を集めるという点は変わりません。我らが主はそれを何より望まれている……」

「よく分かんないけど、ライダーには手を出さずに、今まで通りやれつてことでいいの？」

「お願いします」

口裂け女とテケテケ、両者にそう伝えると、スレンダーマンはリョウメンスクナの方を向く。

「スクナ。あなたの出番はもう少し後になりますが……」

「ウウ……アア……」

「ええ、その時は頼みますよ」

闇よりも昏い場所。沼の底のような悪の根城で今、闇の住人達による悍ましい思惑が渦巻き始めていた。



「それで、頼人はどこから『交霊紙の原典』を持ってきたコン?」

「交霊紙の原典?……つて、コワポンが出てきたあの交霊紙?」

「コワポンからの質問に、頼人は部室のテーブルの上に拡げられた古い紙を指さす。

「あれは日本全国に伝わるコツクリさんの原典になつた交霊紙だコン。見様見真似で作られたものと違つて、ボクら『狐狗狸同盟』への直通電話みたいなものコン」

「これ、そんなに凄いものだつたの?」

「そうだコン!この国にたつた一枚だけの貴重品だコン!」

「つまり、リア度で言うとURくらい?」

「春歌先輩、ソシヤゲで喩えないとくださいっス……」

予想以上の希少価値に驚く三人。

鉄平が春歌にツツコミを入れた所で、頼人は古紙の入手経緯を説明し始める。

「この前、葬式が終わった爺ちゃんの遺品を整理してたらさ、爺ちゃんの蔵で見つけたんだ」

「ココン？ どうして頬人のお爺さんがこれを？」

「爺ちゃん、民俗学者でさ。妖怪とか幽霊の事、よく調べてたんだ。蔵の中も、古い文献とか、曰く付きの刀だとか、その手の物品が収められてたんだ」

「え……それ、怖くない？」

「いや全然。僕も爺ちゃんから妖怪の話聞くの、好きだつたし」

「頬人先輩、昔つからこんな感じだつたんスね……」

「なるほど……。持ち主を流れて、お爺さんの元に辿り着いていたものを、頬人が見つけたわけコンね」

と、ここで頬人が首を傾げる。

「そういうやコワポン、さつき『狐狗狸同盟』って言つてたけど、何の事？」

「あ、説明してなかつたコンね。コツクリさんは妖狐族、化け狗族、怪狸族の三部族が大昔に結んだ同盟、狐狗狸同盟から來た名前コン。三家で助け合つて仮面ライダーを支えるよう、誓い合つたんだコン」

「へえ、コツクリさんにそんな由来があつたんだ」

「妖怪達の歴史……なんだか面白そうつスね。気になつちやうつス」

「春歌と鉄平に渡したチャツカ一には、それぞれボクの仲間達が入つてゐるコン。大事にして欲しいコン」「そうなの!?」

春歌と鉄平は、先程渡されたチャツカ一を取り出して眺める。

青い狼の顔が刻まれた『送り狼』のチャツカ一と、栗色の狸の顔が彫り込まれた『豆狸』のチャツカ一。

2人はそれぞれ、チャツカ一に彫り込まれたレリーフを指で撫でながら呟いた。
「よろしくね、狼ちゃん」

「豆狸、これからよろしく」

その時、部室の外から廊下を走る足音が聞こえてきた。

「ツ!? 誰か来る!」

「コワポン、隠れて!」
「わ、わかったコン!」

咄嗟にコワポンは、部室のカーテンの裏へと滑り込んだ。

その後、部室の引き戸がガラツと開けられる。

そして、茶髪ショートで気性の荒そうな女子生徒と、赤毛のツーブロックでブレザーの上からパークーを羽織つた男子生徒が顔を覗かせた。

「後輩ども、居るわね!?」

「お前ら大丈夫か!?」

「小百合先輩、優一先輩!」

同好会の先輩2人は、血相を変えて頬人達の顔を見回す。

特に小百合と呼ばれた女子生徒は、片手に金属バットを握つており、頬人達も若干身構えていた。

「は〜……どうやら無事だつたみたいね」

「どうしたんですか、そんなに慌てて?」

安堵の表情を浮かべる先輩達に、頬人はキヨトンとした顔で尋ねる。

「校内に牛のマスク被つた奴らが来ただろ!?」

「アンタ達も襲われたんじやないかって、心配して助けに来たのに……何呑気にお茶飲んでるわけ?」

小百合の視線の先には、コワポンが飲みかけていた湯呑みが置かれていた。

「いや、これは、その〜……」

「わっ、私たちもあいつらから逃げて、部室に閉じこもつてたんです!」

「そ、そうです! 気が付いたらいつの間にか消えてたんで、お茶でも飲んで落ち着こうかと!」

「そ、そそそうフス！もうめっちゃ怖かつたんスから～……」

まさか、自分達がやつつけた……と言うわけにはいかない。

慌てて誤魔化した3人だが、先輩達は気が動転していると捉えたらしい。

「そつか～……。あいつら、見るからにヤバかつたもんな」

「ドツキリ番組にしては派手過ぎよね。テロリストか何かかしら？」

「中学生の妄想かよ……つて、否定出来ない状況なんだよな……。何にせよ、もうすぐ警察来るだろうし、すぐに分かるさ」

よもや、あれが本物の魑魅魍魎だとは、オカ研の元部長・副部長コンビと言えど気づいてはいないようだ。

仮面ライダーに変身した頼人の姿も、春歌と鉄平を除けば誰も見ていないらしい。

「取り敢えず、今日はさつさと帰った方がいいぜ。警察も、生徒への聞き込みは明日にするだろうしさ」

「帰り道が怖いってんなら、あたしがボディーガードしてやるわよ？」

「い、いえ、お構いなく……」

「小百合先輩はそのバット、早く野球部に返して來た方がいいと思います……」

「それは俺も思つてた。鬼山に怒られるぞ」

「ちえー。あいつらまだ残つてたら、小百合様のスーパー千本ノックを御見舞してやつ

たのにな〜」

「普通に過剰防衛だぞ、それ」

春歌と優一に言われて、小百合は肩に担いだ金属バットをそつと下ろした。
(この人、なんでオカ研の副部長やつてるポン?)

あまりにも血の気の多い先輩の姿に、思わず心の中でそう呟くコワポンだつた。

□

部室を後にしたオカ研の3人は、帰路に着いていた。

振り返ると学校の入り口には、警察が危険色のテープを張ろうとしている所だつた。
明日には入れるようになつてゐるだろうが、警察はどこまで手がかりを掴めるのだろう?

そんな事を考えながらも、3人は家への道を歩いて行く。

「あ、コワポンどうする?」

「うーん……取り敢えず、頼人の家にお邪魔させてもらうコン」

「えー! コワポン、私の家じやダメ?」

頼人の肩に乗るコワポンに、春歌は一気に不満な表情を見せる。

「交靈紙は頼人の持ち物コン。夜には一度、報告に戻らなくちやいけないし、頼人の家の方があつたがいいコン」

「そんな～」

「春歌ちゃん、それはまた今度でいいかな？」

「仕方ないな～……コワポン、今度は家に来てくれる？」

「ん～……考えておくコン」

「やつたあ！」

「じゃあ、話の続きをまた明日つスね」

「うん、また明日ね」

そう言つて三人は、それぞれ自分の家への道を進んで行くのだった。

途中で鉄平と別れ、暫く歩くと春歌とも別れる。

そこから更に少し歩くと、頼人の家はすぐそこだ。

大きな蔵付きの、少し広めな和風邸宅。

それが篝火家だ。

「ただいま～」

「おかえり、頼人ちゃん」

「婆ちゃんただいま」

茶の間でテレビを見ていた祖母が、温かく出迎える。

家族が学校や会社に出ている間に、掃除や洗濯を難無くこなす元気な祖母だ。

「学校、大丈夫だつた？ニュースになつていたけど……」

「へ？あく……うん、大丈夫。僕も、部活の皆も、怪我はしてないよ」

もうニュースになつてているのか、と驚きながらも、心配をかけないように快く応える。

「そうかい？ならいいんだけどねえ……」

「それより、今日の夕飯なに？」

「今日はねえ、シイタケが安かつたから焼き込みご飯にしておいたよ」

「ありがとう。じゃあ、味噌汁と……シャケの切り身が残つてたし、ホイル焼きにしようかな」

「すっかり秋だねえ。楽しみにしてるよ」

そう言つて祖母は、またテレビに目を戻した。

「ご飯、頼人が作つてるコン？」

「婆ちゃんと一緒にね。母さんは仕事で忙しいから」

「お父さんはどうしてるコン？」

コワポンの質問に、頼人の表情が少しだけ暗くなる。

その瞬間、コワポンは答えを察した。

「父さんは……僕が小さい頃に、ね……」

「……めんコン」

「ううん、コワポンは悪くないよ」

そう言つて頬人は、コワポンの頭を指で撫でた。
柔らかな毛の感触が、指を包み込む。

それは、目の前にいる不可思議な存在が、確かにそこに居る事を証明していた。

「……それより、色々聞かせてくれる?」

頬人は自分の部屋に入ると、リュックを降ろす。

そして、机の上に降霊紙とアヤカシチヤツカ一、そしてキヤンドライバーを並べた。

「何を聞きたいコン?」

「ううん……取り敢えず、色々とね。でも、まずは……」

頬人の腹の虫が、ぐう……と空腹を訴える。

同時に、コワポンの腹の虫も愛らしくいなないた。

「夕飯、食べてからにしようか」

「腹が減つてはなんとやら、コン!」

お互い、空腹を訴える腹を抱えて微笑み合う、1人と1匹。

それから夕食の後、頬人は夜が耽けるまでコワポンに質問するのだった。

「さて、もう少し働いてもらいますよ」

スレンダーマンは、先程回収した黒いアヤカシチャツカーパーを点火し、点つた妖火に息を吹きかける。

すると、紫色の妖火は吐息に乗り、やがて首のない人型のシルエットを形作る。やがてシルエットは実態を持ち、白い肉体が地に足をつける。

それは先程、仮面ライダー妖狐に倒されたヤマノケの姿であつた。

「新たな力を与えます。もう一度暴れて来てください」

そう言つてスレンダーマンは、懐からもう一つのチャツカーパーを取り出すと、それをヤマノケへと手渡す。

「ヘツ……待つていろよ、仮面ライダー。借りは返させてもらうぜえ」

下劣な笑みを浮かべるヤマノケを、スレンダーマンは表情のない顔で静かに見つめていた。

第二夜 「夜叉、来たる」（2／3）

今からずつと昔の事。人間と妖怪は、同じ世界で共に暮らしていた。

妖怪たちにとつて、人間の感情から生まれるエネルギーは糧だつた。そこで、妖怪たちは人間を驚かしたり、時に生活を助けて感謝されたりしていた。

一方、人間たちもそんな妖怪たちを畏れ、敬い、隣人として接した。両者は長く、良好な関係を築いていた。

しかし、妖怪たちが持つ不思議な力に目をつけた人間たちがいた。

同時に、人間たちの負の感情から生まれるエネルギーに味をしめた妖怪たちもいた。

彼らは手を結び、恐怖と力を以てこの世を支配しようと暴虐の限りを尽くした。

やがて、人間と妖怪が共に生きる世界を、その均衡を保つべく、動き出した者達が居た。

彼らは妖怪たちから妖術を学び、集まつて組織となり、人と妖怪をひとつに繋ぐ呪具を造つた。

そして、その呪具で自身に妖怪を憑依させ “変身” する戦士達は、『仮面ライダー』と呼ばれた。

現在でも組織はひつそりと存続しており、仮面ライダーは日本各地に在中。人間を襲う妖怪たちから、人々を陰ながら守護している……。

□

「なるほど……。じゃあ、最初の質問。君たちはどこから来たの？」

コワポンをベッドに座らせ、その手前に腰を下ろす。

視線を合わせ、持つてきた煎餅を勧めながら、僕は質問した。

「ボクたちの住んでる」妖魔界“は、頼人たちの住んでる人間界と隣り合う位置にあるコン」

「つまり、コワポンは異界から来たって事？」

「そういう事コン。昔から、ボクたちの仲間は人間界と妖魔界を行き来しては、人間達と交流してきたコン。お仕事を手伝つたり、助けられた恩を返したり、時には人間をおどかしてみたり。仲良くしてたんだコン」

「じゃあ、民話や伝承に出てくる妖怪たちって、本物だつたんだ!!」

「そういう事コンね」

そう言つてコワポンは、出された煎餅をパリッとひと口咀嚼する。

美味しそうに飲み込むと、続きを語り始めた。

「……でも、中には人間達をよく思わず、暴れたりする妖怪もいたコン。そこで、人間と

妖怪が仲良く暮らせる世界を護る戦士、『仮面ライダー』が生まれたんだコン！」

「つて事は……僕もその1人になつたつて事!?」

「そういう事コン！頬人は選ばれたんだコン！ボクたち妖狐一族の力を受け継ぐ、当代の『仮面ライダー妖狐』として!!」

ビシイツ！と、ちつちやい前足で僕を指さすコワポン。

僕は改めて、コワポンから受け取つたアヤカシチャツカーとキヤンドライバーを見つめた。

「……でも、本当に僕でよかつたの？」

「間違いないコン。『交霊紙の原典』でボクを呼び出せた頬人なら、きっと果たしてくれるコン！」

「普通の人には呼び出せないの？」

「先代から聞いた限りだと、交霊紙そのものが候補者を選別しているらしいコン」「選別の基準つて？」

「うーん……実は、ボクもその辺の詳しい事はよく知らないんだコン……」「そうなんだ……」

なんでも、コワポンが5代目の『コツクリさん』を襲名したのは、ごく最近の事らし
い。

つまり、ほぼ新米であるため、分からぬ事も少くないんだとか。

「頼りない案内役で申し訳ないコン……」

「気にしなくていいよ。分かんない事を分かんないって言えるの、すぐくえらいと思うな」

「頼人……ありがとうコン」

「……コワポン、ちょっと撫でてもいい？」

「構わないコン。どうぞどうぞだコン」

何となく、コワポンの撫でてあげたい衝動に駆られた。

手のひらに触れるモフモフした感触は、温かくて、とても手触りがいい。トリミングしたばかりの子犬を撫でているような感じで、すごく気持ちがいい。

……僕が選ばれた理由つて、なんだろう？

ふと脳裏に浮かんだのは、小さい頃から夢に現れていた謎の狐面。

彼の姿が、昼間僕が変身した『仮面ライダー妖狐』によく似ていた事が、ずっと引っかかっていた。

もしかして、僕が仮面ライダーに選ばれたのつて、彼が関わっているんじや……？
ひょつとしてコワポンは彼の事、何か知ってるかもしれない。

「コワポン、実は……」

長年の謎に一步近付けるかと思つた、その時だつた。

ジリリ、ジリリ、ジリリ！

ジリリ、ジリリ、ジリリ！

突然、警報のようなけたたましい音が鳴り響いた。

驚きのあまり、思わず尻もちを着く。

「なになになに?!どつから出てるの?!」

「この臭い、まさか……!？」

そう言つてコワポンは、尻尾の中から何かを取り出す。

それは、ちょっと変わつたデザインのガラケーだつた。音の出処はこれだつたらし
い。

ガラケーを覗き込んだコワポンの顔色が変わる。

「コワポン？どうしたんだ!?」

「怪異が……街で暴れてるコン!!」

「なんだつて!？」

見ると、ガラケーには地図が表示されている。

場所は市内を走る高速道路。

「頼人、行くコン！」

「うん！行こう!!」

怪異を止められるのは僕だけだ。

僕は急いで支度すると、こつそりと家を出た。

この距離だと、走るよりも自転車の方が早い。

ペダルに足を乗せて漕ぎ出すと、コワポンが肩にしがみつきながら囁いてきた。

「坂を降りたら変身するコン！もつと早く現場に着けるコン！」

「わ、分かった！」

コワポンの言う通り、坂を降りるとキヤンドライバーを腰に巻く。

「変身！」

『妖火意点火！』
『ヨーカイテンカ』

『種火！篝火！狐の火！妖狐Y O Y O！ココンコーン!!』

瞬間に教わった手順で、仮面ライダーへと変身する。

ところで、変身する度に流れてくるこの歌にも、何か意味があるんだろうか？

「チャッカーの妖火を、自転車に吹きかけるコン！」

「こんな感じ？」

ドライバーから引き抜いたチャッカーを一度閉じ、再び点火する。

言われた通りに火を吹きかけると、自転車がオレンジ色の炎に包まれ、形を変えた。

炎が消えると僕の自転車は、狐の顔の意匠を施されたバイクへと姿を変えていた。

「こ、これは!?」

『マシンフォックストライカー。チャッカーに宿る妖火を使えば、契約した妖怪を器物に憑依させて、こういう事もできるコン!』

「その声、コワポン!?」

ライトを光らせながら喋るバイク。

肩を見ると、いつの間にかコワポンの姿が消えていた。

『さあ、現場へ急ぐコン!』

「でも僕、バイク免許持つてないよ!?」

『大丈夫コン! 動かしてるのはボクだから、頼人はハンドル握つてるだけで良いコン!』

「そういう問題!?」

でも、そんなこと言つてる場合じやない。

僕が跨ると、フォックストライカーはブルンブルンと力強い音を立てて発進した。

□

御影市を囲む山を開き、市内の中心部まで続くハイウェイは、地方都市である御影市を、外の街と繋ぐ一番大きな道路である。

このハイウェイに近い山々には、山登りやハイキング用に作られた道路もいくつか存

在する。

その山の麓にあるバイパスを、一台の車が走っていた。

車に乗っているのは、いかにもチャラそうなカツプル。

音楽を大音量でかけながら走つていく車は、夜道をぐんぐんと進んでいった。

「この辺り、出るんだつて」

「そうなの？」

「ネットで有名なんだよ。夜に車では走つてると首のないユーレイが出てきて、凄いス

ピードで追い越されるってハナシ」

「ウソでしょ、ヤダこわい♪」

「でもさ、出てきたら面白くね？」

「ウケる♪ w 写メ撮つたらバズるかな？」

「かもな w」

チヤラチヤラした見た目通りの、軽い調子の会話。

街灯の明かりよりも夜の暗闇の方が目立つバイパス道路だが、そんな事はお構い無し、といった様子でゲハゲハ笑いながら男女は進んでいく。

やがてカーブへと差し掛かつた、その時だつた。

「テン……ソウ……メツ……」

「……え？」

「何処からか聞こえた奇妙な単語に首を傾げた、その後。

激しい摩擦音と共に、景色が激しく揺れた。

「きやあああああああああああッ！」

「うわあああああああああッ！」

車は道にブレーキ痕を残しながら、暫く蛇行する。

やがて、車はガードレールにぶつかって停止し、二人は慣性の法則を働くながらシートの上で飛び跳ねた。

「今の……何……？」

「なんか、変な声したよな……？」

二人は顔を見合わせると、互いに車の周囲を見回す。

辺りは見渡す限り、擁壁と街灯、そしてガードレールの下には鬱蒼と茂る森の木々。

人の手が入ったバイパス道路とはいえ、陽の落ちた山道は気味が悪い。

その森の何処からか、まるで地の底から響いてくるかのような声が鼓膜を揺らす。

「テン……ソウ……メツ……」

メキヤツと何かがひしやげる音。

「今……なに……？」

「ツ!! おい、車から降りようぜ!」

「う、うん……あれ?……開かない!」

「はあ!?」

男は助手席のドアを開けようとするが、ガタガタと音は鳴るもの開かない。それは、車のフレームが歪んだ音だった。

慌ててドアを開けようとするが、いくら押しても開かない。

そして、運転席側のドアはガードレールにめり込んでいる。

閉じ込められたと気付いた時、また声が聞こえた。

「テン……ソウ……メツ……」

「なに……これえ……まさか、噂の……」

「そつ、そそそそんなわけあるかよ! こつこつこつこれはななな何かの間違いだつて!」「でもこんなのつて……」

「テン……ソウ……メツ……」

声が、前方から聞こえた。

二人は顔を見合させて、ゆっくりと声のした方を振り向く。

すると、フロントガラスの端からずつと向こうに、白い人影が浮かんでいた。

ヘッドライトに照らされたその人影は、ピヨンピヨンと跳ねるように……まるで、片

足でケンケンをしてるような動きで近付いてくる。

「なに……あれ……」

「人……じや、ない……よな……」

人影が謎の言葉を呟くと、その度に車が潰れていく。

「テン……ソウ……メツ……」

やがて、人影の正体がゆっくりと浮かび上がった。

「テン……ソウ……メツ……」

それは……首から上のない、真っ白な人の身体。

「テン……ソウ……メツ……」

代わりに、胴体にはぎよろりとした目玉が2つに、腋まで裂けた大きな口。

口からは、不渝いに並んだ汚い歯が見える。

「テン……ソウ……メツ……」

そして、左右どちらの足とも違う一本足。

裸足でアスファルトを踏む、ピタピタという音がとてもよく響いていた。

一本しかない足でケンケンしながら、両手をめちゃくちゃに振り回し、身体全体をぶれさせる程に揺れ動かして迫つてくる白いナニカ。

「テン……ソウ……メツ……」

その姿は確かに、昼間、頬人に倒されたはずの怪異、ヤマノケの姿であつた。

「ひいツ!?」

震え上がるカツブル。

その姿を見て、ヤマノケの口角がニタリ、と吊り上がる。

「あ、あああくあくあくアクリヨータイサンアクリヨータイサン!!」

「、、、、、こつち来んなああああ!!」

怯えた声で騒ぎ立て、思わず頭を下げて身を隠す二人。

ヤマノケの声と足音は、ゆっくりと近付いてくる。
やがて、車の前まで音が迫り……

急に声が消えた。

「…………あれ?」

「…………ん?」

足音が遠ざかつていく。

助手席のすぐ真横を通り過ぎ、車が走ってきた道を逆方向へと進んでいく。

足音はどんどん遠ざかつていき、やがて聞こえなくなつた。

「助かった…………のか…………?」

「でも…………なんで…………?」

戸惑いながら顔を上げる二人。

足音が遠ざかって言つた方を見ながら、ホツと息を吐き、胸を撫で下ろす。

「なんで通り過ぎたのか分かんねえけど、今のうちに……！」

「こんな所、早く逃げよう……。後ろのドアなら、まだ開くかな——」

二人が後ろを振り返った、その時だつた。

後部座席で、ヤマノケがケタケタと笑っていた。

二人の身体から、暗く、おどろおどろしい色の靄が溢れ出す。

悲鳴は、夜の森に広がる深い闇へと吸い込まれた。

第二夜「夜叉、来たる」（3／3）

『少し移動してたけど、この辺りのはずコン』

「あつという間に着いちゃった……」

降りた途端、バイクは自転車に戻り、コワポンは僕の肩に戻って來た。
ハイウェイには、何故か車が一台も通つていなかつた。

だけど辺りを見回すと、グシャグシャに潰れた車が何台か転がつてゐる。
僕達が到着するまでに、怪異が暴れ回つた跡だと思う。

「怪異は何処だ……？」

「テン……ソウ……」

「ツ!?

「頼人、上からコンツ!!」

見上げると、丸めたチラシみたいになつた自動車が四台ほど、僕の頭上に浮いていた。

「メツ……！」

「く……ツ！」

咄嗟に前方へ走り、道路を転がる。

直後、さつきまで立っていた場所には、もはや鉄塊としかいえない姿に成り果てた車が落下し、爆発した。

「今のは……？」

「頼人！向こうだコン！」

コワポンが指差す方を見ると、そこに居たのは……

「ヤマノケ!?さつき倒したはずじゃ……」

「ウケケケケケケケケケケケケケケ!!」

白い身体で胸に顔。間違いない、ヤマノケだ。

でも、昼間の時と雰囲気が違うような……？

「テン……」

ヤマノケが何やら呟く。

すると周囲に転がっている車が、紙を丸めるようにグシヤツと歪んだ。

「ソウ……」

歪んだ車が道路を離れ、宙へと浮かぶ。

「あれは……」

「頼人、また来るコン！」

「メエエエエツツ!!」

ヤマノケの叫びと共に、宙へと浮かんでいた車が、一斉に僕の方へと向かってくる。今度は同時じやなくて、断続的な攻撃だ。さつきより避けるのが難しい！

「頼人！キツネビシューターを使うコン！」

「OK！」

当たる前に撃ち落とせば……ツ！

キツネビシューターを構え、飛来する鉄塊を近い順に撃ち抜いていく。同時に、その場に留まらず走り出す。留まつていたらペシャンコだ。

ふと、商店街のゲーセンに残つてインベーダーゲームが頭をよぎつた。キツネビシューターの威力は、一発で飛来する自動車が粉々になる程度。一撃も外さなければ、突破して接近する事は不可能じやないはず。

そこからキツネビシューターをソードモードへ変形、接近戦に持ち込めば……
「行ける！」

ヤマノケの居る方へと、真っ直ぐに走り出す。

「頼人、作戦もあるコン？」

「あるよ。あいつの能力、正体見切った！」

あいつは、さつきから車を飛ばす時に「テン・ソウ・メツ」と呟いている。

テンソウメツとは、ヤマノケの鳴き声、もしくは別名とも言われている言葉だ。

それは漢字で「転・操・滅」と表され、「転じて、操り、滅ぼす」というヤマノケの能力そのものを表しているんだとか。

おそらく車を歪めるのが「転」、歪めた車を浮かせるのが「操」、勢いよく相手にぶつけるのが「滅」で、ひとつの術みたいになつてるんだ。

攻撃のタイミングが分かれれば、出来ることも変わつてくる。

能力が増えても、相手の手の内さえ掴めれば……ッ！

「テン……ソウ……キエエエアアアアアアアツ!!」

と、ここでヤマノケは昼間にも見せたように、腕を伸ばして攻撃を仕掛けってきた。相変わらずゴムのようにしなる腕で、アスファルトを余裕で粉碎する拳を叩きつけようとしてくる。けど――

「うおおおおおおおおおおッ!!」

拳はステップで回避、車は銃撃か、避けられるものは道路を転がり回避。

これを繰り返し、徐々に距離を詰めていく。

距離、残り10メートル……8メートル……5メートル……！

「いける……いけるコン！」

「くらえええええツ!!」

ヤマノケの懷に飛び込む、その瞬間。

「テン……ソウ……」

脚に何かが絡みつき、僕はバランスを大きく崩した。

「え……？」

何が起きたか分からず、身体が硬直する。

足元を見ると……グニャグニヤにねじ曲がった道路照明が、僕の脚に巻きついていた。

これは……流石に想定外。

「やば……うわあああああッ!!」

「頼人——!!」

曲がりくねっていた証明が、元の真っ直ぐなフォルムへと戻っていく。

それに伴い、僕の身体も勢いよく引き上げられた。それも頭と足が逆さまの状態で。そして証明は途中で僕の脚を離れ、僕はそのまま空へと放り投げられる。
ヤバい……これ、絶対ヤバいやつ。

「あああああああああ——」

そのまま、自由落下で道路に叩きつけられ、僕はクレーターの真ん中に、漫画のように埋まっていた。

「痛たたたた……」

「頼人、大丈夫コン!?」

「な、なんとか——ツ!」

立ち上がるうとしたその時、頭上から陰がさす。

高く跳躍したヤマノケが、僕めがけて落下してくる。

咄嗟に両腕を交差させた直後、強烈な衝撃が僕を貫いた。

「ぐふうつ!」

一本足に収束した落下時のエネルギーは、きっと生身で受けていれば僕の肋骨を粉々

にし、内蔵を破裂させていただろう。

「こいつ……瞬間よりも、強く……」

「頼人！しつかりするコン！ここから抜け出せば、勝機はあるコン！」

「そう……したい……けど……ツ!」

「ウケケケケケケツブレルツブレルツブレルツブレロオオオオオオ!!」

ヤマノケは脚を曲げ、もう一度バネのように跳躍する。

また、さつきの踏み付け攻撃をする気だろう。

早くここから抜け出さないと……。

ツ……くそ……深めにめり込んでるから、中々出られない……！

それに、さつきのを受け止めたせいで、腕が痺れてる……上手く動かせない……ッ！
そうこうしている内に、ヤマノケは20メートルくらい跳んだ。

もう落ちて来る、間に合わない。

そう実感した瞬間、急に全てが冷めていった。

ああ……僕は、ここで死ぬんだ。

それも普通の死に方じやなくて、怪異に襲われて死ぬ。

普通じやない死が、逃れられない状況でやつてくる。そのせいか、思い残す事はいっぱいある筈なのに、「仕方ないや」って気持ちが全てを覆つていった。

もつと春歌や鉄平、先輩たちと世界中の妖怪の話で盛り上がりたかつた……。
もつと色んな怪談を知つて、調べてみたかつた……。

それに……母さんや婆ちゃんより先に死ぬなんて、親不孝にも程がある。

ごめん、父さん。父さんの代わりに母さんと婆ちゃんを守るつて、約束したのに……。
そういうや、コワポンに聞きたいことも、まだいっぱいあつたなあ……。
せつかく、本物の妖怪と友達になれたのに……――

「頼人！ぬりかべのチャッカーをシユーターにセットするコン!!」

「……ッ！」

耳朶を打つ声で、ハツと気がついた。

同時に、僕の手は既に腰のホルダーへと伸びていた。
 まだ痺れる手で、キツネビシューターを握り、ホルダーからヌリカベチャッカーを取り出そうとする。

心はさつきまで諦めかけていた筈なのに、僕の身体はまだ諦めていないみたいだ。
 いや、それとも……ほんの少し、弱気になつていただけかもしれない。

とにかく、僕はまだ生きたい。

生きて帰つて、また学校に行つて、皆と部活がしたい！

心の底に火が着いた。身体中が熱を帯びていく。

まだ、ここで終われないんだ！！

「そつちはボクがやるコン！」

すると、コワポンがチャツカーハンドルを手に、僕の胸の上を歩いてきた。
 小さな前足で器用にチャツカーハンドルを持ち、僕の手に握らせる。

「コワポン……」

「ボク、まだ頼人といっぱいお喋りしたいコン。まだ話せてないこと、いっぱいあるコン。だから……諦めちゃダメコン！」

「……ッ！」

コワポンの真っ直ぐな目は、小さいけれどとても綺麗だった。

何で選ばれたのかはよく分からぬし、契約したのも成り行きだけど……でも、その通りだ。

「僕も、まだコワポンの事、全然聞けてない……！だから……まだ、諦めないッ！」

『頼人……』

「燃えてきた！コワポン、一緒にやろう！」

『わかつたコン！ボクも一緒だコン！』

コワポンの前足が、僕の右手をギュッと掴む。

痺れていた右手が、チャツカーレをしつかり固定する。

そのまま親指でカバーを弾くと、音と共に炎が揺れた。

『着火！ヌリカベ！』

キツネビシユーターの台尻へ、ヌリカベチャツカーレをセット。

見上げると、ヤマノケは既に目前まで迫っていた。

『シユーター！ヌリカベ必殺！』

『いつけええええええええええ！』

トリガーを引いた直後、銃口から解き放たれた炎は、巨大な防壁となつて広がつた。

まつすぐ落ちてきたヤマノケは、防壁によつて落下エネルギーを奪われていく。

ニヤついていた顔が、驚愕へと変わつていき、やがて焦燥が滲んだ。

「ツブレロツブレロツブレロオオオオオ!! テン・ソウ・メツ! テン・ソウ・メエエエツ!!」
押し切れないと悟ったのか、周辺にある車を手当り次第に操り、僕らを推し潰そうとするヤマノケ。

だが、その全てが阻まれ、僕たちには届かない。

向かつて来るもの全てを阻む鉄壁の絶対防壁。

それが、ぬりかべの力なんだ!!

「頼人！そのまま押し返すコン！」

「ぶつ飛ベええええええツ!!」

左手を高く、眼前の空へと突き出す。

同時に防壁は、すぐそこまで迫っていた死の遣いを、勢いよく弾き返した。

「ギエエエエエエエエ!!」

弾き飛ばされ、今度はヤマノケが地面を転がつた。

悲鳴を上げながら転がる白い身体には、擦り傷が増えていった。

それと共に防壁は消えていく。なんとか生き延びたみたいだ。

「ぜえ……ぜえ……ぜえ……」

「頼人……大丈夫コン？」

「大丈夫……まだ……」

クレーターになつたアスファルトからなんとか抜け出し、立ち上がるうとした時だつた。

「テン……」

「ツ!?

顔を上げると、ヨロヨロとしながらも、まるでダルマのような動きで立ち上がつたヤマノケが、僕の方を睨み付けていた。

「ソウ……」

「あいつ、まだ……！」

「頼人！逃げるコン!!」

コワポンが叫んだ、その時——風を斬る音が聞こえた。

「メ——ギエエツ!?」

見ると、ヤマノケめがけて飛んできた何かが、ヤマノケの眉間にぶつかっていた。仰向けに倒れるヤマノケ。

その眉間を打つた何かは、そのまま僕の後ろの方へと戻つていく。ブーメランにしては大きく、ぶつかつた時の音も重厚だつた。

あれは……剣、だろうか？

「危ねえ所だつたな、小僧」

「……!?」

振り返ると、こちらへ歩いて来る2つの人影があった。

1つは人間。レザーメイドの黒い学ランに身を包んだ、ウニみたいにツンツンした黒髪の男。

歳は多分、僕より上だろう。該当に照らされたその顔は、とても険しい表情をしていた。

もう1つは……どう見ても妖怪だつた。

半裸の上半身には、逞しい体格の青い肌。長い白髪の頭頂には、二本の角がそびえ立つ。

そしてその手には、先程飛んできた大剣が握られている。

身の丈半分以上はあるのに、あんなふうに投げられるものなのだろうか。

その男の人は僕の目の前で立ち止まると、僕の顔をすごい目で睨んできた。

ツリ目の人には睨まれるの、すごく怖いな……。

「つたくド素人が。手こずりやがつて」

「え……？」

「すつこんでろ。そこで見てりやいい」

え？ 僕、今初対面の人にディスられた？

「はあ～～～!? ちょっと何言つてるコン!?

「まあ落ち着け小狐。そつちの小僧、その身体じや無理できんだろう?」「そんな事は……つツ……!」

「頼人!?

「ほらな。黙つて休んでた方が身のためだぜ」

膝を着く僕を尻目に、学ランの男はヤマノケの方へと歩いて行つた。

あの人はいつたい……?

「お前が噂の『怪異』だな?」

「……!?

「答えるなくていい。すぐに終わるからな」

そう言つて学ランの男が取り出したのは、僕が腰に巻いてるものとよく似たものだつた。

「キヤンドライバー!? でも、色が違う……?」

「あれはオクリビドライバー!? って事は、五行院から派遣されてきたコン!?

僕のドライバーは行燈のような形をしていた。

けど、その人のドライバーは石造りの灯籠のような形だつた。

「夜叉、行くぞ」

「あいよ。雑魚だけじや物足りねえと思つてたんだ」

続けて取り出したのは、青いジッポライター。

真ん中には、鬼の顔のレリーフが刻印されていた。

夜叉と呼ばれた鬼が、その青いライターへと吸い込まれていく。

間違いない、アヤカシチヤツカ�다。

「つて……夜叉!? 夜叉つてあの!?」

「黙つて見てろ」

『着火！ ヤシャ！』

そして、チャツカーに火を灯すとドライバーへと装填した。

『シャーツシャ、ヤシャ！ ヤシャ！ シャーツシャ、ヤシャ！ ヤシャ！』

念仏を唱えるような、それでいてリズミカルな音が鳴り響く。

それに伴い、男は天へと掲げた右手を下ろし、胸の前で印を結ぶと、高らかに叫んだ。

「変身ツー！」

『妖火意列火！』

ドライバーの右側にあるレバーを引くと、バツクルの灯籠が観音開きにパカツと開

き、セットされたチャツカーから鬼の顔の形をした青い炎が上がった。

『霸者！ 破邪！ 夜叉！ ヤムシャ！ ヤシャ！ ヤシャ！』

ドライバーから噴き出した炎に包まれ、やがて炎の柱が弾ける。
そこには……鬼のような姿をした、青い仮面ライダーが立っていた。
「仮面ライダー鬼丸、いざ尋常に……参るツ！」

第三夜 「鬼を纏う術師」

頭の先から爪先まで青一色で統一されたアンダースーツ。

細身ながらも筋肉質な上半身。黒い腕鎧に、両手首には金色の腕輪が光る。腰には灯籠型のドライバーが巻かれ、黒い腰布が夜風になびく。

そしてその顔は、弧を描いた2本の角が天を突くように生えた鬼面だった。眼前の怪異を睨みつけ、夜叉を纏つた術師は名乗りを上げる。

「仮面ライダー鬼丸、いざ尋常に……参るッ！」

鬼丸が構えた時だった。

「ウウ……グウ……アアアアアツ!!」

唸り声を上げながら、ヤマノケが苦しむように身をよじる。

足を一本にしてバランスを取ろうとするも、悶えながらふらつくだけだ。

「あれは……」

『力が暴走してやがるな……。原因は分からねえが、さつき狐の小僧とやり合った影響だろう』

「チツ、面倒な……」

鬼丸の目の前で、ヤマノケの姿が変わっていく。

腕や足がブクブクと膨らみ、胴体も顔ごと歪んでいく。

まるでヤマノケを内側から食い破り、何かが現れようとしているようだ。

「ウ、ウ、……ギイ、イ、……ガア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ツ!!」

やがて、ヤマノケの顔が苦痛に歪んだ直後、それは別の何かへと変貌を遂げた。

全長20メートルはあろう芋虫のような体に、大樹ように太い四つ脚。

身体中からはヤマアラシのような長い針が、針葉樹のように並ぶ。

そして顔には円形の口と、ナメクジの触覚のように伸びた三個の目。

おおよそこの世の生き物とは思えぬ巨獣の姿が、そこに顕現していた。

ハイウエイの車線を跨ぐほどの巨体へと変貌した怪異は、まるで赤ちゃんが泣くような甲高い声で、夜空へと咆哮した。

「あの姿は……まさか、シシノケ!?」

「デカくなつたか……上等だ」

思わず呟く妖狐。

その目の前で、鬼丸は戦闘を開始した。

鬼丸はシシノケの巨体に怯むことなく接近すると、バツクルから大振りの片刃剣を出現させる。

夜叉が持っていたものに似ているが、岩から削り出したようなそちらと違い、どちらかと言えばキツネビシューターに近い。斜め右下に構えはがら跳躍し、シシノケの顎下へと目掛けて、片刃剣をそのまま力任せに振り上げた。

「フンッ！」

「イ、イ、イ、イ、イ、イ、イ、イ、イ、イ、イ、イ、イ、イ、イ、イ、!!」

甲高い悲鳴と共に仰け反るシンノケ。

その頭上を跳ぶ鬼丸は、剣を頭上へと振り上げ、構えた。

「これで——」

「イ……ツト……シャ……ノウ……」

「ツ!?」

そのまま一太刀浴びせようとしていた鬼丸だつたが、シシノケはなんと仰け反つた身体を押し戻し、頭上の鬼丸をまつすぐに凝視した。

直後、シシノケが大口を空ける。

すると、空気の流れが変わった。

「危ない!!」

気づいた時には既に遅く、鬼丸はシシノケの口へと引き寄せられていた。

掃除機がゴミを吸い込むかのように、鬼丸の姿は口腔へと消える。

「た、食べられちゃつたコン……!?」

「そんな……」

あまりにもあつさりとした退場に、口を開ける妖狐とコワポン。だが、終わりではなかつた。

「イ、……イ、エ、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、!!」

耳をつんざくような悲鳴と共に、シシノケは何かを吐き出す。

『ハツ、俺様を喰おうなんざ5000億年早えつての』

「一寸法師の話を知らなかつたようだな」

吐き出されたのは、片刃剣を肩に背負つて着地した鬼丸だつた。

刃を払うと、刃先に付着していたヌメつとしている体液が道路に飛び散つた。

「す、すゞい……シシノケに呑み込まれて、あんなすぐに脱出するなんて……」

「鬼族の妖怪は凄まじい戦闘力を持つ種族コン。でも、これはあの夜叉だけじゃなくて、契約者の技量もかなりのものだコン……」

鬼丸が振り返ると、身体を内部からズタズタにされたシシノケが、もがき苦しんでいた。

「どうやら効いてるな」

『つまんねえなあ。デカブツなんだから、もう少し楽しませろよなあ！』
夜叉が悪態をついた、その後だつた。

「イ、イ、イ、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、!!」
シシノケが悲鳴をあげ、動き出す。

再び大剣を構え直す鬼丸。

シシノケは咆哮しながらこちらへ……

ではなく、鬼丸とは反対の方向へと走つていく。

どう見ても鈍重そうな巨体で、ハイウエイを車よりも早く這いずりながら。

「ツ!?逃がすかッ！」

そう言つてチャッカーを引き抜いた鬼丸は、チャッカーに灯る妖火に息を吹きかけ
ると妖火は人型となり、やがて夜叉の姿が実体化した。

「夜叉！」

「あいよ、すぐ持つてくる」

そう言つて夜叉は、ハイウエイを飛び降りる。

それから数秒後、軽々と跳躍して戻ってきた夜叉が担いでいたのは、1台のハーレー
だつた。

鬼丸はもう一度チャッカーに点火すると、今度は自分のハーレーへと火を吹きかけた。

すると夜叉の姿が消え、ハーレーへと宿る。

炎に包まれたハーレーは、瞬きの間に姿を変える。

ライト部が鬼面のようなデザインとなつた、厳つい容貌のバイクだ。

『夜叉の俺様を相手に鬼ごっこたあ、面白え！』とつ捕まえて叩き斬つてやるぜ！』

『市街地に降りられると厄介だ。速攻でカタをつけるぞ』

鬼丸は自らのマシンに跨ると、ハンドルをクラッチし始める。

「あ、あの……僕も……」

「ド素人の出る幕はない」

妖狐の言葉を遮り、鬼丸はシシノケを追つて走り出した。

「あ……行っちゃつた」

「失礼なやつコン！偉そうな態度がムカつくコン!!」

ブンスコと不満を露わにするコワポン。

それと対照的に、妖狐……頼人は鬼丸が向かつていった方向を、何も言わずに見つめていた。



「ギイ、イ、ガア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ツ!!」

ドタバタとアスファルトを踏み荒らし、悲鳴のような唸り声を上げながら、シシノケはハイウェイを進行していく。

その後方をピツタリと、鬼丸の愛機である『馬身紺剛』マシンコンゴウが追跡していた。

大馬力のエンジンが轟音を轟かせ、風を押し退けて進む紺剛。シシノケに踏み荒らされ、凸凹になつた悪路をものともせず、力強い走りで獲物に

迫つっていく。

「ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、！」

このまま引き離せないと悟ったシシノケは、夜天を揺らす声量で咆哮する。

次の瞬間、シシノケの全身に生えた棘が放物線を描きながら、鬼丸目掛けて射出された。

『運転変わるぞ』

「好きにしろ」

そう言つて鬼丸はハンドルから手を離すと、座席を足場に立ち上がる。

そして、再びバツクルに手をかざすと、片刃剣を取り出した。

それも同じ剣を2本、二刀流で構える。

飛來した無数の棘が、鬼丸のリーチに入った時……彼は動いた。

「ぜやああああッ!!」

裂帛の雄叫びと共に振るわれる二刀。
二段切りで眼前に迫る棘を弾き、剣を車輪の様に振るつて受け流し、乱舞するよう

華麗に捌く。

刃に弾かれた棘は叩き落とされ、あるいは方向を変えて他の棘を撃ち落とし、先端すらも掠らない。

鬼丸の力強く、それでいて川の流れのように流麗な太刀捌きは、毒棘の雨をものともせずに薙ぎ払つていく。

鬼丸だけではない。魔身紺剛へと憑依している夜叉の動きが、それを支えていた。
シシノケの足跡と碎けたアスファルトの欠片で、路面は悪路と化していた。
加えて、降り注ぐ棘が行先に突き刺さり、障害物となつて立ち塞がる。
だが、夜叉が——魔身紺剛が立ち止まる事は無い。

むしろ、その速度はどんどん上がつていた。

足跡を飛び越え、転がるアスファルトを吹き飛ばし、立ち塞がる棘は正面からぶつかりへし折つて進む。

行先を阻む障害は全て突破し、己の道を切り開いていく。
まさに唯我独尊。その走りには、鬼としての性質が色濃く現れていた。

それでいて、その背に立つ鬼丸がバランスを崩さないよう、彼の足場としての役割も忘れていない。

シシノケとの間隔は、徐々に縮まつていった。

「はあッ!!」

やがて弾かれた棘の数本が、降り注ぐ棘の方向を変え、それが連鎖していく。絶え間なく飛来していた毒棘の雨が、一瞬だけ止んだ一瞬に、鬼丸は腰のホルダーから新たなチャッカーを取り出す。

『着火！カマイタチ！』

妖火を灯したチャッカーを、柄頭にあるスロットへと挿し込む。

直後、鍔から炎が上がり刃全体が燃え上がる。

鬼丸は炎が灯つた剣の刃を、もう一方の剣の刃へと重ね、音を立てて滑らせる。

金属が擦れ合う音と共に燃え移つた炎が、薄暗い夜道を煌々と照らし出す。

そして鬼丸を中心に、円を描いて放たれる斬撃。

空気を斬り裂く風の刃が、竜巻となつて立ち昇り、上空より迫つっていた毒棘の全てを

破壊した。

竜巻が消えた直後、紺剛は更に加速し距離を詰める。

『坊主、射程圏内だ！』

「分かつてゐる！」

夜叉からの言葉へ食い気味に応え、鬼丸は足を開き、左足をタンクに置く。

そして、切つ先をそれぞれ上下に向けた2本の剣を左手で持ち、弓のように構える。

「この一射でブチ抜く——ツ！」

ドライバーのレバーに手を触れた、その時だつた。

視界の先を先行し続けているシシノケの頭が、こちらを向いた。

「イ、イ、イ、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、!!」

金切り声の直後、シシノケの口から吐き出される3発のなにか。

シシノケの口から垂れたそれは、焼けるような音と共にアスファルトを溶解させた。

『毒液かッ!!』

「小癩な……ツ！」

夜叉は直感的に理解している。

このまま突き進めば、確実に溶かされるだろう。

鬼丸も理解している。

この三発を回避する事は不可能だと。

いずれを避けても、避けた分がハイウエイを溶かすだろう。

そうなると、ハイウエイの真下を通る一般道路に被害が及ぶ。

更には、この毒液を相殺出来るような技は、この2人は持ち合わせていない。
動搖、焦燥、仮面の下で崩れる平静。

直後、背後から迫るエンジン音が、鬼丸の前へと躍り出た。

『シユーター！キツネビ必殺！』

「おりやあああああッ！」

続けざまに放たれた、4発の火炎球。

飛来する溶解液に命中したそれらは、その全てを一滴残さず蒸発させ、残る一発がシノケの頭部へと命中した。

予想外の援軍に、鬼丸は思わず声の主に目を向ける。

そこには、マシンに跨り銃を構えた、狐面のライダーの姿があつた。

（狐面……さつきの中坊か!?）

「毒液は俺が何とかする！今のうちに早く！」

「ツ……言われるまでもない！」

妖狐からの言葉を受け、鬼丸は再び武器を構え直す。

ドライバーのレバーを押し込み、観音開きになつていたバツクルを閉じる。

『妖火チャージ！妖火意転カーラ！』

閉じたバツクルの内部に妖火が充填され、灯籠が闇を照らす。

そして再びレバーを引くと、ベルト内で充填された妖火が左腕を伝い、2つの刃へと集中していった。

上下に弧を描く切つ先を対角に繋ぐように、炎は細い糸を形作る。

レバーから手を離し、矢をつがえる様に引いた鬼丸の右手。その指先に青い炎が集約し、一本の矢を形成していく。

「今度こそ、ブチ抜く——ツ！」

『ヤシヤ必殺！ 妖火意ブースト！』

「土御門流・破魔之流^{はまのやぶさめ}鎧馬！」

指を離すと、放たれた矢が夜を裂く。

瞬きの間に飛んだ一矢は、妖狐の放った火球に怯んだシシノケの身体を貫き、焼き尽くす。

「ギイ、イ、……ガア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ツ！」

蒼炎に包まれ、悲鳴を上げるシシノケ。

ライダー達がブレーク音と共に脚を止めた直後、その巨体は爆発と共に崩れ落ちた。山よりの怪異は今度こそ祓われ、ハイウェイには再び平穀が訪れた——。

□

「黒いチャッカー……あの人気が言つてたのはこれか」

鬼丸の変身を解いた青年は、先程までヤマノケが居た場所に転がつていたそれを手に取る。

それは、アヤカシチャツカーチとよく似た形をした、真つ黒なジツポライターだった。骨のようなゴツゴツした意匠の造りで、中心にはヤマノケの顔を模したレリーフが刻まれている。

青年はそのチャツカーチを、懐から取り出した白い布に包むんで仕舞う。

それから、もう一本のチャツカーチを街灯に照らした。

「それに、こいつはおそらく……」

もう一本のチャツカーチは、彼や頼人が持つアヤカシチャツカーチと同じ形をしていた。

青年はチャツカーチを懐に仕舞うと、拳を強く握り締めた。

「あのく……」

背後から声をかけられ、振り返る。

コワポンを肩に乗せた頼人が、遠慮がちな様子でこちらに顔を向けていた。

「さつきは助けてくれて、ありがとうございました。あなたが来てくれなかつたら、どうなつていたか……」

「礼はいい。俺も助けられたからな……」

ぶつきらぼうな調子で答えられ、頼人は苦笑する。

一方で、コワポンの表情は不満げだった。

「その……僕は篝火頬人、こつちはコワポンつていいます！あなたの名前は？」

「……土御門晴矢だ」

「晴矢さん、ですね。本当にありがとうございます！僕、まだ仮面ライダーになつたばかりで……」

「单刀直入に言う。アヤカシチャッカーとドライブーを手放せ」「え？」

突然の言葉に、困惑する頬人。

そんな頬人を睨みながら、青年……晴矢は眉間に皺を寄せた。

思わずたじろぐ頬人。

その間に、コワポンが割つて入つた。

「ちょっと待つコン！」

「コワポン……」

青年は鋭い目付きのまま、コワポンを見つめる。

「君は五行院のライダーコンね？」

「そうだ。俺はこの街に派遣された仮面ライダーだ。遊びに来たわけじゃない」

「五行院……？」

聞き慣れない単語に、頼人は首を傾げる。

「出会つて早々、どういうつもりコン！頼人に仮面ライダーを辞めろつて事コン!?」

「だからそう言つている。お前みたいな素人を、俺はライダーとは認めん」

「それ、どういう意味だよ!?」

流石に初対面でこんな事を言われれば、温厚な頼人でもカチンとくる。

しかし、晴矢は不機嫌そうに鼻を鳴らすと、頼人とコワポンを交互に見て言つた。
「何も知らない非術師に、半人前の未熟な妖狐。俺達と違つて、ろくに戦えもしないド素人が、この戦いに首を突つ込むなつて事だ」

「非術師をライダーにスカウトするのは、君達術師とは違う役割があるからだコン！
ちゃんと理由があるコン！」

「フン、どうだか。その古臭い伝統、俺は撤廃した方がいいと思うがな」「さつきから黙つて聞いてれば、偉そうに……！」

頼人が反論しようとした、その時だつた。

『小僧、その辺にしておけ』

夜叉の低い声が響いた。

「すまんな、小狐に小僧。坊主は見ての通り石頭でお。大目に見てやつてくれ」「なんだよ、夜叉」

「坊主、このままでは埒が明かんだろう。一度出直せ」「ツ!? だが……」

「このまま続けても俺は全然つまらん。酒のつまみにもなりやしねえ。それに……あんまりヤンチャしてつと、まゝた面倒なのが来るぞ」

「その『面倒な』つて、ひよつとして僕のことだつたりする?」

唐突な第三者の声に、思わずその場の全員が肩を跳ねさせる。

晴矢は声の主の姿を視認するなり、天を仰いだ。

夜叉は「俺は知らんぞ」とでも言うかのように、チャツカ一の中へと戻つていく。

頼人とコワポンも、晴矢の視線の先へと目を向ける。

そこにいたのは、ワイシャツと黒ズボンの男性だつた。

髪は光を反射して煌めく白。手足の長いモデル体型は、その姿を照らす街灯がスポットライトに感じられるほど美形だつた。

そして、何より特徴的だつたのは……夜なのに黒いサングラスをかけていたこと。

頼人は思わず、困惑気味に呟いていた。

「えつと……どちら様?」

第四夜 「五行院への誘い」

突然現れた不思議な男へと顔を向けた晴矢は、バツの悪そうに呟いた。

「来てたんですね、六道先生」

「任務先で初対面の後輩いびるなんて、そんな風に育てた覚えはないんだけどな。ねえ晴矢？」

「いや、あんた俺の親じやないだろ」

「それに、ライダー同士の私闘は禁止されているの忘れてないよね？ 違反者はベルト没収と謹慎処分だよ！」

「分かってますよ……でも——」

「デモもストも無いでしょ。その子は選ばれた。受け入れるのも拒否するのも彼の自由だけど、脅して強要するのは違うでしょ」

軽めのノリで話しかけてきた男の語気が、一瞬強まる。

サングラスの奥からの眼光に、晴矢の背筋が伸びたのが伝わった。

「それは……すみません、頭冷やしてきます」

そう言つて、晴矢はその場を離れる。

夜叉も「やれやれ」と呟きながら、その後に続いた。

「さて、と。初めまして、新人ライダーの妖狐くん！いや、篝火頬人くんだったよね？」
「えつと……あなたは？」

怪訝そうな目で見つめられると、男はからからと笑つた。

「アハハハハ、挨拶が遅れてごめんよ。僕の名前は六道薫りくどう かおる、私立五行院退魔師養成学校の東京校で教師をしている。まあ、晴矢の担任だね」
「し、私立五行……なんですって？」

「私立五行院退魔師養成学校、長いから五行院でいいよ。要するに……君をスカウトしに来たつてわけ」

「す、スカウト……？」

普通に生活している高校生が殆ど聞く機会のない単語に、思わず首を傾げる頬人。

六道は、見越していたかのように微笑んだ。

「まあ、いきなり言われても意味が分からぬと思う。というわけで、コワポンくんも交えて改めて説明しようか」

「コン！六道先生、よろしくお願ひするコン」

「コワポン、この人知り合いなの？」

「まあ、その辺も含めて明日話すからさ。場所は送つとくね」

直後、コワポンの尻尾から着信音が鳴る。

コワポンが尻尾の中から、先程ヤマノケの位置を把握する際に使ったガラケーを取り出すと、待ち合わせの場所と時刻が書かれたメールが届いていた。

「そうそう、君のお友達が2人いるよね？あの子たちも連れて来てもらえるかな？」

「どうしてあの二人の事を！」

話してないはずなのに、と驚く頼人だったが、六道はイタズラっ子のように笑うだけだ。

「あの二人もチャッカーを持つてる以上、関係者だ。色々と知る権利があるだろう？」

「先生、そろそろ離してやつたらどうです」

そこへ晴矢が、ぬりかべチャッカーを懐に仕舞いながら戻ってくる。

「そうだね。立ち話し続けるのも良くないし、もう夜も更けてきてる。家まで送ろうか？」

「ありがとうございます。でも、大丈夫ですよ。コワポン居ますし」

「そうかい。じゃあ、取り敢えずここから降りようか」

3人がハイウエイを降りた後、何事もなかつたかのようにな車が通り始める。周囲の風景も、ライダー達が戦つていた時より明るくなつたように見えた。



晴矢と六道、二人と別れた頼人はコワポンと共に、自宅への帰路に着いていた。家まで続く坂道で自転車を押しながら、頼人は肩に乗るコワポンに喋りかける。

「なんだか、すごい人達だつたね」

「六道先生は、五行院の幹部の一人なんだコン。座学の教え方も上手で、いい先生なんだコン！」

「へへ、見た目あんなに胡散臭いけど、凄い人なんだね」

「でも晴矢ってやつは偉そうでキライだコン！ 頼人に對してあんな事言うなんて許せないコン！」

ぶりぶり、パンスコ。そんな擬音が似合う顔で怒るコワポン。

その可愛らしい姿を見ていると、頼人の心に残っていた苛立ちも、何処かへ飛んでいつてしまつた。

「フフツ……」

「ん？ 頼人、どうして笑つてるコン？」

「ありがとう、コワポン。僕のために怒つてくれて」

「当たり前コン。頼人はもう、ボクのパートナーだコン！」

「うん！……あ、忘れてた」

頼人はコワポンの方へと、自分の手を出した。

「その、今更だけどさ……よろしくね、コワポン」

差し伸べられた手を見て、コワポンもその小さな前足を伸ばして応じる。

「こちらこそよろしくコン、頼人！」

人間と妖怪、異なる種族。

偶然出会った少年と妖狐は、青白い街灯に照らされながら、しつかりと握手するのであつた。



「つたく、揃いも揃つて何も分かつていねえだろ……」

『まあまあ、もう少し様子を見てみようじゃねえか。面白そうだしよお？』

御影市全域を見下ろす高台で、晴矢は溜め息混じりに呟いた。

一方、相棒の夜叉は、どこか楽しそうだ。

「先生、やつぱり俺は反対です。非術師をライダーに選ぶ意義が、俺には理解できません

……」

晴矢は眉間に皺を寄せたまま、隣に立つ六道へと顔を向ける。

「確かに、ただの古臭い慣習なら撤廃すべきだと僕も思うよ。でもね、それだけじやない気がするんだ、この制度は」

「それはどういう……」

「さあ？あくまで予感だよ」

あつけからんと肩を竦める恩師に、晴矢は溜息を吐く。
だが、その眉間から皺は取れていた。

「あんたがそこまで言うなら……信じてあげますよ。俺には分かりませんけど、根拠はあるんでしょ」

晴矢の言葉に、背後で浮いている夜叉がニヤリと笑った。

「それで晴矢、この街をどう思う？」

「この街を、ですか？」

晴矢は少し考え込むように、顎に手を添えた。

「昼間に着いたばかりですが、街中から嫌な気配を感じました。妖怪達の気配とは違つた、禍々しさのようなものを強く感じます」

「やつぱりそうか。どうやらこの街、何かしらの勢力が巢食つてるみたいだよ」

「そう言うと六道は、燃え焦げた紙切れを取り出して見せる。

「これは？」

「さつき君たちに合流する前に、山の中で見つけた石碑に貼られてたんだけど、剥がした
ら燃えた」

「燃えた？」

「そう。どうやらこの街、結界で覆われてるみたいでね」「はあ!?」

「この御札には、その結界に上塗りするような呪術が込められていたんだ」「つて事は……何者かが一枚噛んでいる、と?」

「思つたより大きな事件になるかもしれないね……」

そう言つて六道は、街を見下ろす。

静寂に包まれた街の暗闇は、何かを覆い隠しているように渦巻いて見えた。



「それで、ここが集合場所?」

翌日の土曜日、オカ研の3人は昨日、メールで指定された場所へと来ていた。

「ここつて確かに、前まで神社だった場所だよね?」

「そうつスね。確かに1週間くらい前、火事で焼けて修復中だつたような……」

「でも、間違いなくここつて書いてあるコン」

階段を昇つた鳥居の前には、関係者以外立ち入り禁止の立て看板が立つている。

呼ばれて来た春歌も鉄平も、そして春歌の肩に乗つたコワポンさえも首を傾げていた。

「お、時間通りだね。おーい、ここだよー!」

そこへ、呼び出した本人の声が聞こえてくる。

振り向くと、神社の奥から六道がこちらへ向かって手を振っていた。

「六道さん!? ここ、立ち入り禁止なんじゃ……」

「いや、僕関係者だから」

「そりなんですか?!」

「五行院は神社本庁と繋がりがあるからね。……つと、やあやあはじめまして!」

そう言つて六道は、3人を手招く。

「犬山春歌ちゃんに、豆田鉄平くんで当たつてるよね?」

「そうつスけど……」

「なんで私たちの事知つてるんですか?!」

「五行院の情報網は結構広いのさ。悪いけど、一通り調べさせてもらつたよ。ごめんね

」

「あ、怪しすぎる」つス……

早速、初対面の2人からも怪訝そうな目を向けられてしまう六道。

だが、当人は特に気にしていないようだ。

「なにせ君達が関わったのは、国ですら公にはしていない存在だからね。無論、無闇に口外しないでもらえると助かる」

「も、もしも口外しちゃつたら、どうなるんスか……？」

震える声と共に拳手する鉄平に、六道は声を低くして応じた。

「黒服のこわいおじさん達が家に来て、証拠ひとつ残さず何もかも始末してから——」

「ひいいいいツ!!」

「……つてのは冗談なんだけどね」

「脅かさないでくださいよツ!?」

六道はおちやらけた声で笑いながらネタを明かす。

思わず縮こまつてしまつた頬人も、大声でツツコミを入れた。

「でも半分くらいは本当だから、そこら辺は気を付けてね。さあ、こっち来なよ」

手招きしながら歩き去つていく六道の背中を、頬人達はゆっくりと追いかける。

「……コワポン、今のどこまでが本当なの?」

「怖いおじさん達が来るつて所までは本当だコン」

「怖いおじさん達が来るのは本当なんスか!? ヒイイ……」

「鉄平、ビビりすぎじゃない？」

歩きながら、春歌は境内を見回す。

燃え尽きた社殿に、所々が抉れた参道。

社務所は吹き飛んでおり、あらゆる場所に破壊の痕跡が残っていた。

そして、それらを作業員らしき服装の人達が調べている。

「これ、どう見ても普通の火事じゃなさそうだよね」

ふと、春歌が呟いた。

「嫌な臭いが残ってるコン。間違なく怪異の仕業コン」

「怪異が神社を襲つたってこと?」

「この神社はね、五行院の支部だつたんだ」

六道は前を歩きながらも、頼人達の話を聞いていたようだ。

一定の距離を空けながらも、六道は丁寧に説明する。

「1週間ほど前、ここ、御影支部からの定期連絡が途絶えた。通信が途絶えて数分後、あちらでどうにか撃退できたと報告されたんだけど、どうにも腑に落ちなくてね。周辺支部から調査隊を結成して、派遣してもらつたんだ」

「そ、それで、どうなつたんですか?」

「派遣された調査隊は音信不通、だつたんだけど……」

「けど、なんですか?」

六道は少し間を空けたあと、口を開いた。

「昨日、頼人くんと戦つたヤマノケが、手掛かりを持っていた。いずれ判明するはずさ」

「そうですか……。無事に見つかるといいですね」

「ああ」

敢えて直接的な表現は避けたが、何となく頼人たちも察したのかかもしれない。口を閉じ、揃つて目を伏させていた。

「り、リクドーさん！質問、いいですか？」

気まずい雰囲気になりそうな空氣を打破したのは、春歌だつた。

「六道先生、でいいよ」

「じゃあ、リクドー先生。私たち、これから何するんですか？」

「あれ、言つてなかつたつけ？」

「えつ！」

六道の言葉に、頼人は慌ててメールを確認する。

「あはは、なくんてね。それは僕らの拠点で話そうか」

そう言うと、六道はようやく足を止めた。

見ればそこは、境内の中庭に並んでいた石灯籠の前であつた。

「これくらいなら、まだ直せそうだ。ぬりかべ、よろしく！」

『着火！ヌリカベ！』

ぬりかべのチャツカ一に点火し、隣合つた二基の石灯籠を修復する。

それから六道はもう一本、デフォルメされたような目の付いた炎のレリーフが刻印さ

れたチャツカ一を取り出す。

「さあ、釣瓶火。仕事だよ」

『着火！ツルベビ！』

灯つた妖火に息を吹くと、火の玉が2つ現れ、それぞれの火口と入つていく。二基の灯籠に火が灯つた次の瞬間、その中間に位置する空間が螺旋に歪む。

「なんかグニヤツとした!?」

「六道さん、一体何を!?」

「僕らの本拠地とポータルを繋げた。さあ、入つて入つて！」

そう言つて六道は、空間の歪みへと入つていく。

「2人とも、どうする？」

「ど、どうするつて言つたつてえ……」

「何だか面白そう！私、一番乗り～！」

「あ、ズルいぞ春歌！」

「ちよつとお!?頼人先輩！春歌先輩！待つてくださいよお～！」

先を争うようにポータルをくぐり、消えていく2人。

取り残された鉄平は、おそるおそる指先で歪みに触れようとする。

水面に指を突っ込んだ時ののような感覚と、それを隔てた先に感じる空気の肌触り。

あまりにも不思議な感覚に、足を踏み出すべきか迷う鉄平。

「なにしてるコン。早く進むコーン！」

「ひえあつ!!」

と、いつの間にやら春歌の肩から降りていたコワポンに勢いよく突き飛ばされ、鉄平は悲鳴を上げながらポータルに押し込まれるのだった。

第五夜 「妖怪と怪異（前編）」

第五夜 「妖怪と怪異（前編）」

「あいててて……何するんだよコワボーン！」

「鉄平がいつまでもポータルを通らないからコン」

「だ、だつて怖いし……」

コワボンに突き飛ばされ、前のめりになりながらポータルをくぐった鉄平は、立ち上がりと周りを見渡す。

視界の先に広がっていた風景に、鉄平は思わず呟いた。

「これ……学校？」

「ここが五行院東京支部、またの名を『私立五行院退魔師養成学校 東京校』だコン！」

そこは、森林に囲まれた三階建ての校舎だった。

木造とコンクリート、二棟の建物が連なつており、校舎の前にはグラウンドが広がっている。

慌てて背後を振り返ると、二基の石灯籠に灯つた火が揺れているだけであり、先程まで居たはずの神社は跡形もなく消えていた。

その代わりに、生い茂つた木々がざわざわと揺れるだけである。

「おーい鉄平、早く来いよー！」

「置いてつちやうよー」

振り向くと、既に頬人たちはグラウンドの方へと向かっていた。

「ま、待つてくださいっスー！」

置いていかれまいと走り出す鉄平。

その頭に、コワポンはさりげなくピヨコツと乗つかつた。

□

古めかしい木造校舎と、新しめのコンクリ校舎。自然の中にありながら、文明の利器が存在する。

そんな相反する存在が両立された環境の校舎に、僕ら3人は足を踏み入れる。

校舎に足を踏み入れた僕達は、六道さんの案内のままに木造校舎の一室へと通される。

通されたその部屋は、机と椅子が並べられ、黒板にチョークで「ようこそ」の文字が書かれており——つまり、どこにでもあるような教室だつた。

ちなみにここへ通される前、お茶として自販機で飲み物を奢つてもらつた。

「り、六道先生……質問いいですか？」

「はい、鉄平くん」

「なんで僕たち、教室に通されてるんです？」

「だつて、今から色々説明するのに、黒板ある方が便利じゃん
さも当然のよう答へられた。

これは客人というより、インター生への待遇な気がする。

「それじや、仮面ライダーについてはコワポンから聞いてるだらうし……まずは妖怪と
怪異について説明しようか」

そう言うと六道さん……いや、六道先生はチョークで黒板に「妖怪一怪異」と書いて、
真ん中を直線で区切った。

「まずは『妖怪族』。世間一般では『妖怪』と呼ばれているね。彼らは元々別の次元から
やつてきた種族で、精神だけの存在だ。彼らを認識できるのは、彼らの存在を受容する
思考を持つ者に限られる。と、ここまで質問あるかな？」

「はい！リクドー先生、質問いいですか！」

春歌が勢いよく手を挙げ、ハキハキとした声で質問する。

ああ、間違いないな。これは……

「春歌ちゃん、どうしたのかな？」

「言つてること難し過ぎるので、もつと分かりやすくしてください！」

やつぱり……。春歌はこういう難しい単語が並ぶ授業が苦手だからなあ。

僕は色々な本を読んでるから何となく理解出来るけど、今の話は一定量の知識をする内容だつたと思う。

すると六道先生は、あちゃーとわざとらしく額に手を当てた。

「ごめんね、いつも生徒達にしてると同じノリで話しちゃつてたよ。分かりやすく言い直そうか」

「僕からもお願ひしますっス。いきなり置いてけぼりくらつたかとヒヤヒヤしたっス」「OK、じゃあもう一度説明し直そう」

六道先生は、チョークで黒板に図を書きながら説明を再開した。

「妖怪族は実体を持たない。つまり、魂だけで生きている種族なんだ。だから、普段はこつちに干渉ことが出来ないし、向こうからこちらへ干渉することもできない。この辺りは分かるかい？」

「はい！つまり、オバケと同じって事ですね！」

「まあ、そういう事。で、精神体の妖怪族を認識することができるのは、彼らの実在を信じている人間だけなんだ。妖怪や幽霊を信じない人間に、彼らの姿は知覚できない」「ふむふむ……なるほどっス」

なるほど。概ね思つた通りの説明だ。

でも、いくつか疑問はある。

「六道先生、質問いいですか？」

「いいよ！」

「精神体である妖怪達が、どうしてこちらへ干渉出来るのでしょうか？」
コワポン達もそうだけど、怪異は人を襲い街を破壊していた。何か違いがあるはずだ。

「いい質問だ。妖怪族は基本的に物理的な干渉力を持たない。ただし、彼らが物質世界に干渉を果たせるようになる方法が二つある」

六道先生は指を2本立てながら、黒板にこう書いた。

「1つは『憑依』、もう1つは『実体化』だ」

「憑依と実体化……」

ポーチから取り出したメモ帳に素早く書き記す。

本物の妖怪の生体を、専門家から聞けるんだ。しつかり記録しておかなくちゃ。

「まず憑依。これは精神体である妖怪族が、物質世界に存在する物体や生物に乗り移つて行動する事象だね。頼人くんは昨日見てるだろう？」
「あっ、フォックストライカー！」

「その通り。あれも憑依の応用だよ」

なるほど。確かに古来から、狐憑きとかトウビヨウと呼ばれる現象は語り継がれてきた。

それらの現象は、妖怪がこつちの世界に干渉する為の肉体を得ようとして起きる現象だつたんだ。

「そしてもう1つは実体化。これは色々条件があるんだけど、一定以上の力を持つた妖怪は実体を持つようになるんだ。コワポンもその一人さ。というより、コワポンの家系は皆そななんだけど」

「へえ～、コワポンちゃん凄いんだね！」

「えっへんだけン！」

春歌が自慢げに胸を張るコワポンを撫でる。

分かるよ。僕も定期的に撫でたくなる。

「条件つて、どんなのつスか？」

「そこを説明するために、ちょっとクイズを出そうか。デデン！問題！」

思わず背筋を伸ばす。

い、いきなりクイズ？

「妖怪族は精神生命体だ。だから食事の必要は無い。ただし、代わりにあるものを養分としているんだけど、そのあるものつてな～んだ？」

妖怪達が何を養分としているか、か……。なんだろう？

河童はキユウリや尻子玉、狐なら油揚げ、二口女ならおにぎり……なんて逸話が多く残っているけれど、おそらくそういうものではないんだろう。

だとすれば……

「えーっと……血とか、ですか？」

「春歌ちゃん不正解。それだと妖怪はみんな吸血鬼だ」

「あちや～違つたかあ」

血肉を求める妖怪も居ないわけじゃない。

でも、種類としてそこまで多いわけじゃなかつたはずだ。

となると他に考えられるのは……

「はい！魂じやないっスか？」

「鉄平くん……惜しい！でも、いい所まで來てるよ！」

「ホントつスか!?くう～！」

「……もしかして」
　　い。
　　魂を喰らつて力にする。そういうのもゲームとかでよくあるやつだ。でも違うらし

　　そういうえば、ヤマノケは学校に出た時、何かしていたような……。

「……もしかして」

僕は静かに手を挙げた。

「はい、頼人くん。答えをどうぞ」

「もしかして、人間の“恐怖”……いや、喜怒哀楽といった“感情”ではないでしょうか？」

僕からの答えに、六道先生の口角が上がった。

「頼人くん……君、中々理解があるね。大正解だよ！皆、拍手～！」

「え、ホント!? 頼人凄い!!」

「頼人先輩、予習でもしてきたんスか!?」

「頼人すごいコン！」

皆が驚いた顔で拍手を送つてくる。

正直、僕も当たるとは思わなかつたのでビックリだ。

「頼人くんの言う通り、妖怪族は人間の激しい感情をエネルギーに変換し、それを養分にしているんだ。だから、人間と積極的に関わろうとする。その中で交流し、それが後世に物語として残されているんだ」

「リクドー先生、例えばどんなのがあるんですか?」

「多くの場合、助けてもらつた恩返しをきつかけとした交流が記録に残つてゐるね。ほら、動物を助けて恩返しされる物語、色々あるでしょ?」

例えば、鶴の恩返しや舌切り雀、浦島太郎の亀などが当てはまるだろう。

憑依の習性を聞く限り、納得出来る所が多い。

「でも、中でも一番引き出しやすく、効率的に集められる感情がある。それが恐怖や驚きといった、『恐怖の念』だ」

「恐怖の念……」

「そう。人間にとつて未知の存在である彼らにとつて、最も引き出しやすい感情は、恐怖の念だつたんだ。そういう記録は『怪談』として残されているね」

「ひいいいッ！」

鉄平が突然青ざめて頭を抱えだした。

「鉄平、落ち着きなよ」

「だだだだつてえ！今のつてつまり、古典の怪談は全部実話つて事じやないっス
かあああ！！」

「まあ、全部が全部実話つてわけじやないよ。特に、昭和以降の怪談は殆どが作り話だ」
鉄平、ビビりなのに怪談漁るの大好きだからなあ。

「でもノンフィクションつて言われたら、そりや印象変わるよね。

「話を戻すけど、そうやつて人々から多くの恐怖の念を集めた妖怪達は、実体を手に入れ るようになつたんだ」

「そつか。狐つて神社で祀られるくらい、信仰集めてますもんね」

「そういう事コン」

「またコワポンが自慢げに胸を張っている。

可愛いのでなでなでしておこう。

「なるほど……。頼人、今の説明分かりやすくできない？」

「え？ 今のもつと？」

「春歌先輩、今ので理解できなかつたんスね……」

「だつて私、2人ほど詳しくないんだもん」

実の所は、春歌はオカ研の中で一番オカルトに疎い。

でも、興味はあるので知ろうとしてくれるから、こんな時は身近な例で説明する事にしている。

「春歌はゲームやるだろ？ 妖怪が人間をアバター代わりにして活動するのが憑依。人間から恐怖をスペチャしてもらつて、それを元手にモデル作つてV T u b e rになるのが
実体化」

「ああ～！なるほど、そういう事か～！」

「現代つ子らしい喻えだね～。でも的確だ。今の説明、今度から僕の授業で使つていいく？」

「先生まで感心してゐるつス……」

春歌も理解してくれたところで、そろそろもうひとつ種族について聞かなくちゃならない。

「それで先生、怪異というのは？」

「ああ、そつちの説明もしなくちやね」

その瞬間、声のトーンが下がった。

一瞬で背筋が伸びる。六道先生の目は、サングラスの奥で鋭くなつてゐるのが伝わってきた。

「怪異。こいつらの存在が確認されたのは、つい最近の事だ」

「つまり、新種つてことですか？」

「いや、新種じやない。最初は僕らもそう思つていたんだが、全くの別物だ」

確かに、ヤマノケはコワポンや夜叉とはどこか雰囲気が違つていた。

禍々しさというか、どこか生理的に嫌悪感を抱きたくなる気配が全身から溢れ出していた。

「妖怪達は、基本的にこちらの世界へは干渉出来ないんだけど、こいつらは違う。どうやつて発生してゐるかは分からぬが、どうも最初からこちら側へ干渉できるらしい」「最初つから……!？」

「ひえええ……」

そう言つて六道先生は、怪異の特徴を箇条書きにしていく。

声のトーンは戻つていいるけど、さつきと比べておどけてこない。

それだけ眞面目な話になるんだろうと、僕は肌で感じていた。

「正確な個体数はまだ把握できていない。だが、これまで確認された個体は、君達を襲つたヤマノケを含めて三体。だが、共通点がある」

「共通点……？」

「勿体ぶらないで教えてくださいよ！」

身を乗り出す僕と春歌。震え始める鉄平。

六道先生は、これまで確認された怪異の写真を黒板に貼り付けながら答えた。

『都市伝説』だよ』

□□□

五行院東京支部 研究練 とある研究室

多くの機材と実験器具、そして山と積まれた何冊もの本。

研究者の根城を絵にしたような部屋の真ん中で、白衣の少女は呟いた。

「んく……んく……ダメだ、サッパリだねえ……」

背もたれにこれでもかと背中を預け、天井を見上げる。

ふわふわとした栗毛のショートヘアの頂点から生えたアホ毛が、彼女の動きに合わせて揺れている。

「サンプルが少な過ぎて、調べようにも手掛かりさえ掴めない……。はあ……こんなにも面白そうな研究対象なのにねえ……」

「やる事なくて暇してるなら、部屋の掃除ぐらいしたらどうですか……？」

部屋の引き戸を開ける音に、栗毛の少女は視線を向ける。

声の主は、ストレートな黒髪を腰まで伸ばした少女だった。

室内を見渡し、呆れたように溜息を吐いている。

「いちいち片付けてたら、使いたくなつた時にまた取り出さないといけないじゃないか。だつたら最初から出していた方が効率的だろう？」

「……そう言つて、提出予定の研究資料がいつ崩れるかも分からぬ紙の山に埋もれて、べソかきながら私に探すの手伝わせたのはどこの誰でしたつけ？」

「あれから資料はちゃんとファイルに入れて整理してあるじゃないか！」

「じゃあ研究器具も片付けられるようになつてください」

「うう……黒海はつくづく手厳しいねえ……」

「多貴子さんはもう少し生活力を身につけてください……」

「だって私は今、怪異の正体を解き明かしたくてたまらないんだよ！なのにデータが少

な過ぎる！サンブルも無い！研究が進まなくて退屈なんだよー!!」

白衣の少女、多貴子は拗ねたような顔でそっぽを向く。

黒髪の少女、黒海は肩を竦めると、引き戸の向こうを覗いた。

「そんな事より、来客ですよ」

「誰だい？」

「多貴子さんが欲しがつてる物を持つた人です」

「ほほおう……？」

「2人とも、休日で悪いが失礼する」

黒海が退いた直後、引き戸を開いて入つてきたのは、ヤマノケから頼人を助けた少年、晴矢だつた。

「大至急、この2つを調べてもらいたい」

そう言つて晴矢は、六道から預かつた紙片と、ヤマノケから回収した黒いチャツカ一を取り出す。

それらを見た瞬間、多貴子は椅子から立ち上がり、目を輝かせた。

「ほおう……實に面白そうじやあないか……」

第六夜 「妖怪と怪異（後編）」

「都市伝説……ですか？」

「そう、都市伝説。口裂け女とか人面犬とか、比較的新しめの怪談に登場する恐怖の対象だね」

六道先生が貼り付けた写真には、3体の怪異の姿が映っていた。

1枚目には、血のように赤いマントを羽織った白い仮面の怪人。

2枚目には木箱を分解し、継ぎ接いで形にしたような姿の異形。

3枚目には、僕が戦ったヤマノケ。

う。

2体目が何の怪異かは分からぬけど、1枚目は外見からして間違いなくアレだろ

うええ……全然可愛くない……」

「六道先生、妖怪と都市伝説に違ひつてあるんスか？」

「昭和以降の怪談はその殆どが作り話だつて言つたじやん？記録と娯楽の違いだよ」「娯楽、ですか？」

春歌が首を傾げる。

確かに。都市伝説が作り話だと言うのなら、『記録と虚構』と言つた方が適切な気がする。

でも、六道先生は虚構ではなく娯楽だと言つた。それは何故だろう？

「そこ」を詳しく掘り下げるに長くなつちやうんだけど……まあ、怪談つてのは記録であると同時に、一種の教訓でもあつたんだ。人間が生きていく上で大切にしなければならない教えや心構え。そういういつたものを、妖怪という不可思議な存在との交流を通して広く伝えていく。そういうのも怪談の役割の一端だつたのさ」

聞いた事がある。

例えば、あかなめ。掃除をほつたらかして水垢だらけになつた風呂場に現れ、溜まつた垢を舐める妖怪だ。

風呂場はこまめに掃除するように、という教訓を含む怪談だとされている。

また、生活面での教訓のみでなく、海坊主やダイダラボッチのように大自然の中へ妖怪を見出し、驕り高ぶる人間への戒めとしたものもあるそうだ。

「でも都市伝説つてのは、未知への恐怖を娯楽とするために作られた。異形の存在へ恐怖する事そのものを、あるいは恐怖させる事を楽しむために存在している。まあ、その内のいくつかは、本当に恐怖を集めるまでに至つたけどね」

「ああ……言われてみると、口裂け女とかつて映画にもなりましたよね」

「やめてください、いつスマジ無理っス勘弁して欲しいっス!!あの映画ホント怖かつたんスからあ!!」

夏休みのホラー映画鑑賞会を思い出したのか、鉄平がガクブルと震えだした。
怖がつてるけど、なんだかんだで見たがるんだよね。

今の説明に、ここまで分かりやすく例を示してくれるとは……。

「奴らは妖怪と違つて、見た目も習性もかなりバラバラだ。妖怪とも怨霊ともつかないから、『怪異』と名付けられた。ここまで理解してくれたかな?」

「春歌、今の説明分かった?」

念の為、確認はしておく。

「なんとななく、は。カタギに手を出さないヤーさん達のナワバリで、ポツと出のくせに素行が悪くて生意気な半グレ軍団が幅を利かせてる、みたいな感じだよね?」

「喻えが任侠映画!!」

「ん～～～～大体合ってるからOK!!」

六道先生は今の喻えがツボだったみたいだ。

さつきまでの真面目な顔が何処かへ吹っ飛んでしまっている。

「とまあ、違いはこんな感じ。そして一番の違いは、妖怪はチャッカーに封印できるけど、怪異は封印できない事だね。その代わり、倒せばそれでおしまいだ。僕達の仕事は、

妖怪や怪異を封印、ないし討伐することだよ」

六道先生はそこで説明を締めくくろうとしたが、僕はまだ疑問が残っていることを思い出した。

「でも先生、ヤマノケは復活しましたよ?」

「ああ、あれ。どうもヤマノケが落とした黒いチャッカー、アレがコアになつてるらしいんだ。倒したと思つていた前の2体も、もしかしたらチャッカーが破壊されたか、或いは……」

「或いは?」

「いや、なんでもない。とにかく、妖怪と怪異についてはこの辺で」

そう言つて六道先生は、黒板を上にスライドさせた。

「それじゃ、次は僕たち五行院について知つてもらおつか」

さつきまで書き込んでいた黒板がスライドするのと同時に、もう一枚の黒板が下へ降りてきた。

2枚目の黒板の真ん中に、六道先生は『五行院』と大きく書いた。

「五行院は元々、京都の陰陽寮を基盤とした組織だ。今では日本全国に支部があつて、各地に棲んでいる妖怪たちを監視、或いは強力な妖怪が封印された土地の管理を行つている。そして、組織の拡大に伴つて12年ほど前に新設されたのが、この『東京本部』だ。

京都の総本部に次ぐ規模なんだよ！」

陰陽寮って、あの陰陽寮!? 現代まで続いてたんだ……！

……あれ？ でも、東京本部の設立、割と最近？

「リクドー先生、そんなに大昔からあるのに、なんで東京に出来たのは最近なんですか？」

「確かに……普通、こういうのって東京が優先されると思うんですけど」

僕より先に春歌が、そして鉄平が反応した。

東京は日本でも特に靈脈の集まっている土地だ。

五行院が平安時代の頃から活動しているとすれば、新しく見積つても江戸時代には東京にも支部を置いているべきじゃないだろうか？

「東京支部そのものはあつたよ。ただ、当時は色々面倒な事があつてね……東京支部が東京本部として再編されたのが、12年前だつたつてわけ」

「再編……？ クラス替えみたいな感じですか？」

「まあ、そんなとこ。それまではず一つとボロい木造建築だけでき、雨漏りがひどいのなもの！」

「なんだろう……一瞬だけ、六道先生の表情が固くなつた気がした。
もしかすると、あんまり聞かない方がいいのかも知れない。

鉄平も何かを察したのか、僕の方に顔を見合わせてきた。

「六道先生！」

「ん？ どうしたのかな、鉄平くん」

「仮面ライダーって、全国に何人くらい居るんですか？」

「おつ、いい質問だねえ！」

六道先生の顔がめちゃくちゃ笑顔になつた。

え、なんで？ 今の質問、笑顔になる要素あつたつけ？

「仮面ライダーも勿論、全国各地の支部に数名単位で配属されているよ。といつても、組織全体でみれば2割くらいかな。あの8割は後方支援の担当とライダーではない教師、いわゆる『祓人

（はらいにん）

』で構成されてるね」

組織全体の2割か……結構少ない方なんだ。

でも、全国規模の組織の2割だから、人手としては充分なのかもしれない。

「中でもこの東京校は、仮面ライダーの育成に力を入れていてね。全国から将来有望な子達が集まつてくるし、ここで仮面ライダーになつた子達が他所の支部でも大躍進してたりするんだよ～！」

そう言つて、六道先生はスマホの画像フォルダから何枚もの写真を僕らの方に見せる。

いや……これは見せびらかして、つて言つた方が正しいのかも？

「皆、僕の自慢の生徒たちさ！ ほらほら見て見て可愛いでしょー！」

「せ、先生……圧が……」

「圧がすごいです……」

「始まつたコン……六道先生の教え子自慢だコン……」

春歌だけが、目をキラキラさせて写真を眺めている。面食いめ……。

「邪魔するよ」

と、引き戸が開く音と共に、しゃがれた声が響き渡る。

入つて来たのは、藤色の着物を着たおばあさあだつた。

「学長！ お早いですね。今から紹介しようと思つてたのに」

「薰、アンタの紹介はくどいんだよ。自分の名前くらい、自分で名乗るさね」

そう言つておばあさんは、一つ咳払いした。

「五行院東京校学長、菅原藤代すがわらふじよだよ。こんな辺鄙な所までよく来てくれたねえ」

「い、いえ……」

「來たつていうより、連れてこられたといいますか……」

とても穏やかな口調で自己紹介するおばあさん。

なんだかいい人そうだ。

「藤ばあはこここの学長で、東京市部の局長もあるから、皆失礼の無いようにね～」

「菅原学長とお呼びツ！」

「痛あツ！ 暴力反対ですよ学長！」

「アタシの知つてる若いのの中じや、アンタが一番失礼なんだよ！」

「おばあちゃん扱いされるほど老いぼれてないで sy……痛い痛い！ 分かつた、分かつたから脇腹狙うのやめて！」

……と思つていたら六道さんの脇腹思いつきりドツいてた。

怒らせたら怖いんだろうな……。

「ふう……。さて、妖狐を繼いだのは——」

「僕です」

「名前は？」

「篝火頼人です」

「ほう……篝火くん、かい」

藤代学長は僕の顔をじっと見つめる。

何も言わずに見られているので、何だか落ち着かないな……。

観察されてる気分だ。

「あの～……僕の顔に何か付いてます？」

「……いや、何でもないさね」

藤代学長は袖から3つの巾着袋を取り出すと、それぞれ僕らの机に置き、教卓へと登壇した。

「それはワシらからの支給品、五行院の証が入つておる」

そう前置きすると、藤代学長は神妙な顔つきで口を開く。

「きつかけがどうあれ、お主ら3人とも五行院の一員になれる資格がある。どうか力を貸してほしい。勿論、今までの説明を聞いた上で、嫌ならこの誘いを拒んでもええ。記憶を消した上で、家まで安全に送り返そう。じゃが、もしもその巾着を解き、中の物を取り出したら……お主らもワシの生徒じや」



「ヤマノケのチャッカー、ライダーの連中に盗られちゃつたんだつて？ ウケる！」

回収から戻ってきたレンダーマンを、天井からぶら下がつたテケテケはケラケラと嘲笑う。

「どーすんだよ？ こんなヘマやらかしちやつてさ。アイツらに色々、タネがバレるん

じやねーのお？」

「テケちゃん、随分と嬉しそうね」

「だつて、普段上から目線で命令してくるヤツがやらかしたんだい？ これくらい許

されるよね、お姉様～？」

猫撫で声で嘲りながら、口裂け女の隣に飛び降りるテケテケ。しかし、スレンダーマンはいつもと変わらぬ声音で返す。

「この程度で計画が露呈するほど、私の仕掛けは単純ではありませんよ。実験も面白いデータが取れたので満足です。それに、1本くらい差し上げたところで計画になんら支障はありません」

「……へえ、随分ヨユージやん」

「余裕も何も、計画はとても順調ですからね」

そう言つてスレンダーマンは、部屋の中心に据えられた台の上に置かれたケースを開ける。

ケースはジッポケース型で、中にはコレクションのように黒いチャツカーハンモックが何本も収納されていた。

刻まれたレリーフは、全てが個別のものだ。

「下準備は既に万全。次は彼らを招待するのみです」

「始まるのね、私達のステージが」

口裂け女は待ち焦がれたように、テケテケは祭りを前にした少女のように口角を釣り上げる。

「せいぜい励んでもらいましょ。全てはこの世を呪うために」

部屋を照らす青の灯火が、帳の中で不気味に揺れた。

□

夕刻、六道はゆっくりと学び舎の廊下を歩いていく。

頼人たちを灯籠まで送った後、黒スーツの職員から受け取ったファイルを手に、彼は学長室を目指していた。

「失礼します」

扉の前で立ち止まり、ノックの後に入室すると、藤代が飼い猫と戯れているところだった。

「学長、お邪魔だつた？」

「アンタが今、うちのタマに手を出すなら追い出してやるだろうね」

「へいへい、そんな真似しませんよ。引っ搔かれたくないですしー」

藤代は六道に顔を向けず、膝の上で丸くなつたタマを撫でながら問い合わせた。

「縁つてのはほどほど、何があるか分からぬもんだね」

「ええ、全くです。僕も知つた時は驚きました」

「じやが、あの男はこうなる運命も予期していた。きっと何かを託している筈じゃ」

「心配なさらずとも、篝火頼人は守り通します。その上で彼には強くなつてもらう。彼

自身のためにも」

六道はそう言って、抱えていたファイルを捲った。

中身は、全国各地に存在する五行院の支部に所属するメンバーの顔写真とプロフィールが纏められたもの。中でも『仮面ライダー』となつた者達を選んでまとめたファイルだ。

「大厄災をもたらす『国呑みの巨蛇』^{おおへび}、あの預言は必ず阻止せねばならぬ」

「ええ。その為にも、怪異の正体を暴かないと……」

「薫、預言と怪異に関係はあると、本気で思つとるのか？」

「ええ、おそらく。僕の勘、外れた事ないでしょ？」

「なら、この件はお前に任せる。しくじるんじやないよ」

「しくじりませんよ。僕、最強なんで」

そう言つて六道は、この世に敵などいないと豪語する悪童のような、屈託のない笑みを浮かべてみせた。

第七夜 「御景支部、始動」

五行院の一員になつた翌日、僕と春歌、鉄平、そしてコワポンは、3人と1匹で再び五行院御景支部を訪れた。

家に戻つた後、菅原学長から貰つた巾着の中に入つていたガラケー、『五行フォン』にメールが届いていたのだ。

何故ガラケーが……と思つていたんだけど、どうやら五行院の人達の業務用連絡手段として採用されているらしい。

スマホとは違う独自の電波を使つてゐるらしく、任務や秘匿したい連絡はこつちで行うよう念を押された。

「スマホにモデルチエンジしないのは開発部の強い意向らしいコン」

ちなみに、僕の五行フォンはコワポンが持つていてものを受け取つた。キヤンドライバー共々、交靈紙の持ち主に渡すために持つていたらしい。

そんなわけで、春歌と鉄平と合流し、石段を登つて鳥居をくぐる。

すると、そこには……昨日まで爆心地のように荒れ果てていた社殿はなかつた。社殿も、参道も、社務所も全てが元通りになつている。

「「な、直ってる――!?」」

「ぬりかべチャッカーを複数使えば、どんなにボロボロになつた建物でも元通りコン
これが妖怪の力か……。すごい、物理法則の常識なんて遙かに越えてる!!

「本当に何でも元通りに直せちゃうの?」

「ぬりかべが直せるのは、建物や石材を使つているものだけコン。中の家具までは効果
が及ばないから、大抵は家具デザインの得意な妖怪に直してもらうか、新調しているコ
ン」

「なるほど、何でもアリつてわけじやないんスね」

ぬりかべ、だけに壁に関係してるので。

ひよつとして、鳥山石燕じやなくて水木大先生が描いた方の姿だつたりするんだろう
か?

家具、デザインやつてる妖怪つてのは想像つかないな。ちょっと会つてみたいかも。
「……来たか」

声の方を振り向くと、晴矢さんが鳥居にもたれて立つていた。
相変わらず不機嫌そうな顔で、少し近寄り難い。

「ついてこい。雪村先生が待つてる」

それだけ言うとさつさと僕らの前を歩いて行つてしまふ。

春歌と鉄平は不安そうに顔を見合せたけど、「大丈夫だよ」と言つて僕は歩き出した。

「…………」

晴矢さんの後ろ姿を見ながら、コワポンが何か言いたげな顔をしていたけれど、結局何も言わずに僕の肩に飛び乗つた。

初対面の時からあんな感じだし、僕もあんまり良い印象は抱いてない。でも、とても真面目な人なんだろうなって事は、戦いぶりや六道先生との会話から感じていた。

悪い人じやないとは思うんだけど……。

「な／＼んかカンジ悪いなあ……」

「春歌先輩、それ本人には絶対言っちゃダメっスよ？」

「あはは、わかってるつて」

小声でそんなやりとりをしながら、僕達は晴矢さんの後を追つて行つた。

「おつ、やっと来たわね！」

境内に佇んでいたのは、巫女服に身を包み、綺麗な黒髪をボニー・テールに結んだ女性だつた。

「晴矢さん、この人は？」

「実技担当教師の雪村先生だ。座学の六道先生と並ぶ、東京校の顔役教師」「雪村雪華よ。気軽に雪村先生、でいいわ。よろしくね、若人諸君♪」

明るく笑う彼女の笑顔からは、とても大人びた魅力を感じた。

「篝火頼人です。よろしくお願ひします」

「犬山春歌です！お世話になります」

「豆田鉄平つス！よろしくつス！」

「妖狐一族のコワポンですコン。よろしくお願ひしますコン！」

それぞれ挨拶する僕らを見回して、雪村先生はうんうんと頷いた。

「いやー、あんのバカ六道にいきなりここへ出向するよう言われた時はムカついたけど、素直そうな子達でよかつたわ」

「バカ六道……？」

「……雪村先生と六道先生は同級生で、いわゆる腐れ縁つてやつらしい」「ああ、それで……」

何となく氣づいてたけど、六道先生って結構周りを振り回すタイプなんだ……。

「あの、それで……どうして僕らはここに呼ばれたんですか？」

「そうね。新入りの歓迎会と、この御景支部の再編成に伴う顔合わせ、それから体制の確認つて所ね」

「……再編？」

「どういう事コン？」

「まあ、立ち話もなんだし一旦中に入りましょ」

そう言われ、僕達は社務所の方へと通されることになった。

社務所の奥へと進むと、そこには大きな和室が広がっていた。畳が敷かれ、部屋の中央には大きな机が置かれている。そしてその上には、色とりどりの料理やパーテイー用のお菓子、飲み物が並んでいた。

「……えっと、これは？」

「お菓子がいっぱいあるコン！これ、食べていいコン？」

「さつきも言つたでしょ？新体制への移行と顔合わせを兼ねて、ささやかな宴会を開きたいって」

「雪村先生、その子達が例の新入りですか？」

腰まで伸びるストレートな黒髪で黒いセーラー服の少女が、料理を並べる手を止めてこちらを振り向く。

「そうよ。この3人が、交霊紙に選ばれた子達。仲良くしてあげてね」

「ふうん……どうやら3人とも一般人のようだけど、全員妖怪が見えてるみたいだねえ」

もう1つの声が、黒セーラーの子の背後から聞こえ、テーブルのお菓子のひとつに手

が伸びる。

が、その手は黒セーラーの子に叩かれ、阻まれた。

「つまみ食いしようとしないでください。お行儀が悪いですよ」

「ええ、良いじゃないか、1つくらい」

頭頂からアホ毛が生えた、栗毛のショートで白衣を羽織った少女が、黒髪の少女に不服な態度で訴える。

「ダメなものはダメです」

「うむ、相変わらず君は真面目だなあ」

「貴方が不真面目過ぎるだけでしょう。ほら、早く手を洗つて来てください」

「はいはい……」

「まつたく……」

ため息をつきながら、黒セーラーの子はこちらに向き直る。

「失礼しました。宵待黒海よいまたくろみです。そしてこちらは……」

「颯音多貴子はやねたきこ、研究部の所属だ。よろしく頼むよ」

2人とも丁寧に自己紹介してくれた。

「妖怪退治の専門組織に、白衣の研究者……？」

一見ミスマッチな組み合わせに、春歌が首を傾げる。

「六道先生が、妖怪はエネルギー生命体だつて言つてたじやないつスか」「科学の知見も妖怪を相手する際に必要とされる、つてことですか」

「物分りが良いねえ。助かるよ」

僕の言葉に、颯音さんが微笑んだ。

「これで顔合わせは済んだわね」

「えつ？ これだけコン？」

雪村先生の言葉に、思わず僕達は顔を見合せた。

確かにコワポンの言う通り、明らかに人数が少ない。

街一つを守るんだから、もつと多くの人材が集まるものと思つていたんだけど……。すると僕たちの疑問を察したのか、晴矢さんが口を開いた。

「この街には、どうも厄介な結界が張られているらしい」

「厄介な……」

「結界コン？」

僕たちが首を傾げたその時、五行フオンが着信音と共に震えた。

画面を見ると、六道先生の名前が表示されている。

とりあえず、スピーカーにして机に置いた。

『リモートでごめんね』。その辺は僕から説明するよ』

「六道先生、話聞こえてるんですか？」

「はあ……まーたいつもの覗き見癖ね」

あまりにもタイミングが良く、僕らの会話も把握していたような物言いに驚いている
と、雪村先生が大きめの溜息を吐いていた。

「雪村先生、どういう事ですか？」

「犬山さんは千里眼つて知ってる?」

「えーっと確か……透視能力の事でしたつけ? 遠くにあるものだけじゃなくて、壁の向
こう側とか、人の心まで見えるっていう超能力の……」

思い出すように答える春歌に、雪村先生は満足気に頷く。

「概ねその通りよ。六道はその千里眼を持つてるの。しかも千里眼を通して見て いるも
のが出してる音も聞く事が出来る。だから、離れてても私達の会話はしつかり盗み聞き
してたつてわけ」

「ええ!? すつごい! リクドー先生そんなに凄い人だつたんだ!」

『いや、こうして素直に褒められるとこそばゆいねえ! 雪華も春歌を見習つたら?』

『そういう所も素直なのね……。つて調子乗んなバカ六道!!』

本物の神通力に目を輝かせる春歌と、額を抑えて溜息を吐く雪村先生。

もしかして、六道先生にプライバシーを侵害された事でもあるんだろうか……。

「でも盗み聞きされてるって思うと、ちょっと気持ち悪いっスね……」

『鉄平、聞こえてるからね～？』

「すつ、すみませんっス!!」

「壁に耳あり障子に目あり、とはこの事コンね……」

慌てて頭を下げる鉄平を見て、コワポンが冷や汗をかきながら苦笑する。
「りや、六道先生には隠し事が出来なさそうだ。」

『さて、本題に戻ろう』

そう言つて六道先生は咳払いする。

宵待さんと颯音さんも、こちらに聞き耳を立てている。

『どうやら御景市には、市の全域を覆うように結界が張り巡らされているらしい。何のために張られているのかは現在調査中だけど、無闇に破つちゃいけないのは間違いない』

確かに。結界つて、何かを封印するために、または何かからそこを守るために張られるものだし。目的が不明でも、勝手に破つたらくなことが無さそうだ。

『ただ、その元々あつた結界に上塗りするように、別の結界が張られているみたいでね。僕の千里眼ですら遮られてしまっていたんだ。一昨日まではね』

「一昨日、というと……ヤマノケを倒した日ですか？」

『そう。あの日、僕が山中で見つけた石碑に貼られていた御札を剥がした時、上塗りされていた結界が少し弱まつたように見えた。今、君達が見えているのも、上塗り……めんどくさいから黒結界って呼ぼう。黒結界が弱まつたお陰で、ピントを絞れば見えるようになったからなんだ』

黒結界、か。六道先生には、もう一つの結界が黒い色に見えてるのかな?

それにしても、御景市にそんなものが張られていたなんて知らなかつた。この街、もしかして何か重要なものが隠されてたりするんだろうか……。

『しかも、どうやら術師の侵入を制限する効果があるらしい事も、近隣の支部からの報告で判明した。御景市に入れる術師の数は、今のところ一度に2人まで。出る際には制限がないけど、一度誰かが結界の内側に入つたら、次に他の術師が入れるようになるのは、きつかり24時間後になる』

「面倒ね……どうにかならないの?」

本当に面倒な性質だな……。

まるでシミュレーションゲームの出撃制限みたいだ。

『幸い、このケチな入場制限も、黒結界が弱まると共に緩くなるらしい……というのが研究部の見解だ』

「それで私と黒海が派遣されたというわけだね。結界を内側から調べられるし、幸いに

も私は術師じゃないから黒結界に引つかからない』

『多貴子、黒海、期待してるよ。多貴子の頭脳と、黒海の力を合わせれば、解けない謎は無いんだから』

「ああ、任せたまえ！こんなに楽しそうなファーリードワークは久し振りだ。先生の期待には必ず応えてみせるとも！」

『……多貴子さんの面倒は任せてください。三食しつかり食べさせます』

『よろしく。ゼリー飲料とサプリだけで三徹してぶつ倒れた時の事、今でも忘れてないからね』

「うつ……さ、流石に同じ失敗は繰り返さないとも！私は天才なのだからねえ！」

どもりながら胸を張る颯音さん。

(コワポン、あれ絶対繰り返すやつだよね)

(言うだけ無駄コンね)

コワポンと声を潜めて呟いた。

宵待さん、結構苦労しているみたいだ。

『というわけで、今後の御景支部の方針は2つ。1つは黒結界の起点の捜索及びこれの解除。多貴子と黒海を中心に、護衛と必要な人員をつけた上で行つてほしい』

『偵察にも人員を割きたいところだねえ。黒結界の起点を守つている存在がいる可能性

「もあるだろう？」

『そこは大丈夫。そういうの得意なやつを送つといたから、日が落ちるまでには合流できると思うよ』

「それは頼もしいねえ。みつちりこき使わせてもらうよ」

方針が1つ固まつたらしい。

黒結界が弱まれば増援が増える。なら、優先して解除した方がいいだろう。

『それともう一つ。一昨日、この街を一望したんだけど、どうも怪異が街中に潜んでるらしい。頼人、春歌、鉄平、心当たりはないかな?』

あれ?今気づいたけど六道先生、僕たちの名前呼び捨てになつてない?

そんな僕の疑問を察したかのように、コワポンが耳打ちしてくる。

「六道先生は身内と自分の生徒は呼び捨てで呼ぶ癖があるんだコン。○○くんとか○○ちゃんつて呼ぶのは、身内以外コンね」

「なるほど……」

正式に五行院の所属になつたから、距離感が縮んでるのか。

と、納得したところで鉄平が拳手していた。

「そういえば……少し前から御景市の怪奇系サイトに、怪異らしき未確認生物の目撃情報が急増してるつス」

『その話、詳しく述べる?』

「はいっス」

そう言つて鉄平は、背負つているリュックからタブレットを取り出す。開かれたのは黒バックにおどろおどろしい文字で表記されたサイト名、いかにもつて感じのするサイトだつた。

投稿一覧をタップすると、最新の目撃談が縦に並んでいる。

日付は最新のもので昨日の夜。しかも1件や2件ではなく、1日辺り10件近くの情報が入つてゐる。

「情報、多くない……?」

「そう言われると思って、地域別に目撃情報をまとめてあるつス。今度、印刷して部活に持つてくつもりだつたつスから」

「鉄平くん、こういうの得意だよね。怖いの苦手なのに」

「あ、あくまで怖いだけで、調べる事自体は嫌いじゃないつスよ!」

春歌の言葉に慌てて否定する鉄平。

僕は苦笑しつつ、彼のまとめてくれたデータを確認する。

目撃情報は、市内の各地区に点々と存在していた。

現れる場所が決まっているものが多いが、移動するものや、一定の条件で姿を現すも

のも枠外にまとめられていた。

「驚いたな。五行院に気づかれず、よくもここまで集まつたもんだ……」

『こんなになるまで放置されたのか、それとも御景支部の壊滅直後から急速に勢力を拡大したのか……。もし後者だとすれば、背後に糸を引いている者がいると考えるべきだね』

「調査部からの報告が終わり次第、優先順位を設定。一体ずつ片付けていくつて事でいいんでしょ?」

『さつすが雪華、わかつてるう♪』

「はいはい」

上機嫌な六道先生に、雪村先生は呆れたような顔で応じる。

しかし、すぐにその声は引き締まった。

『さて、要点をまとめよう。黒結界の起点搜索並びに解除、怪異の発見及び撃破、そして壊滅した御景支部の立て直し。当面の指針はこの3つに絞る事とする。また、必要に応じて適切な人員を派遣し、これの対処にあたる。進展は常に報告すること。また、街への術師の出入りは常に把握し、なるべく市内に留めておくこと。以上、何か確認点は?』

『よし。それじゃ、僕はこの辺で失礼するよ。歓迎会楽しんでね♪』

「ええ、アンタの分までお菓子バリバリ食べてやるわよ」

『程々にね～。あんまり食べ過ぎると太っちゃうよ～？』

『大きなお世話よッ!! このバカサングラス!! 若白髪!!』

叫びながら、雪村先生は電話を切つて僕に投げ渡した。

……なんか、いい歳した大人達が大人気ない喧嘩繰り広げている所を見せられちゃつたような……。

「……まあいいや。とりあえず、これからよろしく！」

「ああ！ こちらこそ、よろしく頼むよ」

「一緒に頑張りましようね」

「よろしくお願ひします！」

「頑張らせていただきますっス！」

「……フン」

こうして、後に『御景市オカルト研究部』と呼ばれるようになる五行院新生御景支部は、活動を開始した。

『坊主、乾杯の音頭は俺にやらせちゃくれねえか？』

「断る。オツサン臭くなるだろ」

『んだよツレねえな～。小狐、俺にやらせてくれよ』

「ダメコン。乾杯の音頭は譲らないコン。みんな、ジユースは持ったコーン?」
 『だあああクソツ! やらせてくれよお!』



その頃、御景市の西端にて。

黒服を着た男女が四十数人ほど、整然と並んでいた。

並んでいる彼らの前方には、リーダーらしき中年の男が点呼を取っている。
 「やれやれ、特殊任務へのご指名と聞いて来たんだが……まさか情報部を悩ます問題児
 のお世話係まで押し付けられるとは。とんでも貧乏クジを引いたものだ」

列の前方に立っている灰髪ウルフヘアの男が、隣に立つ少女に目をやりながら呟く。

男は他の者達と同じく黒いスーツに身を包んでいるが、ネクタイは締めていない。

代わりに、胸ポケットからは手帳と万年筆が覗いていた。

「そんな事言わないでくださいよ。エリート術師の出雲正親さんとご一緒に出来て、私も
 今すっごく嬉しいんですから!」

一方、少女の方はカメラマンベスト風にアレンジされたレディース用の学ランに黒ズ
 ボン、首からは古い一眼レフカメラを提げた、まるでカメラマンのような出で立ちだ。
 黒髪をボニー・テールにまとめ、赤縁の丸メガネをかけた顔には、愉快適悦とした笑み
 が浮かんでいる。

「こらこら、ご一緒じゃないだろう。君は調査部の車に勝手に紛れ込んで来た密航者なんだぞ。大阪支部の問題児、緋山美南くん」

「問題児じやありません。五行院の情報屋です！」

「それは君が自称しているだけで、実際はただの記者かぶれなオタクちやんだろう」

「うぐつ……痛い所を」

大袈裟に左胸を抑える美南に、正親はやれやれと肩を竦めた。

「報告を聞いた六道先生からの許可がなかつたら、大阪支部へ送り返されていた事を忘れるんじやないぞ」

「だつて、突如として壊滅した支部に人員を集めているのに、派遣される人数に対して明らかに術師の数が少ないじやないですか！これは絶対何かある、気になつちやつたからには取材するつきやない！そうでしよう？」

胸の前で拳をグッと握り、早口で言い切つた美南に対して、正親はふむ、と顎に手を当てた。

「なるほどなるほど、確かに一理ある。俺も君と同じ立場なら、まず間違いなく同行しようとするだろう。小説のネタの臭いがブンブンするからね」

「でしょでしょー？人気小説家のマツチさんなら分かつてくれると思つてたんですよ

」

「しかし、君と違つて班長に許可は求める。勝手に着いてくなんて、よくないよくない」

「もう……大人のド正論が痛いです」

「マツチ、緋山、私語は厳禁だぞ」

「はい！すみません！」

二人は慌てて前を向き、声を揃えた。

班長は咳払いすると、情報部の職員達を見回し、点呼を終える。

「今回の任務はこれまでにないものだ。敵は未知数、新種か突然変異か、組織立つて行動しているのかさえ不明であり、既存の常識も通用しない謎の存在だ。それでも我々が組織の目として、耳として、少しでも多くの情報を持ち帰る事で、対応への道筋が必ず拓かれる。そのための一歩だ！ 気合いを入れろ！」

『了解!!』

班長の呼び掛けに職員達は声を揃えて応じる。

無論、正親と美南もだ。

「特にマツチ、お前と相棒は特に情報収集向きだ。だからこそあまり無茶はしないよう、肝に銘じろ」

「善処はします」

「善処ではない、遵守しろ。命令だ」

「……了解しました」

班長の厳しい視線に、正親は素直に応じざるを得ない事を確信し、両手を挙げた。

「それと緋山、お前には仮面ライダーとして、非戦闘員を護衛する任務を与える」

「え……!?」

「調査部の仕事は遊びじゃないんだ。軽い気持ちでこの場に立っているなら、今すぐ

帰つてもらうぞ」

「わ、分かりました……ちえー……」

「舌打ちするな、聞こえてるぞ」

「すすすすみませんッ!!」

慌てて頭を下げる美南。

その耳に、呆れ気味な女の声が響いた。

『やれやれやな……だくから言うたんや。追い返されるか、別の仕事押し付けられるでつて』

「はあ……リンは黙つてて」

『はいはい、ほなお口チャックしとくわ』

リン、と呼ばれたハスキーナ関西弁で喋る相棒は、彼女の隣に浮きながら肩を竦めた。
『えんらえんらー・マツチ、お前今回はかなり苦労させられそうだな』

「言うなよ相棒……。まあ、これも新作のネタになると考えるか」
一方、正親も耳元でケラケラと笑う相棒の言葉に、再び深く息を吐くのだつた。

第八夜 「怖映え？ジドリくん」

「本当に撮るの……？」

ある日の夕方、3人の女子高生が御景市某所にある高台にて並んでいた。
街全体から海までが一望できるこの場所は『夕陽の丘』と呼ばれ、地元では有名なデー
トスポットだ。

「モチのロンつしょ。あの噂、本当だつたら絶対バズるじやん」「でも、もし本当だつたら……」

「大丈夫だつて。もし嘘でも、こここの夕焼けマジで綺麗だし映えるじやん。ね？」

「どつちみちウチらに得しかなくね？ヤバ♪♪

その内2人は、コテコテにデコられたスマホを片手にノリノリで自撮り棒を構える

ギャル風の少女たち。

もう1人はどう見ても乗り気でない雰囲気を溢れさせている、大人しそうな少女。

同じ高校のクラスメイトである彼女たちは、ネットで話題になつてゐる噂を確かめよ
うとしていたのだ。

「出てこないかな、ジドリくん」

ジドリくん。それが噂になつてゐるソレの名前だつた。

「でも、噂通りなら一人だけで撮らないと出てこないんじゃ……」

「そだつけ？じやあ、2人はどつか隠れてなよ。アタシだけで撮るし」

「えー、ズルい。ウチも撮りたーい」

「なんで2人とも、そんなノリノリなの……」

怖いもの知らずなのか、それともただのアホなのか。

少女は怯えながら、ギャルギャルしい友人達の様子を見つめていた。

『ジドリくん』の噂はこうである。

ある日の夕方、一人で観光に來ていた女性Aさんが、観光スポットを背に自撮りをしようとスマホを構えていた。

すると、「一緒に写真撮つてくれませんか？」と声を掛けられる。

振り向くとそこには、スマホを手にした学ランの男子高校生が立つていた。

男子高校生の整つた顔立ちに思わず心奪われたAさんは、彼の頼みを承諾。2人で自撮りのツーショットを撮つたらしい。

「イケてる写真ですよね？」とスマホを見せてくる男子高校生。

Aさんが口許をほころばせながら写真を見ると——彼の顔が”地鷄”となつてこち

らを見つめている。

「ねえーーイケテル写真デスヨネ?」

横にいる彼を見ると、そこには学ランに身を包んだ“地鶏の顔をした男子”がそこに立っていた……。

この不気味な投稿を怪奇サイトにアップしたAさんは数日後、行方不明となつたらし
い。

あくまでネットの片隅で語られる噂話。だが、それ以降『ジドリくん』という謎の存
在が現れたという話がネット上で広まつていった。

そして今に至る。

「よおーし!撮るぞー!」

「待つて……やつぱり止めようよ……」

「もうく、だいじょぶだつて。そんなに怖いなら、先に帰つていいよ」

「でも……」

「ねえく、そろそろ撮ろくよ~」

「おけまるく!じゃあ、あたしら撮るから」

そう言つて、ギャル2人は夕陽をバツクに自撮り始めた。

これはもう止まらないだろう。

少女は溜息を吐くと、広場の中心にあるオブジェの前でしゃがみ込んだ。

なんでも昔、ここで恋を叶えた彫刻家が、その喜びと感謝を込めて設置したものらしい。

ここに来るまでの道中も歩き通しで疲れていたため、少女の顔にはそれが浮かんできていた。

「大丈夫ですか？」
「ツ?」

思わず肩を跳ねさせながら顔を上げると、見知らぬ男性がこちらを見下ろしていた。
「おっと、驚かせてしまってすみません。なにぶん、すごい顔をしていたので」

「いっ、いえ……大丈夫ですツ！」

少女は慌てて立ち上がり、思わず後退る。

そして改めて、男性の姿を一瞥した。

男性はとても爽やかな雰囲気を漂わせた好青年であつた。

流行りのコーデに身を包み、身だしなみも清潔。顔立ちもかなり整つており、街ですれ違えば誰もが振り向くような美青年だ。

(な、何この人……すぐイケメンだあ……)

思わず見惚れてしまう少女であつたが、すぐにハツと我に帰ると頭を下げて謝罪する。

「ごめんなさいっ！いきなり声かけられてびっくりしちゃいまして……」

「あははっ、気にしないでください。それより、こんなところで何をしているんですか？」

「えっと……その……」

まさか都市伝説を確かめに来ました、などとは言えず口籠り、ギャルの友人達の方へと目を向ける少女。

「ああ、自撮りですか」

それを見た男性は納得したように呟いた。

「あんまり自撮りとか、されない方なんですか？」

「まあ……はい……。私はそういうのはちょっと……」

すると男性はふむ、と呟き、ポケットの中からスマホを取りだした。

「よろしければ、僕と一緒に撮りませんか？」

「え？」

「僕も自撮りが趣味なのですが、一人で撮るのは少々寂しくてですね……」

「いや……でも……」

初対面の男性、しかもこんなイケメンと一緒に写真なんて、と思わず断ろうとする少女。

「そこへ、ちょうど友人達が戻ってきた。」

「ちょ、なになに？どこで捕まえたのそのイケメン！」

「うわっ、マジじやん。ズルい、あたしらも一緒に撮ろよ～」

「え？ええつ……」

面食いの彼女達は一目で青年にロツクオンすると、全員で一枚撮ろうと提案してくる。

「流石に迷惑だろう、と止めようとする少女だが、2人とも聞いてはいない。」

「い～じやんい～じやん♪せつかくだし、一緒に映ろうよ～」

「いいよねお兄さん？」

「ええ、僕は構いませんよ。そこのオブジェがバツクでいいですね？」

「青年の方もノリノリで、どんどん撮影の流れになっていく。」

「やや流されるような形で、少女は友人達に挟まれ、カメラの方を向く。」

(……まあ、ジドリくんじやなさそうだし。一枚くらいはいいかな)

すぐ隣で自撮り棒を構える青年の横顔に、思わず気を良くしながら、少女は笑顔を作った。

「じゃあ撮りますよ。はい、チーズ」

パシャリ、というシャッター音と共に、写真が撮られた。

「うん、よく撮れていますね。皆さんとても可愛らしいですよ。特にそちらのお嬢さんが……」

「あつ、ありがとうございます……」

褒められ慣れていないのか、少し照れる少女。

だがそこで、先程まで思い出していた噂が脳裏をよぎる。

(……いや、まさかね?)

今撮つたばかりの写真を表示させたスマホを手に、青年は確認を促してくる。

(噂は噂だし、ジドリくんは男子高校生。何もあるはずが……)

「…………え?」

耳に入つた困惑の一聲に、思わず隣を振り向くと、先に写真を覗き込んだ友人の表情が凍りついている。

「…………ねえ」

「…………どうしたの?」

「これって……」

「ツ!」

そこには——地鶏の顔になつた青年が、こちらをじつと見つめている姿が写つていた……。

「ねえ…………イケテル写真デスヨネ?」

少女達が顔を上げると、そこに立つていたのは……

顔と両腕に羽毛を生やし、両足がモミジとなつた、地鶏の顔を持つ怪人だつた。

「「「きやあああああああああああああああああああああああああああ!!」」

□□□

気がつくと、夕闇に染まる茜色の空が目に入った。

いつもの夢だと気づくのに、そう時間はからなかつた。

気配のする方へと顔を向けて、そして予想通りの光景が目に入る。

影法師のような集団と戦う、狐面の戦士。

いつもの夢と違つていたのは、その姿がハツキリと見えるようになつていたことだ。

カラーリングは少し違うが、間違いない。

目の前で戦っているのは、『仮面ライダー妖狐』だ。

キツネビシューターを手に、首周りから広がるマフラーのような炎を靡かせ、鮮やかな剣さばきで影法師を切り伏せていく。

やがて影法師がこちらへと向かつてきて、妖狐が僕の方へと向けたチャッカーから、狐の獣人のような妖怪が現れる。

そして――

「頼人、頼人！起きるコン！」

「ん……あれ、僕、寝てた？」

コワポンに頬をてしてしされ、僕は上体を起こす。

時計を見れば5時半すぎ。確かに、歓迎会の後で雪村先生に『討伐任務は基本的に夕方から夜になるから、今の内に寝といった方がいいかも』と言わ�て昼寝してたんだつけ。

歓迎会をやっていた部屋の隣にある座敷で、畳にそのまま寝転がつたのを思い出す。幸い、畳の跡とかは付いていない。

部屋の隅のちやぶ台に置いた眼鏡をかけ直しながら、先程の夢を思い返す。以前よりもハツキリとしていた。

昔はボヤけていた部分が見えるようになつていたし、なにより……夢の中で助けてくれていたあの人は、やっぱり仮面ライダーだつた。

解像度が上がつたのは、コワポン達と出会つた影響だろうか？
だとすれば、やっぱり関係があるのかな？

「ねえコワポン、僕の他にも妖狐つて居たの？」

「もちろん居たコン」

何気なく聞いてみると、コワポンは快く答えてくれた。

「ボクのお父さんやおじいちゃんも、先祖代々ずっと、僕の一族は『仮面ライダー妖狐』の契約妖怪コン」

「じゃあ、その中に――」

「おーい、頼人！」

「頼人先輩～、起きてるツスか～？」

そこまで言いかけた所で、春歌と鉄平が部屋に入ってきた。

「起きてるよ。何かあつた？」

「初任務、そろそろ出動だつてさ」

「先輩が起きてくれなきや始まらないツスよ」

「えつ、もうそんな時間なの!?」

「そうだコン！早く行くコン！」

僕は慌ててスマホをポケットに仕舞い、雪村先生達の所へと向かつた。

□□□

「——で、よりもよつて晴矢と一緒にコン……」

数分後、怪異の出現情報が報告された現場へと向かいながら、コワポンはムスツとした顔で腕を組んでいた。

「……お前達はまだまだヒヨつ子だからな。お目付け役が要るだろ」

「それがどうして晴矢なんだコン！他に居たはずコン！」

「黒海と多貴子は別任務、雪村先生は指揮を執るから支部を離れるわけにはいかない。その結果、俺にお鉢が回ってきたつてわけだ」

「ぐぬぬ……」

「ま、まあまあコワポン……」

さつきからずつとこんな感じだ。

晴矢さん、初対面の時から僕に対して当たりが強いし、コワポンはそれが気に食わなくてパンスコしてる……。うう、空気が重い……。

「晴矢さん、今夜はよろしくお願ひします」

「フン……先生達はああ言つてるが、俺はお前がライダーだと認めていない」

「……なら、どうしたら認めてくれるんですか？」

晴矢さんが突然立ち止まる。

思わず僕も足を止めると、晴矢さんはゆっくりとこちらを振り返った。

「俺はな、弱いくせに半端な覚悟でこつちに首突っ込んでくる奴が気に食わないんだよ」

思わず全身が震えるのを感じた。

晴矢さんの顔から溢れ出していたのは、圧倒的なまでの怒気。

夜道で殆どが影に隠された顔に、見開かれた眼だけがギロリと僕を睨みつけていた。

僕の腕の中で、コワポンも震えているのが伝わった。

「お前は何のために仮面ライダーになつた？何故そいつと契約した？」

「そ、それは……」

今にも掴みかかってきそうな勢いでまくし立ててくる晴矢さん。

思わず後ずさつた時、晴矢さんの肩に厳つい手が置かれた。

『おい坊主、その辺にしておけ』

「……チツ」

『舌打ちはんな。お前が認めようが認めまいが、現状は変わらんだろう』

『分かつてゐるさ。せいぜい足は引っ張るなよ。お前はド素人なんだからな』

夜叉に諫められ、晴矢さんは溜息を吐きながら先へと歩いて行つてしまつた。

ようやく緊張が解け、思わず深呼吸する。

「僕が戦う理由……？」

「頼人……？」

「大丈夫。答えられるよ……ちゃんとね」

心配そうに見上げてくるコワポンに微笑みかけ、僕は晴矢さんの後を追いかけた。

そう、答えられる。

僕が仮面ライダーになる事を決めた理由は……。

『……お前、本当にあれでいいのか?』

「何が言いたい?』

思わず隣で浮遊する相棒の靈体を見上げ、睨みつける。

『いやあ? ただ、このままだとお前、逆に失うかもしけんぞ』

「ツ……!』

脚を止め、相棒の顔を思いつきり睨みつける。

相棒の顔は、極めて真面目だった。本気で俺と、それからあの新人の事を心配してい るのだろう。

バトルジャンキーのクセに、こういう時だけ保護者ヅラしてくる所が少しウザった

い。

「……そうならない為に俺が居るんだ。それとお前もな」

『ハア～……まあ、そういう契約だからなア。付き合つてはやるよ』

そう言うと相棒は、愛用の大剣を肩に担ぎ、俺を見下ろす。

『だが、俺はお前との契約だけでお前に付き合つてるわけじやねえ。そこは忘れんじやねえぞ』

「……」

思わず、顔を背けた。

もうすぐ日が沈む。目的の高台まではあと少しだ。

第九夜 「守護者の意地」

「ここがサイトに書かれてた場所か……」

周囲を見回す。話の通り、街を見下ろせる広場と、よく分からぬがオブジエがある。

トバリ
「今から隠帳を張る」

「トバリ……つてなんですか？」

「五行院が戦闘任務の際に張る結界だ。人払いや隠匿、それから隠れている妖怪たちを炙り出す効果なんかが複合されている」

「頼人がヤマノケと戦った高速道路にも張られていたコン」

「ああ、アレそういうことだつたんだ！」

「そういえば車通りがないと思つていたけど、あれはヤマノケが暴れたからじやなくて、先に来ていた晴矢さんが戦つていたからだつたんだ。」

「菅原学長から貰つた呪符を使えば、非術師でも張れるコン。今度使つてみるコン」

「始めるぞ」

晴矢さんは右手の人差し指と中指を立てて印を結ぶと、両目を閉じて静かに唱えた。

「陽ひを遮り陰を暴き、晦き者どもを晒したまえ」

直後、広場一帯を覆うように半球状の結界が張り巡らされる。

結界内部の風景は夜の帳が降りたように、藍色がかつた色彩へと暗転する。

まるで水底にいるかのようだ。

そして、周囲を見回すと一点、先程までそこに存在しなかつた影が姿を現す。

その後ろ姿は、黒い学ランに身を包んだ少年だつた。しかし、その首から上は焦げ茶色の羽毛に覆われ、頭頂部には真つ赤なトサカが立つてゐる。

僕たちに気がついたのか、それはゆっくりとこちらを振り返つた。

「コケ？ 君たち、何者だい？」

振り返つたその顔は、噂通り地鶏の頭。

声に合わせてパクパクと動く、内側に尖つた歯が並んだ嘴で、人間の言葉を喋つてい
る。

ヤマノケ同様、作り物では出せないリアルな生々しさ。

間違ひなく怪異だと、肌で感じられた。

「噂のジドリくんとやらはお前か」

「如何にも！ 僕こそ、あらゆる怪異の中でも最も美しいナンバーワンイケメン怪異、ジドリくんさッ！」

……一目見ただけで不気味に感じていた異形の存在は、ナルシスト全開の自己紹介と

共にドヤ顔でポーズを決めた。

なんだこの怪異……ヤマノケやウシクビと全然違うぞ……？
「イケメンとかナンバーワンとか、自分で言つちやうコンね」

コワポンが呆れた声で容赦ないコメントを呟く。

正直、僕も全く同じことを突っ込もうと思つていた。

「なあつ！？し、失礼だぞ！そこのチビ狐！」

「そういうのは他人に言われて初めて成り立つ評価コン。自称じや意味無いコン」「こ、こいつう……！」

うわ容赦ない。僕の相棒、思つた以上にあけすけに物言うタイプみたいだ。

「君みたいなお子ちゃま狐には、僕の美しさは分かるまい！この輝く羽毛、このクチバシの鋭さ！そしてなにより、このトサカ！セットに5時間はかけている！どうだ、あまりの美しさに声も出ないだろう？」

再びドヤ顔で決めポーズを取るジドリくん。

うん……これは流石に……。

「イタいなあ……」

「知り合いにかなりナルシストな妖怪が居るが、あいつと違つてツラがなあ……」「見てられるか。さつさと締めて、鶏つくねにしてやる」

夜叉と、それからさつきまで表情が引き締められていた晴矢さんですら呆れ顔だ。
噂で聞いてたのとだいぶイメージ違うな……悪い意味で。

「コ、コ、コ、コ、コケーーーーツ!! 捅いも揃つて僕のことをコケにしやがつて！ 許さん……
許さんぞおおおおツ!!」

こめかみに青筋を立て、ジドリくんは天高く咆哮した。

学ランの両腕部と両足のスニーカーがビリビリに破れ、その下から腕と一体化した
羽、三本の鉤爪を持つた細い脚が現れる。

もちろん、それぞれ頭部と同じ色の羽毛に覆われていた。まさに鶏人間だ。

「正体を表したな……。コワポン！」

「了解コン！」

変身しようとドライバーを巻き、チャツカーリーを構えようとしたその時だつた。

晴矢さんの背中が、僕たちを遮るように立ち塞がつた。

「お前は下がつてろ。こんな三流」とき、俺一人で充分だ」

「え？ でも……」

こちらに顔も向けずに言い放つ晴矢さん。

認めたくはないけど、拒絶されているのを強く感じた。

「ま、ここは先輩の顔を立ててやつてくれや」

「夜叉、余計な口を出すな」

「へいへい、そんじやまあ……始めようや」

『着火！ヤシャ！』

晴矢さんがアヤカシチヤツカーを開くと、夜叉はその中へと吸い込まれていった。

流れるような動きでそれをオクリビドライバーにセットすると、やはり念佛のようないがが流れ始める。

『シャーツシヤ、ヤシャ！ヤシャ！シャーツシヤ、ヤシャ！ヤシャ！』

「変身

『^{ヨー}カイレツカ
妖火意列火！』

掛け声と共にレバーを引くと、バツクルが観音開きになり、溢れ出した蒼い炎が晴矢さんを包み込む。

『霸者！破邪！夜叉！ヤシヤ！ヤシヤ！ヤシヤ！』

変身が完了し、仮面ライダー鬼丸は片刃剣を構える。

「怪異ジドリよ、我が『^{オニマルクニツナ}鬼丸国綱』の鎧となれ」

『抜かせ！僕を怒らせたこと、後悔させてあげるよ！コケエエエエツ!!』

ジドリくんは、両腕をバサバサと羽ばたかせながら勢いよく加速。両足で鋭く光る鉤爪を振りかざし、鬼丸へと飛びかかった。

「遅いな」

しかし鬼丸は、すれ違いざまにジドリくんの脇腹へ斬りつけた。

最低限の動きで攻撃を躱しながらの、的確なカウンター。ガツンと響き渡る重たい音に一瞬、僕らは目を奪われた。

「ぐあつ……！」

「その程度か？」

ジドリくんは勢いよく地面に叩きつけられると、ゴロゴロと転がっていく。

更に起き上がる暇もなく、今度は真上から斬撃が襲いかかり、ジドリくんは地面を跳ね回る羽目になつた。

「くつ……！おのれえ……！」

「まだ動けるか。意外とタフだな」

地を碎く威力で振り下ろした鬼丸国綱を構え直しながら、鬼丸は余裕そうにそう言つた。

荒々しいものの、無駄な動きが一切ない。パワーファイターの戦い方に見えて、その実、細やかな動作が垣間見える。まさにベテランの戦い方だ。

「ふ、ふん！この程度で僕が倒せると思つたら大間違いだよ！僕の本当の恐ろしさを見せてやる！覚悟しろ!!」

そう言つてジドリくんは素早く立ち上がると、その場で高速回転し始めた。

「なんだこの動き……。まるでコマみたいに……？」

「これが僕の必殺技！どんな奴だつて、これを避けることはできない！くらえ、乞鶏骨攻コケコツコ！」

何をするかと思つていると、そのまま鬼丸の周りを走り回つて搅乱させ、隙を見て鉤爪で攻撃を仕掛けてきた。

あまりの速さに地面からは砂埃が立ち上り、ジドリくんの姿は視認できない。

「あ、危ないコン！」

しかし、鬼丸はそれを全て捌ききつた。

背後から、頭上から、死角だと思われていた角度からの一撃さえ、その全てを刃を以て弾いてみせた。

「なつ……！」

「なるほど、確かに早い。が、殺氣がまるで隠せていない。この程度で俺と夜叉を下せると思うな、ド三流がツ！」

「（）ほお……ツ！」

鬼丸国綱の柄に鳩尾を突かれ、ジドリくんは後方に吹つ飛ばされる。

またしても地面を転がると、ジドリくんは悔しげに歯ぎしりし、嘴を歪ませた。

『こいつ弱いな。酔い醒ましにもなりやしねえ。坊主、こいつさつさと捌いちまおうぜ』

「ああ、これ以上は様子見する必要もなさそうだ」

そう言つて鬼丸はドライバーに刀を收めると、レバーに手をかける。

そのまま押し込み、必殺の一撃を放とうとした瞬間だつた。

「隙ありいいいツ!!」

ジドリくんが咆哮と共に翼を振るう。

「ツ?!

巻き起こる烈風と風切り音。

そして次の瞬間、鬼丸の身体から火花が飛んだ。

「ぐつ?!

『痛つてえ!? 何だ今の!?』

「ハハハハハ、何をされたか分かるまい! そら、そこのインテリボーアとキツネのキツズ

もくらいなあツ!!』

そう言うとジドリくんは、クルリと僕らの方へ向き直り、こちらへも烈風を放つた。

『小僧ツ!!』

「ツ!! 避けろ!!』

夜叉と晴矢さんの叫ぶ声が聞こえる。

目の前では砂埃が波打つように飛び散り、音と共に烈風が迫る。

まさに絶体絶命、直撃すれば僕はただじや済まないはずだ。

……正直、こうなる気はしていた。

晴矢さんと夜叉は、仮面ライダーになつて3日の僕らよりもずっと強い。

だからジドリくんは苦戦を強いられれば、必ず戦闘に参加していない僕とコワポンを狙つてくるだろう。

つまり、こうなる事は見えていた。

「コワポン!!」

『着火！キツネビ！』

『コンコーンッ!!』

右手に握つていたアヤカシチャッカーを着火させ、灯る妖火に息を吹く。

実体化したコワポンが空中でクルリと一回転し、炎の結界を前方へと張つた。

烈風は結界に阻まれ、何かが燃え尽きる音と共に消滅し、ジドリくんは思わず口をボカンと開けた。

「お、お前ッ！見てるだけじゃなかつたのか!?」

「下がつてろとは言われたけど、何もするなとは言われてないからね。自分の身くらい、自分で守るよ」

「新人とはいって、ボクと頼人も仮面ライダー！甘く見ないでほしいコン！」

「コケツクヌヌ……小癩なあ……！」

歯軋りしながら僕らを睨むジドリくんに、僕はコワポンと共に笑みを向けた。

「狙われてるからには、戦わないわけには行かないよね！コワポン！」

「自己防衛コン！頼人、行くコン！」

コワポンと顔を合わせると、僕はキヤンドライバーを腹に当て、再びアヤカシチャッカーに火を灯した。

『着火！キツネビ！』

チャッカーをドライバーにセットすると、祭囃子のようなBGMと共に、例の歌が流れ始める。

『コンコンコーン！コン、ココンコーン！コンコンコーン！コン、ココンコーン！』

「変身ツ！」

『ヨーカイテンカ
妖火意点火！』

レバーを引くと、行灯のようなバツクルが観音開きになり、オレンジ色の炎が僕の全身を包み込んだ。

『種火！篝火！狐の火！妖狐Y O Y O！ココンコーン』

炎が弾けると、そこには炎柄の羽織をはためかせる妖面の戦士、仮面ライダー妖狐が

立つ。

腰のホルスターからキツネビンチューターを抜くと、コワポンの声が頭に響いた。
『気を付けるコン。ヤマノケの時みたいに、倒しても復活するかも知れないコン』
「そつか。じやあ……化けて出ないよう、キツめに焼こうか！」
卑劣な怪鳥に見栄を切り、僕は銃口を向けて走り出した。

第十夜 「化ける妖狐」

「はあああツ！」

キツネビシユーターから火炎弾を発射しながら、仮面ライダー妖狐は怪異ジドリくんへと向かっていく。

弾は数発ほどジドリくんに命中し、弾けるような音と共に羽毛の一部を焦がした。

「コケエエエエッ！おまつ、お前！よくもやつてくれたなああ！」

ジドリくんは怒りに顔を歪ませると、再び羽ばたきながら跳躍する。

そのまま妖狐の頭上を飛び越え背後に回ろうとするが、妖狐は素早く振り向くと、ジドリくんが着地する瞬間を狙つて引き金を引いた。

「熱ううううイイイツ!?」

引き金を長押ししたキツネビシユーターから放たれたのは、火炎弾ではなく火炎放射。

狐の顔を模した銃のバレルから、一直線に放たれた炎はジドリくんの羽毛に燃え移り、ジドリくんは絶叫と共に地面を転がった。

「やつぱりその羽根、炎には弱いみたいだね」

『頼人、どこで気づいたコン?』

「鬼丸の刀がぶつかる瞬間、ガツンって硬い音がしてた。あれは刀と同じくらい身体が硬いって事でしょ?」

『あの音でそこまで気付いてたコン!?』

「おのれえ!よくも僕の羽根を黒焦げにしてくれたな!!」

コワポンが驚いていると、ようやく炎を消したジドリくんが立ち上がる。

先程まで綺麗に整えられていた羽毛は黒く焦げ、チリチリになつてしまつっていた。それが逆に、怒りを露にしたジドリくんの形相と相まつて、より不気味な雰囲気を醸し出している。

「まだやるの?大人しく投降した方が、その綺麗な羽根を失わずに済むと思うけど?」

「僕の美しさを理解できない連中なんかにやられるくらいなら、羽根の数本くらい安いもんさ!!くらえ、鱗コケ・コッコ・鶴荒ハクバ!!」

「技名それしかないの!?」

「ルビは差別化してるから問題ないのさ!!」

先程、鬼丸に放つた烈風攻撃が、再び妖狐に襲い来る。

しかしジドリくんは忘れていた。妖狐は、頼人は変身する前、その攻撃を防いでいた事を。

それがマグレだと思つていたために、この烈風の正体を見破られているとは考えてす
らいなかつたのだ。

「その技の、正体見たり枯れ尾花！」

『ソード！』

妖狐はキツネビシューターをソードモードへと変形させると、ドライバーから抜いた
チャツカ一を台尻へとセットする。

『ソード！キツネビ必殺！』

キツネビソードの刀身が赤い炎に包まれ、煌々と燃える。

それを正眼に構えた次の瞬間、妖狐は叫んだ。

「妖狐炎尾斬！」

直後、妖狐は炎で赤く軌跡を描きながら剣を振り回す。

まるで舞うように振るわれる炎剣は、風に火の粉を乗せながら、そこに在る“何か”

を切り伏せ、焼き尽くした。

やがて烈風が止んだ時、キツネビソードを振り切つた妖狐が顔を上げる。

焼け焦げながら地面上に落ちていったのは、何本ものジドリくんの羽根だつた。

「な……ッ？！」

「君の身体が硬いとして、硬いのは肉か羽毛のどちらかと考えた。ナルシストな性格か

ら、羽毛はフワフワな方が女の子にウケるだろうし、肉が硬い可能性も考慮した。けど、鬼丸に放った烈風を見た時、もしかしてと思つたんだよね』

思わず後退るジドリくん。その表情には焦燥の汗が浮かんでいた。

それこそが妖狐の口から淡々と述べられる推察、その尽くが的中している証だつた。「その羽根、硬質化と軟質化を切り替えられる性質だよね？攻撃を受ける瞬間に全身を覆う鎧に、烈風に乗せて飛ばせば矢のようになる。その羽毛の色なら、砂塵に混ぜて飛ばせば目立たない。僕も風切り音がなかつたら、気付くのが遅れたかもね……」

「お前……あの短時間にそこまで……！」

そう。篝火頬人はただ見ていただけではなかつた。

目で見て、耳で聴いて、肌で感じて……五感を研ぎ澄ませ、鬼丸とジドリくんの戦いをじっくりと観察していたのだ。

“幽霊の正体見たり枯れ尾花”。この言葉の通り、恐怖の対象しょうたいふめいである事をこそアドバントージとする怪異にとつて、能力や性質を見破られる事は敗北に直結する。

今、ジドリくんは目の前に立つ狐面の戦士に対して、ある種の恐怖を覚えていた。

そして、ここまで全てを見ていた鬼丸は……土御門晴矢は、思わず息を呑んだ。

□□□

あの瞬間、気づけば叫んでいた。

刹那に蘇る呪われし記憶と強ばる身体。

脳裏に浮かんだ最悪の予感。

もはや間に合わないとthoughtいた俺の想像を、あいつは……。

『……なあ、晴矢』

「……」

『お前の気持ちは分からんでもない。もし前には何かあつたら、俺は死んだ相棒に面目が立たん』

夜叉の声がいつもと違つてしんみりしていた。

それだけに、俺もそれを遮るわけにはいかなかつた。

『けどよ、だからつてお前を戦う事から遠ざけるのは違うと思つてる。お前は相棒と

……お前の親父との約束を果たすために、この道を選んだ。そ�だろ？』

「……ああ。俺は父さんみたいな仮面ライダーになる。そのためになら……」

『そうだ。仮面ライダーになつたつて事は、俺たち妖怪と契約してでも果たしたい想いがあるつて事だ。それはあの小僧も同じなんじやねえのか？』

……認めるのは少し癪ではある。だが、それはあくまで俺のプライドの話だ。

夜叉の言う通り、仮面ライダーになる以上、相棒となつた妖怪との契約は必須。ましてや交霊紙に選ばれたという事は、それなりの理由があるはずだ。

あいつはド素人。その認識に間違いは無いだろう。

だが、あの戦いぶり……ただ流されるままに戦つては無さそうだ。
ヤマノケとの戦いで命の危機を経験し、その上でまだ戦場に立つてはいる。この時点
で、あいつの覚悟は決まっている。

ならば――

□□□

「よくも……よくもよくもよくもおおおッ!!僕をここまでコケにしやがつて!!許さん
……絶対に許さないぞおおおおッ!!コケエエエエエエツ!!」

ジドリくんの絶叫に、妖狐は思わず耳を塞ぐ。

「ううつ!?なんだこ声……!?身体が重く……」

ジドリくんは絶叫しながら羽ばたくと、妖狐の頭上へと浮かんでいく。

音の圧はジドリくんの上昇と共に角度を変えていき、妖狐の足が地面にめり込み始め
ていた。

『あの絶叫で空気に圧がかかっているコン……このままじゃ押し潰されちゃうコン
……!』

「殺してやる!僕の美貌を、磨いた美しさを、こんなにチリチリにしたお前は絶対に許さ
ない!この世から消し去ってやる!!」

そう言い放つたジドリくんが開いた嘴に、音を立てて空気が集中していく。

集められた空気は圧縮され、やがてバチバチと音を立てながら青白い光を放つ。やがて球状のプラズマが形作られ、その射線は妖狐へと向けられた。

「消えろ!! 涼氣煌光・苦久導々——!!」

今までで一番マシな技名を呼び、プラズマを放とうとしたその瞬間だつた。その顔にガツンと重たい音を立て、片刃の大剣が命中した。

「ごがあつ!?

バランスを崩して墜落するジドリくん。

同時にプラズマは霧散し、音の圧から解放された妖狐が短く呼吸しながら立ち上がる。

「させるかアホ鶏」

「夜叉、ナイスピツチング」

「晴矢さん……夜叉……」

鬼丸は妖狐の隣まで歩み寄ると、手を差し伸べる。

一瞬躊躇つたのを、妖狐は見逃していない。

「……立てるか?」

「ツ……少しだけ、手を貸してもらえるなら……」

「そうか」

そう言つて鬼丸の手を掴む妖狐。

鬼丸は妖狐の方には顔を向けず、ただ力強く引っ張つて立ち上がらせた。

『いつたいどういう風の吹き回しコン?』

「ハハハハ、つたく素直じやねえなあ坊主!」

首を傾げるコワポンを見て、実体化した夜叉は、神通力で投擲した大剣を手元に戻しながら豪快に笑つた。

「今まですまなかつた。お前の事をよく知りもしないで、守られる側だと決めつけていた

「いえ、こつちも出しやばつてすみません」

『頼人が謝る事ないコン。晴矢がツンケンしそうだつたコン』

「まあそう言つてやるなよ。それより今はニワトリ野郎だ」

夜叉に促されて前方を見ると、落下したジドリくんも体勢を立て直したところだつた。

ライダー達を見下ろして、ギチギチと歯ぎしりしている。

「僕の自慢のトサカをよくもおおおッ!!絶対に許さない!!まとめて死ねええええツ!!」

『また来るコン!!』

またしても両翼を羽ばたかせ、大量の羽根を矢のように飛ばすジドリくん。キツネビソードを構えようとした妖狐だが、鬼丸がそれを遮つて前に立つ。

「仲間の盾になるつもりか？馬鹿め、ハリネズミにしてやる!!」

「晴矢さん!!」

次の瞬間、鬼丸は地面を思いつきり踏みつける。

直後、地面から飛んだ何かが鬼丸の手に握られ、烈風と共に飛来した羽根を全て遮つた。

突然の行動に、ジドリくんは思わず目を剥く。

妖狐もおそるおそるといつた様子で、鬼丸が何をしたのか確認する。

鬼丸が盾として使つたそれは――

「ま、マンホールだとおおおつ!!」

「うおおおおおおッ!!」

裂帛の叫びと共に、鬼丸は何本もの羽根が突き刺さったマンホールの蓋を、ジドリくんへと放り投げる。

力任せに投擲されたマンホールの蓋は、妖怪族の中でも特に強いとされている鬼族の膂力が加わった事で、フリスピーのように回転しながらジドリくんの首へと命中した。

「ごげえつ!?」

クリーンヒット、クリティカルダメージ。

除夜の鐘を打つような音と共に、ジドリくんは大きく仰け反った。

「今だ！ 妖狐！」

「了解ッ！」

妖狐と鬼丸は2人同時に、それぞれのドライバーのレバーを押し込む。

『妖火チャージ！ 妖火意全カーラー！』

『妖火チャージ！ 妖火意転カーラー！』

バックルが閉じると、ベルト内部にチャツカーラーから溢れ出した妖火が充填されていく。

そしてレバーを再び引くとバックルが開き、ベルト内で充填された妖火が2人の右脚へと集中していった。

「最大火力、ぶちかますぜッ!!」

『キツネビ必殺！ 妖火意バースト！』

「この一撃で、ブチ抜くッ!!」

『ヤシヤ必殺！ 妖火意バースト！』

妖狐と夜叉は地面を踏みつけ跳躍すると、ほぼ同時に飛び蹴りを放った。

「妖狐脚撃！」
ようこきやくげき

「土御門流・鬼蹴！」
おにけり

赤と青、それぞれ二色の炎が螺旋を巻き、ジドリくんを貫く。

全身の羽毛を焼き尽くされながら、ジドリくんは絶叫した。

「僕が一番イケメンで！ナンバー一で！最高なんだああああああ！」

最期の瞬間まで己の美貌をアピールしながら、ジドリくんは爆散した。

爆発と共に黒いチャツカーパークが飛ばされ、地面を転がる。

着地した妖狐と鬼丸は、背後でジドリくんが爆発するのを確認すると転がったチャツカーパークを回収しに向かうのだつた。

□□□

「任務完了、これより帰還します」

御景支部に連絡を入れると、晴矢は回収したジドリくんのチャツカーパークを白布で包んで懐に仕舞う。

「晴矢さん！」

「っ！熱ッ!?」

呼ばれて振り返ると、頬に冷たい感触が走る。

思わず後退ると、そこには自販機で買つてきたのであろう缶コーヒーを手にした頬人

が立っていた。

「お前っ!?」

「いやー、最近肌寒くなつてきてますし、ついやりたくなつちゃつて」

「お前な、俺は一応お前の先輩なんだが?」

思わず頬をヒクつかせながらそう言つた晴矢。

すると、頬人は口をポカンと開けていた。

「……なんだ、鳩が豆鉄砲くらつたような顔して」

「コワポン……今、晴矢さんが先輩つて……」

「先輩つて言つたコン!」

「……何かおかしな事を言つたか?」

「ブフツ!」

顔を見合せている頬人とコワポンに、怪訝そうな表情を浮かべる晴矢。

その後ろで、夜叉は思わず吹き出した。

「な、なんだ夜叉まで……」

「坊主お前、今までずっと『ド素人』呼ばわりしてきたろ。それが今、先輩ヅラしだして

んじやん? おもしれーに決まつてんだろ!」

そう言つてまた夜叉は呵呵大笑し始める。

晴矢はしばらく黙り込むと、頬人達の方に背を向けたまま呟いた。

「じ、事実だろ。六道先生から任されてるんだ。お前が半人前の間は、当分面倒見てやる……。面倒だがな」

頬人とコワポンは、もう一度顔を見合せてから、晴矢の方へと視線を向け直す。
「覚悟しておけ。俺の指導は厳しいぞ。それでも付いてこられるなら——」

「晴矢先輩！」

名前を呼ばれ、今度はゆっくりと振り返る。

見ると頬人がこちらに向かつて、綺麗に頭を下げていた。

「まだまだ未熟な僕ですが、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願ひします！」

「ボクの方からも、お願いするコン！」

頬人の隣に浮遊しているコワポンも、ペコリと頭を下げていた。

それを見て晴矢は、指先で頬をポリポリと搔いた後、口を開いた。

「篝火」

「はい！」

「お前は何のために仮面ライダーになつた？」

晴矢からの質問に頬人は顔を上げる。

「仮面ライダーになつた理由を、お前の覚悟を聞かせて欲しい。こいつは命に関わる役

「目だ、それなりのモチベーションが無きや続けられないぞ」「僕が仮面ライダーになつた理由は……」

そこで頬人は息を吸い込む。

晴矢は頬人の様子を、静かに観察していた。

頬人の様子は理由に悩んでいるというより、どう説明しようか悩んでいるという風に見えた。

「一体どんな事情がからんでいるのか。晴矢が想像を巡らせる前に、頬人が口を開いた。

「……夢を、見るんです」

「夢?」

「はい。幼い僕を、狐面の戦士が助けてくれる夢。小さい頃から何度も見てて……でも、何でそんな夢を見るのかが分からぬんです」

「狐面の戦士……」

晴矢はふと考える。

もしやそれは、仮面ライダーなのではないかと。

だとすれば、頬人はかつて仮面ライダーに救われ、五行院によつて記憶を消された事になる。

それが何故、仮面ライダーに選ばれたのだろうか？

「コワポンと出会ったあの日、夢の輪部がハツキリとししてきました。それに妖狐は、あの人にそつくりだつた。僕がコワポンと出会い、仮面ライダーになつたことにはきっと、偶然では無い何かがあるはずなんです。僕はこの謎の答えが知りたい」

「だから答えを求めて、仮面ライダーとして戦うことを決めた……」

「はい……契約自体は、友達を守りたくて咄嗟に結んだ所があるんですけど。それでも、続ける理由はあります！」

「そうか……」

晴矢はそのまま黙り込む。

思わず不安になり、頼人は声をかけた。

「あ、あの～、晴矢さん？」

「…………」

「せ、先輩？」

「…………まあ、そういう理由もアリか」

そう言つて晴矢は頼人の肩に手を置く。

「お前の夢が何なのか、いつか分かるといいな」

「ツ……はいツ！」

自分を見上げる後輩の顔を、晴矢は真っ直ぐに受け止める。

名前の通り、篝火のごとき眩しさがそこにはあつた。

「あと、変身してゐる間はライダーの名前で呼べ」

「はい！ 気をつけます！」

「これで一件落着だな」

「コンコーン♪良かつたコン」

その後、到着した情報部に後処理を任せると、頼人と晴矢は御景支部へと戻つて行つた。

この日以降、ジドリくんの噂はパツタリと途絶えたという。

第十一夜 「犬の呪く夜」

頬人と晴矢がジドリくんと激しい攻防を繰り広げていたのと同じ頃——御景市の西側に位置する山の麓にて、2人の女子高生が山を見上げていた。

「ここに結界の起点があるのかい？」

「はい……この街を覆う結界を維持している四つの起点。その中の一つです」

真っ黒なセーラー服の上からチエスター コートを羽織った黒髪の少女、宵待黒海。

黄色い

セーラーの上から白衣を羽織った栗毛の少女、颯音多貴子。

五行院御景支部に属する2人は今、黒結界の調査任務で、頬人達とは別行動を取つていた。

現状、立て直しを始めたばかりで人手不足な御景支部から、現地へ送り込める最大限の人員である。

「調査部の人達と合流次第、調査を開始します」

「ということは今、この場には何もないわけだね？」

「一応、そうなります。ですがこの山に立ち入るなら、眼鏡は必ずかけてください。敵は

結界に細工して本部の目を欺いた……私達が来る事も想定して、見張りを置いているはずです」

「既に敵地、というわけか。今回もよろしく頼むよ?」
「あつ!居ました!つ!」

突然の第三者の声に、2人は振り向く。

こちらへ向かつて手を振りながら走つてくる、首からカメラを提げた少女の姿が見えた。

その後ろでは、黒いスーツの成人男性が息を切らしていた。

「あの二人かい?」

「そのようですね。1人は新人だと聞いてましたが……」

「騒がしそうな新人だねえ」

少女は2人の前まで来ると、両目をキラキラさせながら口を開いた。

「研究部の天才研究生こと颯音多貴子さんと、『影使い』の宵待黒海さんですよね!!お会いできて光榮です!!」

「その通りだが、君は?」

「大阪支部所属、緋山美南です!よろしくお願ひします!」
ハツラツと自己紹介をすると、緋山は2人に握手を求めた。

そこへ、彼女の後ろから付いてきていた黒スーツの男性がようやく追いつき、足を止めた。

「マツチさん、遅いですよ」

「ぜえ……ぜえ……ひ、緋山くん……俺を置いて……先に行くの……よしてくれないか……？」

『だつて東京本部の有名人が2人も居るんですよ!? モタモタして居られないじゃないですか～』

『えんらえんらー！ マツチ、お前も取材に熱中してる時は美南とあまり大差ないぞ?』
『やれやれ……エンラに、言われてしまつては……返す言葉もない……』

「おや？」

不意に聞こえてきた声に、多貴子は懐から取り出した眼鏡をかける。

眼鏡を通して見る視界では、マツチと呼ばれた男の頭上に、狼のような形をした煙の
妖怪が浮かんでいた。

『煙々羅か。本物は初めて見たよ』

『ん? 嬢ちゃん、その眼鏡は……』

『私はこれが無いと、君たちが見えなくてねえ』

「なるほどなるほど。靈感がないと聞いていたが、本当らしいね。いや、悪く言つてるわ

けじやないよ。事実確認さ」

ようやく息が整った男は、背筋を伸ばすと自己紹介を始める。
「俺は出雲正親。千葉支部所属の祓人だ。こつちは相棒のエンラ。よろしく、お嬢さん
方」

「出雲……ああ、あの出雲家の」

「そうそう。まあ、実家は優秀な弟妹達に任せてきたから、実質フリーの身なんだけど
ね」

「ふうン……」

正親の物言いに怪訝そうな表情を見せる多貴子。

そこへ、黒海が興奮気味に割り込んだ。

「出雲先生ですよね!?」

「ん？ 君は？」

「お噂はかねがね。新作、買わせて頂きましたが、とても良かつたです！」

「おやおや、君、まさか読者なのかい？」

「はい……！『妖怪団地シリーズ』の頃から読んでます！」

「へえ、それはそれは。嬉しいねえ」

「あの……後でサイン、頂いても？」

「勿論勿論。ファンサービスは僕のモットーだからね」

「おや、珍しいねえ。黒海がこんなに饒舌になるとは……」

『当然やろ～。好きな小説本の作者さんが目の前におるんや。ウチやつたら興奮のあまり2時間は話しこんでしまうわ～』

キラキラと目を輝かせて本を取り出す黒海と、心做しか嬉しそうに応じる正親。
そして、相棒の思わぬ一面に驚く多貴子。

そんな多貴子の耳に、新たな声が届く。

声の方向に目をやると、美南の肩に乗る赤い猫の姿があつた。

後ろ足の付け根の部分には、炎に包まれた小さな車輪が浮いている。

「紺山くん、その猫が君の相棒かい？」

「はい！火車のヒノコです」

「ヒノコや、よろしゅうな～」

「颯音多貴子だ、よろしく頼むよ」

「自己紹介も終わつた事だし、そろそろ始めようか」

正親の言葉に、一同の表情が引き締まつた。

黒海は両手に黒い手袋をはめ、美南はカメラに手を添える。

正親もポケットから古びたキセルを取り出すると、先陣を切つて参道へと足を踏み入れ

た。



「調査部によると、御景市は今でこそ避暑地として知られた土地ですが、その反面で禁足地となつてゐる山も多く存在してゐるらしいんです」

道すがら、調査部からの報告書を読み上げながら情報を確認する。

既に日は落ちており、参道には街灯1つないため、光源はそれぞれが持参したハンドライトやランタンのみである。

「禁足地ですか……。山に悪い妖怪でも住み着いていたんですか？」

「そこまではまだ、掴みきれていないようです。もしかすると、五行院も把握していない未登録の封印だつたりするかもしません」

「未登録か、実に心躍る響きだねえ！」

「おやおや、天才科学者ちやんもそういうのに口マン感じちゃう性質なわけ？」

「そりやあそだとも！未知なるものを解き明かす瞬間、組み上げた理論に答え合わせをするその時にこそ生じるあの快感ッ！あれに勝るものはないよ

「ツはあくこく、多貴子さんかっこいいですうううっ!! 今のお言葉、記録しておきますね！」

美南は興奮気味に手帳とペンを取り出すと、すごい勢いで多貴子の一言一句をメモし

ていく。

「美南、こんな夜道で手元見とつたら危ないで～」

「えんらえんら！躓いて転んだりするなよ～」

「はいはーい。気を付けま～す」

ヒノコは心配そうな声を上げ、エンラは笑いながら注意を促した。

「ところで、私たちは今どこへ向かっているんだい？」

多貴子からの質問に、黒海はスマホの地図を見せて答えた。

「この参道の先に、古い社があるそうです。結界の起点としては最適かと」

「社か……寺や神社と違つて、管理が行き届いてない場合も多い。油断しないようにね」

「……どうやら、あちらから来てくれたようです」

黒海の言葉に、一同は足を止める。

全員の耳に聞こえてきたのは、低い、獣が唸るような声だつた。

ライトの明かりを前方へと向けると、何かがこちらへとゆっくり向かってくる。

「野犬か？」

エンラが呟いた。

「皆気いつけや、あれただの野犬とちやう！」

ヒノコが叫んだ時、野犬の顔がライトに照らされ、一同は息を呑んだ。

なんと、目の前に現れた大型犬サイズの獣の顔は……白目を剥き、犬歯を剥き出しにした中年男性の顔だつたのだ。

「人面犬…………!?」

反射的に構える一同。

現れた人面犬は、ボソリと口を開いた。

「…………テン…………ヨオ…………」

「おい、この犬…………何か…………」

多貴子が気づいた次の瞬間だつた。

「ナニ見テンドダヨオオオオ!!」

人面犬は咆哮と共に、4人に向かつて飛びかかつた。

「うわっ!?」

咄嗟に身を屈めた美南の頭上を掠め、鋭い爪を振り下ろされた。

「危ない危ない…………緋山くん、無事か?」

「ひええ…………危うく首が飛ぶところでしたあああ…………」

「多貴子さん、大丈夫ですか?」

「お陰様でね」

立ち上がり、慌てて正親の背後に隠れる美南。

一方、多貴子は黒海に腕を引かれ、庇われる形で抱えられていた。慣れているのか、多貴子は平然とした態度でタブレットを手に取り、人面犬へと向けている。

「妖火の反応がない。どうやら式鬼の一種らしいねえ。犬の特性を有しているなら、噛まれないように気をつけた方がいい。狂犬病の要領で、傷口から蝕まれる可能性があるからねッ！」

「ツシャアアアア!!」

言い終わるが早いか、人面犬は再び4人に飛びかかる。

人面犬の視線の先には美南。狙いを定め、凶爪が迫るその刹那――

「コラーッ！ウチの美南に何すんねん!!」

人面犬へと、ヒノコが車輪を投げつけた。

炎を纏いながら回転する車輪は、人面犬の顔面に勢いよく命中する。

「ギヤオオン!!」

「ヒノコ、ナイス！」

「俺より早かつた……やれやれ、出番がなかつたね」

ヒノコに先を越され、呆然としている正親の前に出た美南は、人面犬に向かってカメラを向ける。

痛みと熱に悶える人面犬へとピントを合わせ、美南はそのままシャツターを切った。

「ギヤアアアアアアアアアッ!!」

人面犬は野太い悲鳴を上げると、闇に溶けるように消滅する。

「ふう……」

「何してんの美南、もう少しでお陀仏やつたで!?」

「ありがとヒノコ、助かつたよ」

ホツと息を吐きながら、こちらを振り返る美南。

一瞬の攻防に、多貴子と黒海は何があつたか分からず、美南に問いかけた。

「今のは……?」

「そのカメラ、もしかして写靈機ですか？」

「写靈機？あの、妖怪を撮影する事で封じるという呪具かい!?」

「やつぱりご存知でしたか」

そう言うと美南は、写靈機を自慢げに掲げた。

「当然さ！今じゃ幻と言われる、旧世代の遺物だからね。実物は初めて見たよ」

「術師の家系ではない、新米の私にとつては唯一の武器です。旧世代の遺物と言われてますが、こう見えて現役なんですよ！」

多貴子は興奮気味に語ると、美南の持つカメラをまじまじと見つめる。

美南は封じた人面犬を確認しようと、写靈機を操作し始めた。だが、黒海と正親は何か納得がいかないらしい。

周囲を見回して警戒する。

「2人とも、油断しないでください。これで終わりとは思えません」

「そうそう、こういうのって1匹みたら30匹は居るって言うじゃない?」

「マツチの言う通りだ……囮まれてるぞ」

エンラの言葉に、4人は思わず目を見開く。

改めて周囲を見回すと、茂みの奥や木の上からは、こちらをじっと見つめる二対の目がいくつも並んでいた。

「ありやありや……これ、結構いるな……」

「これ全部、人面犬なんでしょうか……?」

「野犬の群れに囮まれた気分だねえ……」

「皆さん、構えてください。ここからが本番みたいですよ……」

美南は再び写靈機を構え、多貴子は懐からガスバーナーのような形状をした拳銃を取り出すと、五行院のロゴが入った銀色のチャッカーをセットした。

「ウガアアアア!!」

「シャアアアアツ！」

人面犬たちは唾液を飛び散らせながら咆哮すると、一斉に飛びかかった。

□□□

「さてさて、野良犬退治だ」

正親は自分を取り囲む人面犬を見回すと、キセルを指先でクルクルと回した。

「グルルルアツ！」

咆哮と共に、一斉に飛びかかる人面犬。

だが次の瞬間、それらは勢いよく吹き飛ばされた。

「おやおや、まさか無手だと思つっていたのかい？」

正親はニヤリと笑みを浮かべると、振り抜いたそれを構え直す。

「残念残念、俺の武器はこいつなのさ」

その手に握っていたのは、煤で形作られた黒い棒。

本能に任せて飛びかかる人面犬達の急所を的確に突き、横つ腹を薙ぎ払い、頭を打ち据えていく。

「動きが単調すぎる。もつと予想外の作戦とか、見せてくれないものかなあツ！」

そう言つて正親は、正面から接近してきた一体に棒を叩きつける。

だが、その人面犬は叩きつけられた棒を素早く回避すると、正親の喉元へと牙を剥いた。

「やつべ……」

正親が呟いた次の瞬間、人面犬の顔を白い煙が包み込む。

人面犬は力なく落下すると、全身を痙攣させ、やがて動かなくなつた。

「危ない危ない。助かつたよ、エンラ」

「えんらえんら！ 調子に乗るからだぞ、マツチ！」

「すまない。ちよいとスリルを求め過ぎたようだ」

軽口を叩きながらも、正親は煤棒を振るう手は休めない。

地面に落下し、あるいは木に背中を打ち付けて消滅していく人面犬。

いつの間にか、正親の周囲を囲んでいた人面犬は、あらかた片付いてしまつっていた。

「さて、緋山くんの方を助けてやらないとね」

□□□

「宵待流闘影術……影爪！」
カゲヅメ

黒海が両腕を交差させると、紫色のオーラが彼女の両手を包み込む。やがてオーラは鋭い鉤爪のような形となつた。

「見テンジヤネエエエ……グワアウ！」

人面犬の一体が、喉元に食らいつこうと飛びかかる。

黒海はすかさず、その顔面を引っ掻いた。

「ギヤアアアアッ！」

怯んだ隙を突き、地面に落下した人面犬に蹴りを叩き込む。

「ギヤウツ！」

人面犬は悲鳴を上げ、傾斜を転がつた。

しかし、黒海の背後に別の人面犬が迫つていた。

「ギヤオオオツ！」

「たあッ!!」

振り下ろされた凶爪を寸でのところでかわすと、黒海は人面犬に向かつて拳を振るつた。

纏つたオーラにより、向上した腕力から繰り出される拳が人面犬の身体を貫く。更には貫手で、もう一体の急所を貫いた。

一定のダメージを受けると、人面犬は死体も残さず消滅していく。

だが、黒海の背後や真横からも、人面犬は迫つてきていた。

「ガウツ！」

「ウガアアアアッ!!」

死角からの同時攻撃により、黒海の動きを封じようと飛びかかる二体。

しかし、黒海は顔色ひとつ変えることなく、ただ一言呟いた。

〔防影〕
〔マモリカゲ〕

直後、黒海の背後の空間に、墨汁を垂らしたような黒い波紋が広がる。

人面犬はそこに顔から突つ込んでいく。

黒い壁に鼻先が触れたその直後。人面犬の頭は、水面に沈むようにその場から消えた。

背後からの奇襲を防いだ黒海は、同時に右方から攻撃を仕掛けてきた人面犬へと狙いを定める。

飛びかかるために跳躍する、その一瞬を見極めると、黒海は虚空へ手を伸ばした。

〔影掴み〕

黒海の右手を包むオーラが手を離れ、まるで手首が伸びたかのように人面犬の方へと向かっていく。

影でできた手は巨大化し、人面犬の胴をがつちりと掴む。

「はああああっ!!」

そのまま、右腕を水平に振る。

影の腕は人面犬を掴んだまま、人面犬の群れを薙ぎ払った。

それから背後を振り返ると、パチツと指を鳴らす。

直後、防影に埋もれていた人面犬は勢いよく吹き飛ばされ、大木に身体を打ち付けら

れた。

「倒したのに妖火が残らない……全部使い魔ですか……」

□□□

「フフン。新兵器、アヤカシバーナーの威力を見よ！」

得意げに叫んだ多貴子は狙いを定め、トリガーリードを引いた。

銃口から発射された炎は人面犬に命中すると、体毛伝いに燃え広がっていく。自ら発明した新兵器の威力に、多貴子は満足そうに笑った。

「ククク……計算に狂い無し。設計通りの威力だ！」

「グルルアアアアッ！」

「おおつと失礼」

頭上から飛びかかってきた人面犬へと銃口を向け、トリガーリードを長押しする。すると放射状に放たれた炎によつて、人面犬は炙り焼きにされてしまった。

「アアアアアアア熱イツ!? 热イイイイイツ!!」

「アツハハハハハ、火炎放射も設計通りに発射できている。素晴らしい成果だ！ これなら量産も可能だろう！」

満足そうな表情を浮かべる多貴子。

しかし、彼女は発明の成果に夢中で気づかなかつた。

背後から近づいてくる黒い影に。

彼女は本来、戦士ではない。ただの科学者なのだ。

い。 気配を察知する能力や、死角からの奇襲に対する戦闘技能などは持ち合わせていな

「グワアアウツ!!」

「うわあ!? 危ないじゃないか!?」

咄嗟に身を逸らした多貴子。

幸いにも、人面犬の凶爪は彼女を引き裂くことはなかつた。

しかし、人面犬の群れは彼女を一番弱いと判断したのか、次々に押し寄せてきた。

「わああああ!? 来るんじやない! 来ーるーなーよー!」

あまりの数に、多貴子は慌てて逃走する。

木の陰を盾にし、頭を下げることで飛びかかつて来た人面犬を回避し、自分に接近したものから先にバーナーで燃やしていく。

そんな動きを繰り返していく内に、枯れ葉に隠れていた木の根に躊躇してしまった。

「うわわ、しまつ……」

身を逸らそうとして、思わず尻もちをつく多貴子。

だが、転んだ拍子に彼女のメガネは目元を離れ、彼女の足下に落下した。

「ツ?! まずい、メガネを……」

拾おうとして、多貴子は絶句した。

彼女のメガネは、あくまで妖怪達を視認するためのもので、度は入っていない。だが、彼女の眼はそれらをはつきりと映していた。

「この犬達……どうして私にも視えているんだ!?」

困惑する多貴子。だが人面犬はそんな彼女に構わず牙を剥く。

獲物が目の前で呆けているのだ。獣はそれを逃さない。

「ガアアアアアアッ!!」

五体もの人面犬が、無防備な多貴子へと同時に襲いかかる。

絶体絶命。あわや御陀仏。命運ここに尽きたり。

そう思われたまさにその瞬間——黒海は叫んだ。

「ヤド!! お願ひ!!」

「仰せつかつた!!」

若い男の声が響く。と同時に、紅葉積もる大地に落ちた多貴子の影から、何者かが姿を現す。

多貴子を庇うように立ちはだかった黒い影は、手にした錫杖で五体の人面犬を全て打

ち据え、叩き屠つた。

「君は……」

「多貴子殿、お怪我はございませぬか」

落ち着いた雰囲気の、男の声。

手渡されたメガネを受け取り、多貴子はその姿を認識する。

その姿は、闇に溶けるような黒い装束に身を包んだ修験僧のようだつた。目深にかぶつた笠からのぞく口元は、白く美しい。

装束と同じくらい黒い長い長髪は、肩まで伸びている。

「すまないねえ、ヤド。助かつたよ」

「多貴子殿は黒海の大切なご友人。殺されてしまつては拙僧、悔やみに悔やみきれませぬ」

「ヤド、やつぱりこの数相手はしんどい……。片付けて！」

「承知、では」

人面犬と格闘しながら、多貴子の元へ向かおうとする黒海。

ヤドと呼ばれた妖怪は静かに首肯すると、右手で印を結び、錫杖をシャリンと鳴らした。

「沈め、
影沼」
かげぬま

一瞬の静寂。その直後、人面犬たちに異変が起ころ。

「グルウ…………ツ!?」

「オオ……!? アアアツ!」

突如、人面犬たちの足下が沈下し始めたのだ。

まるで底なし沼にはまつたかのように。足下から沈んでいく。

「あれは……黒海さんの契約妖怪！」

「何やねん!? あのけつたいなまつくり黒助!?」

木の幹に隠れながら写靈機を構えていた美南と、二つの車輪を投げつけ戦っていたヒノコが、思わず手を止める。

煤で形作ったクナイを投擲した正親は、美南たちの視線の先を振り向くと呟いた。

「これはこれは……影を自在に操る妖怪、『夜道怪』か」

「えつ……それ、夜最強じやないですか?」

「ああ、間違いないだろう。影使いとは聞いていたが、なるほどなるほど……最高のパートナージやないか」

「えんらえんらー！俺とマッチみたいにな！」

「ああ。今年の生徒は粒ぞろいと聞いていたが、これほどとはね」

「一体、また一体と人面犬の姿が消えてゆく。」

あつという間に、あれほどうるさかつた人面犬達の吠える声は聞こえなくなつてい
た。

「お疲れ様です、ヤド」

「黒海こそ、よく一人で頑張りましたね」

「鍛錬の成果です。……多貴子さん、大丈夫ですか？」

黒海は多貴子の元に駆け寄ると、ライトで彼女の身体をあちこち照らす。

「ヤドのおかげでね。まあ、ドジを踏んだのは私だが」

「本当ですよ。そうやつてすぐ調子に乗るんですから……」

「しううがないだろう？ 実験が成功したんだから」

「はあ……」

「二人とも、その辺で。今は急ぎましょう」

「さてさて、本番はここからだ」

「そうですね……。あの人面犬、使い魔でしたし」

「つまり、あれを操つていた大本がいるつてことですよね？」

「この先で待ち構え取るやろなあ」

一同は参道の先を見つめる。目的の社はすぐそこだ。

「……行きましょう」

「ああ」

「いざ、決戦の地へ！」

「それ、ちょっと早くないかな？」

怪しげな気配漂う社へ。

四人と三体は気を引き締め、足を進めていつた。

第十二夜 「三つ首の人狗」

「うわ、ボロボロだな」

正親は社を見上げて呟いた。

ライトに照らされたそれは、かなり苔むしていた。

柱や屋根は腐食が激しく、一部は崩れ落ちてさえいる。

十数年近くは人の手が入っていないのではないだろうか？

「雰囲気としてはいかにも、という感じだねえ」

「この何処かに、結界の起点が？」

多貴子と美南が周囲を見回しながら進む。

「皆さん、静かに……何か居ます」

最前列の黒海が足を止めた。

後ろの3人も足を止め、黒海に示された場所を見る。

そこには四つ這いの何者かが、ハツハツと短く息をしながら何かを貪っていた。

顔を動かす毎にクチャクチャ、グチャグチャという音が鳴る。

ペツと何かを吐き出す音の直後、カラカラと何かが転がる音が聞こえた。

野犬が獣を食る音だろうか？

いや、その何者かは確かに犬のような後ろ姿をしてはいる。

だが美南の写霊機は、それをただの野犬とは認識していなかつた。

ここからどう動くか決めようとして……正親が音もなく背後に接近し、黒煤の長刀を振りかぶつた。

「シイツ！」

石畳を打つ硬い音が、闇夜に響き渡る。

不意打ちで仕掛けた一撃は軽々と躲され、貪られていたイノシシの亡骸だけが真つ二つになつた。

「食事中なの、見てわかんねえのか？」

ガラの悪い、ふてぶてしい声だつた。

発しているのは、その野犬で間違いないだろう。

「殺す氣で狙つたのに避けられるとは。野生の勘かな？」

「こちとらお犬様だぞ？人間如きが殺せると思つてんのか」

口周りを血だらけにした野犬はそう言うと、二足歩行で立ち上がる。

細身だが成人男性ほどはある体躯。二足歩行できるようになつた大型犬、という印象を受ける立ち姿。

ボロボロに擦り切れ、体毛が覗くビジネスースーツ。

首に巻かれた厳つい首輪と、身体に巻き付いた多くの鎖。

そして青白いその顔は、鼻から口までが三角を描いて飛び出しており……犬の顔と人間の顔を、上下に分けて縫い合わせたような様相となっていた。

「あれが、人面犬……!?」

「さつきまで戦つてたやつらと全然違うじゃないですか！」

「バカめ、同じなわけねえだろうが。俺はただの人面犬じやねえ……」

そう言つた人面犬は、全身をこわばらせながら低く唸る。

直後、人面犬の身体に異変が起きた。

肩にあたる部分が何やら不気味に蠢き、そこから何かが生え始めたのだ。
両肩から生えてきたそれは、犬の頭のような形をしていた。

それもただの犬ではない。左右それぞれ一部分だけ、人間の顔になつている。
否、人間が犬に変えられていく途中で止められたような、グロテスクな状態だ。
やがて三つ首へと姿を変えた”それ”は名乗つた。

「人面ケルベロスだ。その一つしかねえ脳ミソに叩き込めッ！」
次の瞬間、人面ケルベロスは正親の目の前に立つていた。
暗闇の中、伸ばされた爪がギラリと輝く。

「ぐうッ!?」

咄嗟に防御の構えを取った正親は、後方へ勢いよく吹き飛ばされる。

「出雲先生！」

「マツチさん！」

「大丈夫かい!?」

鳥居の柱に背中からぶつかった正親に駆け寄る3人。

正親はよろけながらも立ち上がった。

「サンキュー、エンラ。今のは危なかつた」

正親の背後から、エンラが顔を覗かせる。

どうやらぶつかる直前、自分の体をクツシヨンにしたようだ。

「正親、こいつ強いぞ」

エンラは渋い顔で正親に話しかける。

先程までとは打って変わった、真面目な聲音だ。

「四級くらいかと思つていたけど……やれやれ、見積もりが甘かつた。この速さ、三級

か

「んじや、本氣でかかるか」

「ああ、やるぞ」

エンラがアヤカシチャツカーへと戻り、正親は懷から取り出したドライバーを腰に巻く。

「ヤド、私たちも」

「御意に」

「うわあ!? まだそこに居たのかい!」

多貴子の影から現れた夜道怪もまた、黒海の手のひらに握られたチャツカーへと身を移す。

「ヒノコ! 私たちもいくよ!」

「よつしや! いてこましたるでえー!」

ヒノコも空中で一回転すると、美南のチャツカーへと入つていった。

『オクリビドライバー!』

『キヤンドライバー!』

ドライバーを巻いた3人は、それぞれのチャツカーを片手に握りキヤップを弾く。

『着火! エンエンラ!』

『着火! ヤドウカイ!』

『着火! カシャ!』

チヤツカーがドライバーに装填され、3人の契約妖怪の名前が入つた待機音が鳴り始

める。

『エ～ンラ、エンラ！エンエンラ！エ～ンラ、エンラ！エンエンラ！』

『カイ……カイ……カイ・カイ・カイ！カイ……カイ……カイ・カイ・カイ！』

『カーシャカツシヤ、カツシヤツシヤ！カーシヤツカシヤ、カツシヤツシヤ！』

正親はペンを握るような構えで右腕を水平に動かし、

黒海は顔の横で猫の影絵ができるように手を組み、

美南は両手の指で長方形を作り、カメラのように覗き込んだ。

「「変身！」」

『妖火意列火！』

『妖火意点火！』

声を揃えてレバーを引く。

ドライバーから吹き出した妖火が、三人の身体を包み込んだ。

『ご縁ら！燃えんら!?ええんら!!煙々羅ア～!!』

『暗晦！斎戒！奇々怪々！何か用かい？夜道怪!!』

『ド～タバツタ、RAN RAN RAN! Gotcha!^{ガツ} チヤ！行脚！火車シヤ！』

韻を踏んだ変身音と共に、3人のライダーが並び立つ。

「まさかお前ら、3人揃って仮面ライダーか？」

驚く人面ケルベロスに、ライダー達はそれぞれ名乗りを上げた。

「さてさて、一服付き合つてもらおうか」

出雲正親が変身したのは、青い複眼が光る灰色の狼面と煙の描かれた白羽織に身を包んだ仮面ライダー1。

その名も仮面ライダー狼煙。ノロシ

「さあ、撮影開始です！」

緋山美南が変身したのは、緋色の複眼を持つ三毛猫面に、炎と車輪が描かれた白い羽織を纏い、肘や膝をプロテクターで覆ったライダー。

仮面ライダー炎輪エンリンという名の通り、その両足にはローラースケートが装着されていた。

「……今宵が貴方の峠です」

「今の間は『私も決めゼリフ言つた方がいいのな?』って迷つていたね?」
「ツ! 多貴子さんは隠れていてください!」

そして、宵待黒海が変身したのは、漆黒の袈裟に身を包み、目深に被つた編笠の奥から黄色い目が覗く仮面ライダー1。
名を仮面ライダー戒淵。カイエン

3人のライダーを前に、人面ケルベロスは不敵に笑つた。

「3対1……だとでも思つたかよオ!!」

直後、ケルベロスの両肩が膨らむように蠢き、何かが現れる。現れたそれらはどんどん形を変え、ケルベロスと同じ姿形へと固まつていく。

「1人ずつ相手してやんよ！」

3体に分裂したケルベロスは長い鉤爪を、鋭い牙を光らせると、ほぼ同時に飛びかかる。

□□□

「グルルルルアアアアツ!!」

「おおつとつとつとつ、とお!!」

鉤爪による連撃を、炎輪は華麗なバツクステップで回避していた。

否、正確にはバツクステップではない。

両足のローラースケートで後ろ向きに滑走しているのだ。

それも、人面ケルベロスからの攻撃を次々と躱しながら。

「そんなんじや当たらないですよ〜」

「ちよこまか、してんじや、ねえツ!!」

『美南い！あんま調子乗つてると、転んでまうで！』

「分かつてるつて〜」

相棒からの忠告に軽く応えながら背後を振り向く。

そこには、そびえ立つ樹木が行先を塞いでいた。

「やっば!?」

「死ねやああああッ!!」

背後に障害物。袈裟懸けに振り下ろされる鉤爪。

たとえ直撃を避けても切断された木の下敷きとなり、隙を作ってしまう事になる。

絶体絶命の状況、致死の刹那に響いたのは……相棒の声だった。

『左斜めにイナバウアーや!!』

「ツ！でりやあああああッ!!」

咄嗟に重心を前方斜め左へと傾け、上半身を限界まで逸らしながら前進する。

直後、背後で樹木が倒れる音が轟く。

炎輪の身体はケルベロスの左脇をすり抜け、背後を取つていた。

『今や！かましたれ!!』

「炎輪・逆廻しッ！」

炎輪は体をひねりながら体勢を戻すと、手元に出現させたチャクラムを反時計回りに

回転させ、ケルベロスの背中を逆袈裟に切り裂く。

「グガッ!?」

「もういつちよ！炎輪・前廻しツ！」

悲鳴を上げて振り返ったケルベロスへと、続けて時計回りに回転するチャクラムを叩きつける。

「ガツ！？」

「続けて三コン……」

「三度目の、つてなあツ!!」

更に一撃叩き込もうと振り下ろされたチャ克拉ムを、ケルベロスは鉤爪を交差させて受け止める。

回転するチャ克拉ムが爪とぶつかり、ギヤリギヤリと火花を散らした。

「やつぱり、そう簡単には倒されくれませんか……！」

「調子乗つてるクソガキほど、いたぶるのが楽しそうだよなあツ!!」

□□□

「グルルルアアツ!!

「はあ……ツ！」

戒淵の方へと向かつてきたケルベロスは、両腕に幾重にも巻き付けられた鎖をムチのよう振り下ろす。

戒淵はそれを難なく躰しつつ、ケルベロスの懷に入ろうと踏み込んだ。

「甘えツ！」

「ツ……！」

しかし、ケルベロスもそれは読んでいるようで、戒淵が繰り出す打撃を両腕でガードする。

腕に巻かれた鎖は硬く、鎧のよう^にケルベロスの身体を守っていた。
全身を包むスー^ツと影爪^{カゲヅメ}越しにでも伝わる痛みと痺れに、思わず怯む。

その隙を見逃さず、ケルベロスは戒淵の横つ腹に蹴りを叩き込んだ。

「ぐう……ツ!?」

勢いよく横に吹つ飛ばされていく戒淵。

ケルベロスは素早く追従すると、無防備な戒淵へと鎖を振り下ろし、地面へと叩きつけた。

「が……ツ！」

地面に叩きつけられ、地に伏す戒淵。

ケルベロスはそれを見下ろしながら、両腕から伸びる鉤爪を鳴らした。
「犬は猫や人間と違つて、獲物を弄ばねえ。これでトドメだツ！」

突き出された鉤爪が、戒淵の身体を刺し貫く。

訪れる静寂。動かなくなつた獲物の姿。

ケルベロスは勝利を確信しニタリとほくそ笑む。

「存外、あつけなかつたな。噂の仮面ライダーもこんなもんかよ。楽勝じやねえか
これなら残りの2人もすぐだな、と言いかけて。彼はある違和感に気がついた。

「…………あ？…………おい、どうなつてやがる!?」

腕を引いても、戒淵の身体から爪が抜けなくなつていたのだ。

「どうして……こいつの死体、爪から抜けねえんだ!?」

違和感に気づいた時はもう遅い。抜けなくなつた爪の先端から、泥のような何かがベタベタと腕を飲み込んでいく。

何かがおかしい。目を凝らして自分の腕を見たケルベロスの視界に映つたのは……
一面の黒。

戒淵ではない。戒淵によく似た姿形をした影だけが、形を崩しながらケルベロスの腕に絡みついていた。

「宵待流闘影術・映身ウツシミ……あなたが貫いたのは、私の姿を映した影です」

「うわああああああッ!?」

背後から聞こえた突然の声に、思わず悲鳴を上げるケルベロス。

そこには、無傷の戒淵が佇んでいた。

「俊敏さに大層自信があるようでしたので、動きを封じさせてもらいました」

「テメエッ?! い、 いつの間にに入れ替わりやがった! ?」

「さあ? そこはご想像にお任せします」

戒淵はドライバーのレバーに手をかけ、 押し込んだ。

『妖火チャージ! 妖火意転カーキ!』

「よ、 よせ! 来るな、 来るなあああ!!」

バツクルが閉じ、 ベルト内部にチャツカ一から溢れ出した妖火が充填されていく。紫色の、 影のように揺らめく炎が彼女の右足を包み込んでいく。

ケルベロスの眼前で、 戒淵はそのままレバーを引いた。

『ヤドウ必殺! 妖火意ブースト!』

「宵待流闘影術……奥義・影湖征醉! エイコセイスイ」

「ギエアアアアアツ! ?」

繰り出された華麗な回し蹴りが、 ケルベロスの顔に命中する。

ケルベロスは横薙ぎに吹っ飛ばされ、 地面を転がつていき……。

「おやすみなさい」

そして、 最後は炎に包まれ爆散した。

「……さて、 残りの2体を——」

正親と美南の援護に向かおうと、 振り返る戒淵。

そこで彼女は、あることに気がついた。

「随分と、社から離されていましたね」

『黒海、どうやら奴の術中にはまつたようだ』

「ツ！まさか、狙いは私達の分断!?」

黒海の脳裏をよぎつたのは、社に残っていた仲間の顔だった。

□□□

「そらそらそらそらツ!!」

狼煙は袖口から煙を放出し、その煤を固めて形成した長刀『煤祓^{ススハライ}』を振るい、ケルベロスと切り結ぶ。

素早い動きから放たれるひつかき攻撃に狼煙は難なく対応し、時に視界を煙に巻いては、隙あらば踏み込もうとする。

「お前、人間にしちゃあいい動きだ」

「伊達に祓人やつてるわけじやあないんでね。ハアツ！」

「シャアツ！」

しかし、ケルベロスも負けてはいない。

爪や牙での攻撃は有効打にならないと判断するや、バックステップで距離を取る。直後、ケルベロスは大きく息を吸い込み、口をガバッと開いた。

「アオオオオオオオオオオオオオオン!!」

「なつ!? これは……！」

ケルベロスの咆吼が超音波となり、狼煙を襲う。

全身がビリビリと痺れ、周囲の空気が強いプレッシャーとなつてのしかかる。

思わず長刀を取り落とし、耳を塞いだ。

動くことが出来ない、その一瞬生じた隙を突いてケルベロスは石畳を蹴った。

「隙ありツ！」

「ぐうツ! ?」

ケルベロスの拳を顔に受け、狼煙は大きくのけぞる。

「さらに二発、三発ツ! フィーバータイムだ!」

「がつ!? ザおつ! ?」

拳、拳、さらには腹部に膝蹴り。

体勢が崩れた狼煙は、ケルベロスの攻撃を受け続ける。

胸ぐらを掴み、間髪入れずの連撃。加えて超音波で痺れて動けなくすることで、反撃

の隙を与えない。

相手に余力を残させなず、自らの手で確実に仕留める戦い方だ。

やがて狼煙は、石畳を力なく転がつた。

「ハツ、こんなもんかよ。まあ、結構頑張ったんじゃねえか?」

「う……くつ……」

唸るような声を漏らし、立ち上がるうとする狼煙。

それを見下ろして、ケルベロスはせせら笑つた。

「もう声もだせねえか。ざまあねえ……ああん?」

しかし、狼煙はまだ立ち上がろうとしていた。

取り落とした長刀を石畳に突き立て、それを杖に身体を起こす。

「まだ……まだだ……俺は……まだ、立てるぞ……」

「……ハツ、強がるんじやねえよ。内臓から血い出てるだろ? 臭いで分かる。常識的に考えて、まともに動ける身体じゃないだろ」

「いいや……まだ、だね」

狼煙の仮面の奥から除く眼が、ケルベロスには見えた気がした。

強い意志でこちらを見据え、反撃のチャンスを掴もうとする眼が。

「鎖で繋がれた犬つころなんかに……俺は負けない」

「……テメエ、今なんつった?」

狼煙からの言葉に、ケルベロスの耳が一瞬ピクッと動く。

聞き捨てならない言葉だつたのか。瘤に障つたようなその反応を見て、狼煙はもう一

度、ゆつくりとその言葉を繰り返した。

「鎖で、繫がれた、犬畜生風情に、負けるわけがないって言つたんだこの骨なしチキン野郎！」

「この俺が畜生風情だとおツ！」

「そうともそうともツ！君、さつき自分をお犬様だの人間風情より上だの言つてた割には、その格好はなんだ？ええ？首輪と鎖だらけじゃあないか！自由がない、繫がれる自分で大口叩いてイキつてるとは滑稽滑稽！実に愉快だ、面白い！」

「ツ!! テメエ!!」

「それに、弱い犬ほどよく吠えるつて言うよなあ？強い言葉ばつか使つてるのは、弱い自分を隠すためのハツタリなんだろ？」

「黙れえええええツ!!」

次の瞬間、ケルベロスは狼煙の眼前に立つていた。

その左手は狼煙の首を掴み、高く掲げている。右手は指をまっすぐ揃え、貫手の構えを取つていた。

先ほど切り結んだ時の速さで突き出せば、一瞬で狼煙の身体を貫けるだろう。

「死ねツ！その後でお前の屍を踏みつけてやるツ！」

「やつてみろよ」

だが、狼煙はこの状況でなお冷静だった。

首を捕まれた状態で、ケルベロスの方を見下ろしている。

その姿がなおさら腹立たしかったのだろう。ケルベロスは歯ぎしりすると、唾液を撒き散らしながら叫んだ。

「死にさらせええええええツツツ！」

「かかつたかかつた」

次の瞬間、社に銃声が響き渡った。

煙が上がっていたのは、狼煙の右腰。

弾が命中したのは、ケルベロスの腹部だつた。

「なん……だとお……ツ！」

「ゲホッ、ゲホッ……ふう、かかつてくれて嬉しいよ」

ケルベロスの手を離れ、狼煙は咳き込みながらも着地する。

右腰から引き抜いたのは、妖狐のキツネビシューターに似た形状だが、狼煙の面と同じ煙狼の顔が象られた銃だつた。

『エンラショットー！』

「ぜやあッ！」

「ぐうッ！」

蹴りを入れられ、今度はケルベロスが後方へと大きく吹っ飛ぶ。
ケルベロスは困惑しながらも、狼煙を睨みつけた。

「どういう、ことだ……!?」

「いやあ、君の言葉遣いと戦い方から、君は煽られると弱いんじゃないかと推察してね。
強い言葉で他人を見下すのは虚勢の表れ。ここにたどり着く前に差し向けてきた式鬼
も、相手を動けないようにしてから一方的に躊躇する戦い方も、臆病さの裏返しなんだろう
？」

「……ツ?!?

「おやおや、図星かい」

そう言いながら、狼煙はドライバーからチャッカーを引き抜き、エンラショットーに
装填する。

「決め手はその鎖と首輪だ。妖怪の在り方を決定づけるのは、人々の認識と^{イメージ}想念だ。人
面犬が鎖に繋がっていた、などという話は聞いたことがない。とすれば、その鎖は他人
のイメージではなく、君自身に由来するものなのだろう？」

「お前は……いつたい、なんなんだ……!?」

「こと」とく言い当てられたためか、ケルベロスは困惑し後退る。
対する狼煙は銃口を向け、静かに名乗つた。

「小説家の観察眼を、甘く見ないでもらおうか」

『着火！エンエンラ！エンラ必殺！』

「くツ……！」

逃げ延びようと跳躍するケルベロス。

しかし、その両足が石畳を離れることはなかつた。

「なツ!?」

狼煙を取り巻くように表れた四体の煙狼が、ケルベロスの両手足に喰らいつき、拘束

して
いた
のだ。

「狼煙終煙弾！」

放たれた最大威力の弾丸が、ケルベロスの身体を貫く。

「ギヤアアアアアアアアアアッ!!」

「これにて完結、つと」

断末魔の叫びと共に、ケルベロスが爆散する。

狼煙はエンラショットーをホルダーに戻すと、先ほどまでケルベロスがいた地点を見回した。

「……おかしい。残火が残らないのか？」

「実際見るのは初めてかい？」

「颯音くん……。君は知っていたのか？」

「私は実際に交戦した仲間に話を聞いたからねえ。あまり驚きはしないよ」

振り返ると、鳥居の陰に身を隠していた多貴子が、タブレットを操作しながらこちらへ歩いてきていた。

「昨日、うちの晴矢と新入りが撃破したヤマノケだが、倒しても残火が残らなかつたらしい。代わりに黒いチャッカーが残されていたようなんだが、その辺に落ちていないかい？」

「黒いチャッカー？」

そう言われた狼煙は、足下を見回す。

だが、石畳のどこを見てもそれらしいものは見当たらない。

「そういえばあの怪異は分身、いや、プラナリアみたいに分裂していたねえ」

「まさか、緋山くんか宵待くんの方が本体なのか？」

「可能性は高いねえ。或いは——」

多貴子がそう言いかけた時だつた。

「それ以上動くな。こいつが死ぬぞ」

倒されたはずのケルベロスが、多貴子の喉元に爪を突き付けていた。

第十三夜 「夜明け」

「颯音くんツ！」

「噂をすれば何とやら……かな？」

倒されたはずのケルベロスが、多貴子の喉元に爪を突き付けていた。
いや、正確には炎輪と戦っていた個体である。どうやら炎輪を引き離してきたらし
い。

「やれやれ、人質とはいからにも……」

「黙れ小説家。お前の弾丸より、俺様の爪の方が素早くこの女を貫くぞ」
「……言うじやないか」

「多貴子さんツ！」

「そこへ戒淵の声も響く。

「黒海……すまない、見ての通りだ」

「お前も動くんじやないぞ、影使い。お前ら、そのベルトを外してこつちへ投げろ」
「な……ツ!?」

ケルベロスからの要求に、三人は息を呑む。

「……ベルトを外せば、颯音くんは返してくれるんだろうな？」

「何言つてんだ。せつかくの人質を、そんな簡単に返すわけねえだろ」
さも当然というように、ケルベロスはそう答えた。

戒淵は吐き捨てるように呟く。

「最ッ低ですね……」

「オイオイオイ、いいのか？お友達が使い切りの新作噴水彫刻になつても？」
「黒海……」

多貴子の喉元に、爪の切つ先が迫る。

戒淵を見つめる彼女の瞳は、言葉にしなくとも何かを訴えていたようだつた。
「……分かりました」

「……やれやれ、従うしかなさそうだ」

顔を見合せると、狼煙と戒淵は各自のドライバーに手をかける。
手を伸ばすのはレバーではなく、ドライバーの留め具の方。

下手に動けば仲間が死ぬ。二人に選択権はなかつた。

「あくまで二人には、だが。

「そういえば」

突然、多貴子が強調するように大きな声で言つた。

「人面ケルベロスくん、だつけ？君、もう一人のライダーはどうしたんだい？」

「ああ？」

「なに、少し気になつてね。彼女は新人だが、機動力は我々の中でも随一だつたはずだ。どうやつて振り切つてきたのか、教えてはくれないか？」

ケルベロスは一瞬、怪訝そうな顔をしたが、すぐに答えを返す。

「ああ、あのマヌケそうなやつか。アイツなら、俺様に一撃入れられたからと調子に乗つて加速したもんだから、止まれなくなつて山の麓まで滑り落ちていつたぜ」

「ふウン……ククク、そうか……」

それを聞いた多貴子は、口角をつり上げた。

「ククク……アーツハツハツハツハツハーツアツハハハハハハハハハハハハハハ

「な……何が可笑しい!?」

タガが外れたように笑う多貴子に、ケルベロスは困惑する。

すると、多貴子は目線だけをケルベロスの方へ向けると、笑い混じりに言つた。

「これは傑作だねえ！まさか……まさかそこまで浅はかとは」

「どういう意味だ？」

「だつて、ねえ……弱そだからトドメを刺さずに放置するなんて迂闊すぎるよ、君」

次の瞬間、ケルベロスの後頭部を強烈な衝撃が襲つた。

「があツ!?」

『今だ正親!』

「ああツ!』

ケルベロスが多貴子を手放したその一瞬。狼煙が自身の身体を煙へと変化させ、多貴子を包み込む。

煙化した狼煙はケルベロスの腕をすり抜け、社の前で再び実体化した。

「大丈夫かい、颯音くん」

「いやあ、正直ヒヤヒヤしたねあ。でも、しつかり間に合わせてくれたねえ……騒がしい新人は」

石畳に降ろされた多貴子は、そう言つて空を見上げる。

そこには月光を背に受けて鳥居に降り立つ、仮面ライダー炎輪の姿があつた。

「多貴子さん! お怪我はありませんか?』

「おかげさまでね! 最高のタイミングだつたとも!』

炎輪は手元に戻ってきたチャクラムを握ると、社から飛び降りる。

両足のローラースケートに炎が灯り、彼女はフワリと降り立つ。

「嫌な予感がしたので、空を飛んでカツ飛ばしてたらあの場面で、驚きましたよ』

『怪我の功名つて言うんか? タイミング良すぎやわ〜』

「ククツ、君は面白いねえ」

「多貴子さん！」

呼ばれて振り返ると戒淵……もとい黒海が駆け寄つてきていた。

「おや、黒m——」

名前を呼ぶ前に、抱きしめられていた。

思わず閉口してしまった。

「よかつた……」

「……すまないねえ、心配させてしまって」

「……許しません」

ポソリ、と。そう言つて戒淵は、多貴子から離れる。

そして怒りを絞り出すような声と共に、人面ケルベロスを睨みつけた。

「あなたは私の友達に手を出した……。絶対に、許しません!!」

「黒海……」

黒海の表情は、仮面越しでも分かるほど激しい怒りに満ちていた。

全身を循環する妖火が闘気のように立ち上り、夜闇の中で輝いている。

「許さない、だと？ それは俺のセリフだ！ どいつもこいつも、俺をコケにしやがって！ お

前ら全員喰い散らかして、犬の餌にしてやるッ!!」

一方、ケルベロスの方も怒りのボルテージが頂点に達していた。

目を血走らせて叫んだケルベロスの両肩には、再び二つの頭が出現する。

そしてケルベロスは、再び3体へと分裂した。

「黒海、緋山くん、マツチくん」

「俺、一応年上なんだけどな……」

正親のボヤキを完全にスルーして、多貴子は三人にタブレットを見せる。

「奴はどうやら、3体同時に倒さなければ残つた首から再生する特性があるようだ」

「ということは、奴への必勝法は……」

「三人同時に必殺技！ ですね！」

「それなら、私に考えがあります」

三人のライダー達は、ケルベロスの方へと向き直り、それぞれ必殺の構えを取つた。

「『何を企んでるかは知らねえが……まとめて八つ裂きにしてやらあああ!!』」

分裂した三体はそれぞれのタイミングで走り出し、飛びかかり、そして咆吼するべく息を吸い込んだ。

ケルベロスによる連係攻撃が繰り出されるかに見えた、まさにその時。

「ヤド、手加減しないで」

『承知ッ！』

『戒淵が印を結ぶように両手を組んだ。

「宵待流闘影術、影縛り」

両手指を交差させ、網目を作る印。

直後、ケルベロスらに異変が起ころる。

「な、なんだこりやあ!?」

「ま、またこれかあああーーーツ!?

「むぐッ!? むぐぐむぐ!」

ケルベロス達は自分の影に縛られて動けなくなつていた。

戒淵が組んだ印の通り網目状になつた影が、ケルベロスの全身を縛り付けている。呴しようとしていた個体は、口まで塞がれてしまつていった。

「皆さん、今ですッ！」

「さつすが黒海さん！ カツコイイです！」

「宵待くん、中々容赦ないね……」

三人はそれぞれ、ドライバーのレバーを押し込む。

『妖火チャージ！ 妖火意転カーラ！』

『えんらえんら！ 決めるぜえ！』

『妖火チャージ！ 妖火意全カーラ！』

『やつたるでゝ美南!』

それぞれの妖火が足に充填されていく。

狼煙は煙となつて大空を舞い、炎輪は天高く放り投げた車輪と共に大回転。そして戒淵は、両手で犬の印を結ぶと、空高く跳躍した。

『エンラ必殺！ 妖火意ブースト！』

『狼煙落煙脚！』

『カシヤ必殺！ 妖火意バースト！』

『大車輪炎脚！』

落下の勢いを乗せ、または回転の勢いのままに飛び蹴りを放つ狼煙、炎輪。

そして――

『ヤドウ必殺！ 妖火意ブースト！』

「宵待流闘影術、奥義改ツ！ 影湖征醉・エイコセイスイ 犬牙葬逝ツ！」

『オオオオオオオオツ!!』

巨大な犬の影を両足に宿し、敵を喰らう飛び連続蹴りを決める戒淵。

「「ひツ、ひいいいいいいツ!!」」

ケルベロスらの身体を貫き、着地するライダー達。

三大ライダーのライダーキックを受け、三体の人面ケルベロスは同時に爆散するの

だつた。

□□□

「黒いチャッカーを回収。あとは——」

人面ケルベロスを撃破した後、四人は社の裏手に来て いた。
多貴子の視線の先。そこには社の裏手にある要石と、その前でしゃがみ込む黒海の後ろ姿がある。

黒海の黄金の瞳は、闇の中で煌めいていた。

「噂には聞いてましたけど……黒海さんの眼、本当に光るんですね」

「彼女は『異能者』。俺みたいな術師の家系でこそないが、生まれつき妖力や靈力の流れが見える特別な眼を持っている人間だ」

「すゞ……！ ちょっと羨ましいです！」

黒海とは違う意味で目を輝かせる美南。

しかし、正親は浮かない顔をして いた。

「大変なものだよ。人と違うっていうのはね」

「へ？ どうしてですか？」

「異能者であるが故に、生まれつき覗えてしまったのさ。妖怪がね」

正親より先にその問い合わせに答えたのは、多貴子だつた。

妖怪がね」

「幸い、家族に疎まれこそしなかつたが、黒海は周囲から浮いていたらしい。無理もない、周りとは見えてる世界が違うんだからね」

「それって、つまり……」

「君にも覚えがあるんじゃないのかい？私と違つて、見える側なのだろう？」
「……大変だつたんですね」

美南は、自分の軽率さを恥じた。

軽く落ち込んでいる様子を見て、思うところがあつたのだろう。

多貴子はだが、と付け加えた。

「だが……彼女は一人ではない。今の彼女には、多くの友人達がいるからねえ」「五行院は、そういうはぐれ者の受け皿でもある。実際、俺もそうだからね」「え？ マツチさんもそういう経験あるんですか！？」

「あーダメダメ、俺の情報はトップシークレットだ。簡単には渡さないよ」「ええー！ 教えてくださいよー！ 同じ部署のよしみじやないですかー！」
「君は勝手についてきただけだろう」

「そんなー！」

多貴子はクスッと笑い、再び黒海に視線を戻す。

影爪を纏つた手で、彼女は要石に張られた札を丁寧に剥がしていた。

「……できました。これで、黒結界の力も弱まるはずです」

「やれやれ、ようやく任務完了か」

「長かったですね〜」

「何を言っているんだい。これは第一歩に過ぎないよ。この街には、あの怪異に守られた要石がまだいくつもあるんだからねえ」

「ええ!? これだけじゃないんですか!?」

「まだまだ、任務は始まつたばかりというわけか」

美南は悲鳴を上げ、正親は肩をすくめた。

しかし、多貴子は好奇心に胸を躍らせていて、黒海はどこか楽しげに笑っている。

『なあ、お二人はん。ウチら、結構いいチームなんとちやう?』

『えんらえんら!俺は楽しかったぜ! 若えやつらと組むのも悪くねえな!』

『拙僧は……まあ、黒海が楽しいのであれば、特に言うことはありません』

『んだよそれ。黒海ちゃんはともかく、お前自身はどうなんだよ』

『我欲は持たないのが僧侶ですので』

『ま、真面目な坊さんやな〜……。でも気持ち分からなくもないわあ』

『なんだよ〜、お前ら揃つて相棒大好きかよ。……まあ、俺もだけどよ』

契約妖怪達も、和気藹々とした雰囲気だ。

出会つたばかりの彼らだが、この一晩の戦いが、決して浅くない絆を育んだのだろう。

「また、一緒に組むことがあるかもしませんね」

「その時はもつと、街に近いところがいいですね！任務の後に、ラーメンとか食べたいです」

「それはいいねえ。丁度、ここに社会人もいることだし、奢つてもらおうじゃないか」

「オイオイ勘弁してくれよ。……あまり高いところじゃなければね」

気がつけば、もう日が昇り始めている。

木枯らしに秋の深まりを感じながら、四人と三体は下山していくのだった。

幕間 「先輩と後輩」

夕刻、とある街角の路地にて。

僕、仮面ライダー妖狐はとある怪異と戦っていた。

「トオオオオーン!!」

「つとと、危ない！」

「トッ!!」

振り下ろされた刀を回転しながら避けると、キツネビシューターを撃ち込む。

弾丸は包帯だらけの体に命中し、火花とともに真っ白なそれが黒く焦げる。

「トンカラアアア!!」

「もしかして怒ってる？」

『間違いないコンね。でも、あいつにボクらが怒られるいわれはないコン！』

『そうだね。お前の悪行もここまでだ！『怪人トンカラトン』!!』

僕がシユーターを向ける先には、全身を包帯で覆い隠し、両腕から刀を生やした怪人の姿があつた。

“怪人トンカラトン”。

逢魔ヶ刻、人通りの少ない通りに自転車を漕ぎながら現れる、都市伝説の怪人だ。

外見は刀を背負つたミイラ男のような姿をしており、自分の姿を見た相手に『トンカラトンと言え』と脅すと噂されている。

ここでちゃんと彼の名前を呼べれば、何もせぬ通り過ぎていく。

ただし名前を間違えたり、或いは「トンカラトンと言え」と言われる前にその名前を口にしてしまった場合、背負つた刀で斬りつけられてしまう。

そして斬られた人は全身を包帯で覆われ、トンカラトンの仲間にされてしまう……というのがこの都市伝説の概要だ。

今、目の前にいるのは間違いなく噂のトンカラトン。

五行院からの情報によれば、何件かの被害を確認しているらしい。

討伐命令を受け、僕は晴矢さんと共に指定された場所へ急行。

トンカラトンを発見し、交戦を開始したのが10分ほど前の事だ。

「トオオン……トン、カラ、トオオオン!!」

「その攻撃は既に見切つた！」

トンカラトンが重心を落とし、居合切りのような動きで勢いよく踏み込んでくる。

その動きはこの戦闘で、トンカラトンが何度も見せていたものだつた。きつとクセのような、或いは彼にとつての必殺技のようなものなのだろう。

何度も当たつて、地面を転がる羽目になつた。
でも、もう見切つた！

素早く振り抜かれた刃が届くより一瞬早く、僕は地面を蹴つてそれを避ける。
「トツ!?」

『今コン!!』

「最大火力、行つけえええ!!」

トンカラトンの頭上に飛び、僕は素早くベルトのレバーを引き、そのまま押し込んだ。

『妖火チャージ！妖火意全カーラー！』

『キツネビ必殺！妖火意バースト！』

妖狐脚撃

炎に包まれた脚で、トンカラトンの頭を踏みつける。

トンカラトンはそのまま体勢を崩し、地面に倒れて燃え上がつた。

「トオオオオオツ!!トツ、トン、カラ……トンカラアアアアアアツ!!」

炎は瞬く間に全身を包み、トンカラトンは断末魔と共に爆散した。

残されたのは白煙を上げて転がる、黒いアヤカシチャツカーダけ。
それを拾うと、多貴子さんから貰つたジップロックに入れる。

『回収完了コン!!』

「あとは晴矢さんと合流して……」

立ち上がり、周囲を見回そうとしたその時、重たいマフラーの音がブルルンと響いた。

『トンカラアアアアアア!!』

「逃がさんッ!!」

振り向くともう1体のトンカラトンを追跡する晴矢さん、もとい仮面ライダー鬼丸の姿があつた。

愛車の馬身紺剛を駆り、夜叉だけに鬼気迫る形相でトンカラトンに迫つている。

一方、追われているトンカラトンの下半身は自転車と融合したような姿になつており、バイクに劣らない速度で爆走していた。

「妖狐！そいつの足を止めろ！」

「は、はい！」

僕に気づいた晴矢さんはそう言つて、ハンドルを強く握つた。

「止まれえええ!!」

「トンッ！カラッ！トットオン!!」

僕はトンカラトンの足元に何発か火球を放つ。

しかし、トンカラトンは曲芸でもするかのようにそれらを躱しながら進み続ける。

それならドライバーのチャッカーを抜き、シユーテーの台尻に装填。今度は前輪に

狙いを定める。

『シユーター！キツネビ必殺！』

「本日二度目の、最大火力！」

妖狐燐火弾

トリガーを引いた直後、狐の顔の形をした火炎弾が勢いよく発射され、トンカラトンの前輪に命中した。

「トトオン！？」

「でかした！」

前輪が爆散し、バランスを崩すトンカラトン。

鬼丸はそのままレバーを操作すると、ドライバーから溢れた妖火でバイクを包み込む。

「ブチ抜くぜ、テメエの恨みごとな！」

『ヤシャ必殺！妖火意ブースト！』

夜叉蒼炎轍

限界まで加速した馬身紺剛が、トンカラトンを空中へ撥ね飛ばす。

そして落下してきた瞬間を狙い、綺麗なジャックナイフを披露しながら後輪で殴りつけ、その五体を大地へと叩きつけた。

「トンガツ!? ルアアアアアアアアアッ!!」

結構痛そうな顔で爆散した……!?

な、なんてデンジャラスな技なんだ……僕にはとても真似出来ないや……。

「任務完了、だな。よくやつた」

「え? あ?、はい……どうも……」

呆気に取られている僕を他所に、晴矢さんはバイクを降りて変身を解いていた。
僕も周囲を見渡して、変身を解除する。

「まあ、その……なんだ……。出会った頃に比べれば、マシにはなってきたんじやないか

?

「ツ!? それって?」

思わず晴矢さんの顔を二度見する。

もしかして今、褒められた?

褒められてるよね? そうだよね!

『素直じやないコンね。晴矢は意外と恥ずかしがり屋さんなのコン?』

「よ、余計なお世話だチビギツネ」

『コワポンと顔を見合わせると、晴矢さんは思いつきり顔を逸らした。
チビギツネじやないコン! ボクにはコワポンって名前があるコン!!』

「とにかく、支部に戻るぞ！」

「あ、待つてくださいよ！」

バイクを押しながら足早に進んでいく晴矢さんを追い掛け、僕らもその場を後にす
る。

ジドリくんを倒してから1週間後。

僕は仮面ライダーとして、街に潜む怪異と戦う日々を送っていた。
その後も様々な怪異と遭遇したけど、戦う身ともなると彼らが文字通り『恐怖の対象』
であることを全身で実感する。

中には噂の印象とイメージが全然違うのもいたし……。

例えば、『人喰いランドセル』。

自分のランドセルの色に不満を持つ子どもがいて、それを謎のおじさんが取り替えて
くれるという話だ。

おじさんが子どもに渡すのは人喰いランドセルで、夜中になると子どもを捕食して何
処かへ消えてしまう……という恐ろしい怪異なんだけど、見た目が思つてた以上に気持
ち悪かつた。

ギラギラ光る目と鋭い歯の並んだ大きな口を持つランドセル、というビジュアルは本
の挿絵だとシユールだが、実際この目で見るとかなりグロテスクだつた。

しかも本体である『ランドセルおじさん』と合体して怪人の姿になつた時は、もう見
た目が邪悪なコラ○ヨとしか言いようがないものに成り果てていたし……。

ただ、強さはヤマノケほどではなかつたのが幸いだつた。

最後は口の中に火球を命中させて爆散。大きな口が仇となつた形で決着だ。

他に印象的だつたのは、立体道路を繩張りとしていた100キロババア。
顔がとにかく怖いのなんの。それが100キロもの超スピードで追いかけてくるん
だからたまつたもんじやない。追い回された時なんか、しばらく夢に出てきたくらい
だつた。

こつちはバイクでの激しい競り合いの末に、晴矢さんが『土御門流・破魔之流鎧馬』で
ヘッドショットを決めて撃破。

そんな感じで、怪異退治は順調に進んでいた。

「今回も、被害者が出なくてよかつたですね」

「ああ。祓人はらえびとは何も、俺たちライダーだけじゃないからな」

「祓人……つて何でしたっけ？」

「五行院に所属する、妖怪退治が仕事の職員だ。俺やお前も含まれている」

「そうなんですか!?」

自覚はしておけ、と針を刺してくる晴矢さん。

付き合いはまだ数日だけど、出会いた頃に比べてちゃんと仲間だつて思つてもらえてるみたいだ。

もしかすると、今の方がこの人の素の部分なのかもしれない。出会い方が悪かつたら、当たりが強かつたのかも。

「祓人の中でも選ばれた奴らが、仮面ライダーになれる。変身はしないが、妖怪と一緒に力を合わせて戦つてる連中は少なくないぞ」

「そういう人たちが、この街にも？」

「そうだ。調査部を護衛しつつ、主力である俺たちライダーが来るまで現場に張り込み、一般人を守つている。いわゆる縁の下つてやつだな」

そう言つて晴矢さんは、前方を指さす。

指さした先には、黒服を着た五行院の職員さん達が事後処理を始めていた所だつた。

「ちょっと、お礼いっきます」

「ああ」

僕は晴矢さんに断つてから、職員さん達の方へと走り出した。

□□□

篝火の背中を見送った直後、懐から五行フォンの着信音が響く。
確認すると、六道先生からだつた。

「はい、こちら土御門」

『頼人くんとは、上手くやれてるみたいだね』

『相変わらず覗き見ですか。俺たちのプライバシーも考えてくださいよ』

『黒海や多貴子のお陰で、黒結界が前より薄まってるからね。ピント合わせのついでに、先輩風吹かせる晴矢を眺めてやろうかと思つて』

「暇なんですか？」

相も変わらず、暇さえあれば千里眼で生徒たちの様子を覗き見てる恩師に、呆れて溜め息が出る。

この人、風呂場覗きの前科とかあつてもおかしくないんじやないか？

「つて、そんな事はいいんですよ。それより……篝火が夢に見るっていう、狐のライダーについては掴めたんですか？」

『今、本部の記録を遡つてるところ。これがなかなか見つかなくてさ』

淡々とした声と、ページをめくるような音が聞こえてくる。

おそらく、書庫の資料を見ながら電話してきているのだろう。

篝火がライダーの道を選んだ理由。かつて幼いあいつを助けた、狐面の戦士の存在。

十中八九ライダーであろうその戦士は、果たして何者だったのか。

出来ることなら会わせてやりたいし、そのためにも手がかりは掴んでおきたい。

『各地におけるライダーの行き来は、その土地の支部が記録しているはずだ。けど、御景支部に狐妖怪のライダーが来ていたという記録は残されていないんだ』

「一人もいなんですねか？」

『妖狐一族は妖怪の中でも格が高い。支部に直接訪れていなかつたとしても、目立つはずだ』

五行院の関係者は支部のみならず、各地の神社仏閣に駐在している。

それぞれが担当地区の監視を行つてゐるため、記録に漏れがあるとは考えにくい。

ここでふと、前から疑問に思つていた事を思い出す。

『そういえば、前から聞きたかつたんですが……『妖狐』は狐妖怪のライダーの中でも、特に格式のある存在なんですよね？』

『まあ、そうだね。少なくともその名前は、決して軽くない。これまで妖狐の名を継承したライダー達は、皆それぞれ何かしらの形で名前を残してゐるくらいさ』

『それほどの格式があるのに、どうして妖狐の資格者は無作為に選ばれるんですか？』

篝火達とあのチビ狐、もといコワポンを引き合させた呪物『交霊紙の原典』。

これを手にして降霊術を行つた者には、妖狐の名を継承する資格が与えられる。

改めて確認しても、選別方法が格式とはかなり程遠いものに思えて仕方ない。

格式があるというのであれば、もつと厳肅な試練を以て選別すべきではないだろう

か？

『僕も昔はそう思つてたよ。伝統つて言葉は、虚飾された非効率と非合理の塊だつてね』
「先生、そういうの嫌いですもんね」

『カビ臭いジジババの理由のない拘りとかクソくらえでしょ？形骸化してるなら尚更、
無くともいいと思うよ』

あつけらかんと言つてのける六道先生。

物言いはアレだけど、俺は先生のこういう所が嫌いじゃない。

この人のお陰で、俺達みたいな若手が助かつてている部分も大きいわけだし。
「では、先生はこの選別方法に何かしらの意図があると？」

『ああ。理由は何となく検討がついてる。けど、説明は難しいかな』

「どういう事ですか？」

『占いとは偶然を読み解くものである、つて言うじゃないか』

「余計に分からぬのです……」

確か、占術の基本原則だつたか。

俺は占術科ではないのでよく分かつていないが、全ての偶然には意味がある、という
ような教えたのは覚えてる。

『まあ、予知とかト占の分野だからね。知見があるのとそうでないのとで、全然視点が

異なるのさ』

「なら、俺の専門外ですね」

『ま、ともかくこつちは僕に任せてよ。君は君の任務に集中すればいい』
『そうします。次にかけてくる時は、無駄話以外にしてください』

『無駄なんかじやないさ』

先生は電話の向こうで、クスッと笑った。

こつちの事視えてる上で、別段急務でもないおつかいを頼んでくる人がどの口で
……。

今度本部に戻つたら、戸棚に隠してあるスイーツ勝手にパクつてやろうか。

『初めてできた後輩なんですよ。大事にしなよ?』

「……言われるまでもないですよ」

俺は通話を終えると、篝火の方へと視線を向ける。

どうやら丁度、終わつた所らしい。篝火は、俺に向かつて手を振つていた。

「晴矢さん! 支部まで送つてくれるらしいですよー!」

「待つてろー、すぐ向かう」

手を振り返しつつ、俺は足を進める。

まつたく、騒がしいやつだ。